



なくした鍵で
あけられたもの

たなかひまわり

なくした鍵であけられたもの

<http://p.booklog.jp/book/91155>

プロローグ
サイクリングロード
モノクロの風景
家出
ルームシェア
過去の傷
導き
結ばれぬ恋
余命
無くした鍵で開けられたもの

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91155>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91155>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

プロローグ

私は人の心が読める。

その能力は、単に考えている事が想像できるというニュアンスのものではない。

目を瞑ると、今見ている光景がモノクロになって脳裏に浮かび、人の表情だけが変化し、言葉を放つ。

表と裏の顔を巧妙に使い分ける人々。この世の中にはいろいろな性格を持った人がいるから、その手の人間がいたって何の不思議もない。

だが、自分の身近にこれ程までに存在しているとは思っても寄らなかった。

何でもかんでも「あなたが正しい」と、さも味方のような振る舞いをする人は、裏では人を馬鹿にし、嘲笑っている。

心配顔で何かを聞きだそうとする人は、そこから暇つぶしの種がないか探りを入れ、何かを得たと同時に方々に噂を流す。

マイナスイメージを極端に嫌う人は、本当は鋼の神経を持っているくせに、他人の前で弱者を演じる。

何が本当で何が嘘か。目に映るもの、特に優しさに満ちているものほど裏があるのではないかと思えてくる。

それまでの私は、バカが付くほどまっすぐに人を信じていた。

自分を取り囲む人々を疑うくらいなら、信じて裏切られた方がいいと、綺麗事を並べては浮かれていた。

そんな私に、ある能力が芽生えた。

その能力によって、これまでに抱いていた周囲に対する固定観念を覆す、多くの現実を突きつけられた。悪夢でも見ているかのようなだった。

私の世界は一転し、失意の底に突き落とされた。

信頼は、裏切りという凶器でずたずたにされた。

胸の奥の柔らかい部分を抉り取られた私は、人と心を通わせる事を一切やめた。

サイクリングロード1

高校二年の九月、十七歳の時のことだった。

部活の帰り、私は友達桐島香里と二人で、学校から程近い川沿いのサイクリングロードを歩いていた。

通学に必ず使っている道で、樹齢三十年の桜が両岸から川に向かって枝を伸ばし、春には数百メートルもの距離で淡いピンクのトンネルを作る。今は秋なので、深緑の葉が頭上から私達を見下ろしている。葉の隙間から見える空には、まだらに割いた綿のような雲が橙色の光で彩られ、地上には火照った体に丁度いいくらいの風が吹いていた。

「今日の練習はめちゃくちゃハードだったねー」

ちょっとやそっとの練習ではスタミナの切れない香里が、足元をふらつかせ、くたびれた声を出した。おそらく、本当に疲れているわけではないだろう。いつもの目力が残っている。私達はバレー部だった。

「ホントだよねー」

私も彼女に調子を合わせ、ふらついてみせた。

そこへ、後ろから来た自転車が、けたたましくベルを鳴らした。

香里と私はすぐに道を開けたのだが、自転車のベルは鳴り止まない。彼女の表情が瞬時に変わり、振り向き様に「うるさいなあ」と小声で文句を言った。

「鳴らし過ぎだよね」

私は香里に同調しながら、彼女の背中にそっと手を当てた。眉間に皺を寄せた彼女をクールダウンさせる為だ。もし、自転車の主が何か言って来たら、香里は喧嘩をしかねない。

彼女は可愛いというより綺麗な部類に入る女の子で、男女隔たりなく友達がいて明るく活発な反面、非常に短気な一面を持っていた。自分から仕掛けることはしないが、売られた喧嘩は必ず買う。特に、自分に非がない時の反撃は半端ではない。中学の時に一年間だけボクシングジムに通っていたとかいらないとか。以前、本人にその真相を確かめたところ、「あんな激しいスポーツ、疲れるからやらない」と否定していたが、敵を前にした時の構えはボクサーそのものだった。そして、強い。私は時々、香里が女だということを忘れる。

「恭子先輩、機嫌悪くなかった？ 八つ当たりっぽくボール投げてた気がする」

自転車から目を離さない香里に、私はさっきの話の続きをした。

「ホントだよ。尋常じゃないよ、あの剛速球」

自転車から喧嘩をしかけられることもなく、香里もこの一件を問題にしなかった為、会話が元に戻った。

私はホツとして、彼女に気付かれないように小さく鼻から息を吸い込み、その分だけ小さく息を吐いた。

「香里、集中打受けてなかった？」

「絢那でしょ、それ」

「お互いだね」

「恨まれてんのかね、私達」

「なんでー？ 何にも悪いことしてないよ」

先輩後輩の壁はあるものの、このバレー部ではフランクな会話の出来る雰囲気があった。何か気に触るような事をしていたら、誰かしらが直接忠告してくるはずだ。頭の切れる恭子先輩なら尚更、後輩の過ちを角を立てないように伝えてくるだろう。だから、集中打の原因が、自分達に関係しているとは思えない。

サイクリングロード2

「何かあったのかなあ、恭子先輩。部活が始まる前、一人でふさぎ込んでたんだよね」

「そうなんだ？ ……あ」

香里に恭子先輩の様子を知らされ、私は二、三日前の放課後に、校舎の裏手にある『チューリップ』で遭遇した出来事を思い出した。

『チューリップ』とは校内にある広場のことだ。その名が付けられているが、この広場に一年中チューリップが咲いているというわけではない。春になると、この広場の象徴のように咲き誇るのがチューリップで、その数はどこかの森林公園を思わせ、入学金のかなりの額がチューリップ代に当てられているらしいのだ。そんな状況から入学時、『チューリップの咲いてる広場に行こう』と誰かが言い始めたのが、『チューリップ広場』になり、夏になる頃には『チューリップ』に略された。右へ倣えが嫌いな人は、あえてチューリップという名前を口にしなかったりするが、友達から『チューリップで待ってる』と言われれば必ずこの広場に来る。

「そういえばね」

「どした？」

一瞬、動きを止めた私に香里が訊いた。

「チューリップで恭子先輩が泣いてるところ見たんだよね」

「いつー」

「一昨日だったか、その前だったか」

「なんでー」

香里はいちいち素っ頓狂な声を出しながら語尾を伸ばす。

「知らないよ。でも、木村先輩が凄く怖い顔して校門から出てったんだ。私、忘れ物したのに気が付いて、戻って来たらすれ違ったの」

木村先輩は、恭子先輩と付き合っているサッカー部のキャプテンだ。細身で背が高く、髪は襟に掛かるくらいの長さで、ジェルでセットしたようなウエーブがかかっている。日本人離れした

顔をしているなど思っていたら、やはり母親がスペイン人のハーフだった。

二人が付き合う前、木村先輩には彼女がいた。が、恭子先輩の一目惚れで、あの手この手の頭脳作戦で、見事彼女から奪い取った。反感を買っていた時期もあったが、最終的に選んだのは彼だからと弱みを見せなかった。しかし、現世の間だけで因果応報が発生したとでもいうのだろうか。やはり、人を不幸にしてまで奪い取った幸せは、そう長くは続かない。

「一緒にいたのかな」

「そうなんじゃない？ 私が見た時はもうバラバラだったけど」

「別れの瞬間を目撃？」

「かもね」

「マジで？ どうりで最近、口数が少ないと思った」

「香里もそう思った？」

「無口な恭子先輩なんて普通じゃないもん」

恭子先輩は、そこにいるだけで周りの空気が華やぐくらい存在感のある人だった。賑やかな集団の中でも絶えず声を響かせているせいでもあったが、姉御肌で誰からも頼りにされ、試合ではムードメーカーとなって皆を引っ張っていた。

サイクリングロード3

「ずっと揉めてたんじゃないかな」

「なぜに？」

香里は語尾を上げて、変なイントネーションで言った。

「二股掛けてたのがバレたんだって。三股じゃないかって言ってた人もいたけど」

風の噂は、尾鰭をつけて瞬く間に広がる。

「え？ どっちが？ 木村先輩？」

「ううん、恭子先輩」

「うひゃあ、そりゃいかんねー」

「こっ酷くなじられて、軽蔑されてポイよ」

「見てみたいだね」

「だいたい、こういう場合はそうでしょ」

「そうなの？」

「自業自得」

「あら、キツイ」

「だって、二股だよ？ 許されていていい訳がないよ」

「恭子先輩、美人だから誘惑多そうだもんなあ」

「だからって、同時進行しちゃダメでしょ」

「あんたは男に一途だもんね」

知っている限りの情報と自分の理念を語っていたら、香里が標的を私に変えた。

「当たり前でしょ。何があっても一人の人に想いを貫くのがホントの愛ってもんじゃない。好きな人がいるのに違う人ともなんて私には考えられないよ」

勢いは治まらない。これだけは自信を持って言える。しかしだ。

「ホントの愛か。魁とはうまくやってんの？」

「う、うん」

その名前を出されると、途端に歯切れの悪い私になる。

井原魁は、高校一年の夏から付き合っている私の彼だ。野球部でキャッチャーをしていて、がっちり体型、木村先輩に負けず劣らず濃い顔をしている。野球となると他の事が目に入らなくなり、試合が近かったりすると独り言のように野球の話しかしない。デートもプロアマ問わず野球観戦が多く、それに同行している私は、色白とは程遠い肌になってしまった。でも、魁の楽しそうな顔を見ているのが嬉しくて、彼の野球解説をいつも夢中になって聞いていた。が、それも高二になるまでの話だった。

「やってるよ。つかず離れずいい距離保ってんだ」

「毎日会ってないの？」

「会ってないよ。クラス違うし、部活あるし。最近はお互い自由にしてるから」

お互い自由になっている、というのは強がりだった。

魁は、一人で自由気ままに行動するのが好きだった。だが、それが出来ない現状がある。コンビニのバイトや友達との付き合い、後輩からの相談などで、自分の時間を大幅に削っている。付き合い初めこそ私とも会う時間をたくさん割いてくれたが、無理はそう続くものではない。彼は自分のペースを取り戻すために、私を優先順位が一番最後に持ってくるようになった。

サイクリングロード4

淋しさを抱えながらも、私は我が侘を言う事が出来なかった。言ってしまったら、彼の自由を奪ってしまうことになる。事情をちゃんと話してくれる彼に対し、自分は一番の理解者でいたかった。いや、甘えた事を言って嫌われるのが怖い、というのが本音かもしれない。だから、あまり二人の時間を作らなくなった彼に対し、私は会えなくても平気な振りをする癖がついていた。

「そんなこと言って一。油断してると、誰かに取られちゃうよ」

香里には、私の彼への思い遣りがわかっていない。

「なによ、それ」

「ちゃんと見張つといた方がいいよ。男はすぐよそ見するから」

「魁はそんなんじゃないよ」

魁を弁護している声に力が入らない。彼女として、彼を思い遣るのは当たり前だと自分を納得させていたが、私にはずっと心の中で燻っていた不安があった。

「なんかあった？」

香里が私の気持ちを見透かしたのか、心配顔でこちらを見た。そんな顔をされると、悶々としていた気持ちを吐き出したい衝動が抑えられなくなる。

「あったと言えばあったし、なかったと言えばなかったし」

私はとりあえず、曖昧に答えた。

「なかったら、そんなに浮かない顔してないと思うけど」

香里がすかさず痛いところをついてきた。その言葉は、思い出さないようにしていたある出来事を、ぐいぐいと記憶の先頭へと追いやった。乗り越えたはずの痛みは、心の中にしっかりと根付いている。あの日からしばらく落ち込んで、やっと平静を保っていられるようになっていたのは、何かと自分を忙しくして忘れていたからだ。思い出してしまった今、不安が再び頭の中で渦を巻き始めた。だが、魁に関する愚痴など、彼を信用していないようで言いたくない。

「どうした？ 悩み、聞くよ」

口をつぐんだ私に、香里は追い討ちをかける。（大丈夫、何でもないって言うんだ）という心の声が、弱々しくへたっていく。そして、もやもやが脳から染み出してきて、思考を完全に支配した。限界だった。私は、香里が客観的にどう思うか聞いてみる為だと自分に言い訳しながら話を始めた。

「……あのね、最近、メールしてもスルーされることが多いんだ」

「えー？ いつも一日中メールしてたじゃん」

「前まではね。だんだん少なくなっちゃった」

「相手してもらえないのか」

「野球やった後にバイトでしょ。すごく疲れるっていうから、私にかまっていられないんだと思うんだけど」

「頭ではわかっているけど淋しいよね」

「うん……。でね、いつの間にか何日経っても返信くれないことが増えてきて、今はよほどの急用じゃない限り返信くれないの」

「そっか……。まあ、付き合いが長くなってくると、男はだいたいそういう態度取るみたいだからさ。こいつはほっといても俺のこと好きだから大丈夫、とか言って彼女の事は後回し」

サイクリングロード5

「そうなのかなあ」

「魁だけじゃないと思うよ」

「でも、忙しいのは事実なんだよ？」

魁の置かれている状況を考えれば、コミュニケーションだけのメールに時間を割けないのは理解できる。他の男と彼とでは事情が違う。そう思ったかった。

「魁のこと、かばうね。じゃあ何が不満なのよ」

香里は腑に落ちない顔をした。本当のところ、メールが来ないのが直接の悩みではない。返信がないのは淋しいが、私にとって感情をコントロール出来なくなるほどの問題ではなかった。香里に打ち明け始めてからも、あの時の事を話そうかどうしようか迷っていて、本題に入るのを躊躇した結果がメールの話題だった。

「あのね、ホントはメールのことはどうでもいいんだ」

「ん？ じゃあ、なに」

「この前、魁が女の子二人と一緒にライブに行ったの」

私が本当に心に引っかかっているのはこの事だ。

「え？ 女の子と二人で？」

「ううん、三人」

「ああ、女の子が二人って意味ね」

「うん」

「三人なら別に問題ないんじゃない？」

香里はあっさり言った。男友達の多い彼女にとって、この手の話は特別な事ではない。今はフリーの香里だが、彼氏がいる時もいろいろな男の子といろいろな場所へ遊びに行くので、傍で

見ている私の方がいつもヒヤヒヤしていた。案の定、それが元で別れたことも何度もあった。しかし香里はその度に、「小さい奴だ」と切り捨てた。

「そうだけどね。一緒に行ったうちの一人が、魁の中学の時の元カノだったんだ」

「あらら、それはちょっと穏やかじゃないね」

「野球とバイトで忙しいって言ってたのに、元カノには会うんだと思ったら、なんだかすごく悲しくなっちゃったんだ。私、魁の邪魔しないようにメールを我慢したり、会えないのを必死で堪えてたのに」

「その話、魁から直接聞いたの？」

「違う。元カノって私が時々会う友達の友達だから、その子から聞いたの。『この前、優菜と出掛けた男の子、絢那の彼氏だよね？』って」

「ああ、絢那には余計な情報だね」

「元カノとかじゃなかったら、女の子と二人きりじゃないし、別にいいやって思えるけど」

「ホントにい？」

香里はヤキモチ焼きの私の性格をよく知っている。香里と私とでは正反対のタイプだった。

「嫌なものは嫌だけど！」

私は、やけになって訂正した。

「そうだよ、正直になりなさい」

香里は上から目線で言った。私は少し口を尖らせて、「わかったよ」と答えてから話を続けた

。

サイクリングロード6

「それでね、もやもやして仕方がなかったから、バイト前の魁を捕まえて、『元カノとライブに行ったの?』って聞いたの。そしたら、『行ったけど、三人でだよ。それに元カノって言ったって、そのライブに行きたがってただけで俺に会いに来たわけじゃないし。やましいことしてないよ』って言われたんだ」

「開き直ったか」

「淡々と言われたから、『そう』としか返事出来なかった」

「絢那は魁に強く言えないからね」

「本人がやましくないって言ったら、それ以上何も言えないもん」

「悲しかったー！ って泣き叫べば良かったのに」

「そんなこと出来ないよ」

「絢那は自分の気持ちを押し殺しちゃうんだもんなあ。ストレス溜まるでしょ」

「だって、しつこいとかうざいとか言われるの嫌だし」

私だって、気持ちをまっすぐに表現できたらどんなに楽だろうと思う。

「確かにね。やることなすこと、いちいち文句言われたら、うっとうしいわ」

「そうでしょ？ でも、待ってる彼女がいるのに元カノに会ったりしたら、彼女を悲しませるって考えないのかな」

流れから言って、香里は当然、共感してくれると思いながら話し続けていた。ところが、

「うーん、それはどうだろうね」

と、香里が珍しく言葉を濁した。

「え？ 違う？ 魁は私の気持ちなんてどうでもいいって思ってるのかな」

「そんなことはないと思うけど……」

「メールで、バイト頑張ってるねとか、試合応援してるよとかって、遠回しだけど『私のこと思い出して』っていつもアピールしてたんだ。どうしてわかってくれないんだろう、魁にとって私って何？ って考えちゃうよ。どうでもいい存在になったんなら、はっきりそう言ってくれればいいのに」

私は魁には言えない気持ちを香里にぶつけた。しかし、香里は黙ったままだ。

「私、間違っただこと言ってる？」

私は不安になりながら彼女に答えを促した。

彼女が沈黙する時、私に同意出来ない場合が多い。そういう時はたいてい、きつい言葉が容赦なく飛び出すので、どう反論されるか待っている間がとても怖かった。

香里は、さらさらとした前髪をかき上げると、静かに口を開いた。

「間違ってるかどうかはその人の主観だから、絢那がそう思ったんなら間違っていないんだよ。ただ、遠回しだと男には伝わらないよ。単純明快に伝えないと何が言いたいんだかわからないみたい。やっぱり言葉を選んで、自分の思ってることを直接言った方がいいと思う」

「言葉を選ぶ？」

「うん。男って女が感情剥き出しにしてワーワー言っていると、それが正論でも嫌がるからね」

「正論言っちゃいけないの？」

「感情的なのはね、彼氏に対しては言わない方がいいよ。そんなに不満ならもういい、めんどくせーって思われて、別れに直結しちゃうから」

サイクリングロード7

「そっかあ……難しいね」

「感情をコントロールして、冷静になればいいんだよ」

「私には一番苦手なことだな。爆発はしないけど」

「絢那は繊細だからね。考え過ぎて何も言えなくなっちゃうんだよね」

「こう言ったらあれを否定する事になるとか、これは自分にも非があるから言えないとか、頭の中でぐるぐるしちゃうの」

「ある意味、頭の回転がいいんだろうね」

「ある意味、って何よ」

「褒めてんの」

「どうだか」

とても褒めているようには聞こえない。

「まあ魁は魁で、付き合ってるならもう少し絢那のフォローしてもいいよね」

「うん……」

「でも、そういう細かい気配り、男に期待しちゃダメだよ。一度に一つの事しか考えられないの。友達なら友達、彼女なら彼女、元カノなら元カノって」

「なにそれ、ちょっと嫌だな。元カノのことは出来たら考えて欲しくない」

「例えばの話よ」

「例えばでも、このタイミングで言わないでよ。ぐさっとくるから」

「現実にそうだったんだから、目を逸らさない方がいいと思うけど」

「傷口に塩を塗るようなことしないでよ。ホントに辛かったんだから。眠れないし、ご飯も食べられないし」

「だけど、魁ってそういう奴なんだよ。性格とかはそうそう変らないからね」

「そうだけど……」

「もし、表面上は絢那の言う通りにしてくれたとしても、心の中の自由までは奪えないよ。自分のやりたいようにしたいのが人間だから」

「手厳しいね」

「だから、今、絢那が考えなくちゃいけないのは、それでも魁のことが好きかどうかなんだよ。極端に言えば、魁の気持ちなんてどうでもいいの。そういう魁が許せないんだったら別れればいいし、魁が何しようはずっと好きでいたいならそうすればいいし。絢那にはそれを選択する自由があるんだから」

「私の気持ち次第か……」

「そうそう」

確かにその通りだと思った。魁のすることに我慢が出来ないのなら別れればいい。でも、こんなにも魁を求めている自分の心を羽交い絞めにするようなこと、私には出来ない。

「小さい事を気にしないようにしないと、この先も辛くなっちゃうよね。魁と付き合っていくなら、もっとおおらかにならないと、いくら魁のことが好きでも悩んでばかりなような気がする」

「そうだよ。それじゃ恋してもつままないでしょ？ でも、絢那がそんな風に気にしちゃうのって女として生まれたからなんだよ。女って小さい事まで気が付く生き物だから子育てが出来るんだって。細かいところにまで神経がいくから家族の安全を守れるって何かに書いてあったよ」

「それ、恋愛中には必要ない神経だね」

「絢那には特にね」

香里の知識多彩で理論的な言葉には、いつも納得させられてばかりだった。

私達は最寄の駅には向かわず、川沿いをひたすらまっすぐ、ゆっくりと歩いていた。橙色だった雲は空と共にグレー一色になり、風はいつの間にか止んでいた。

サイクリングロード8

「ただ、一つ気になったんだけど」

私が空を見上げていると、香里が声のトーンを少しだけ下げて言った。

「ん？」

「三人でっていうの、怪しい気がする」

「どういうこと？」

私は立ち止まって、香里の方に向き直った。私が一瞬にしてピリピリしたのが伝わったのか、香里は慌てて、「あ、いやいや、何でもない。うん、気にしないで」と、否定した。

「何よ、そう思う根拠があるんでしょ？ 言いなさいよ、気になるから」

「そう怖い顔しないでよ」

「言ってよ」

「わかった、わかったから」

香里は、仕方ないな、という顔をした。

「絢那の友達は『優菜と出掛けた男の子』って言ってたんでしょ？」

「うん」

「複数で行ってたとは言っていないんだよね？」

「え？ まあ、そうだけど」

「何人かで行ってるんだったら、わざわざ告げ口する必要ないと思うんだ。言うとしたって、優菜達って言い方しない？」

「じゃあ、元カノと二人だったってこと？」

「魁は絢那に問い詰められて、やばいと思ったから三人でって言ったんじゃない？　そう言えば大丈夫だろうって」

「ええー？　嘘つかれたの？　私」

「うん」

「でも、嘘ってつじつまが合わないから何となくわからない？　この時はそんな感じしなかったよ？」

「あのね、まるっきり嘘だと罪悪感で動揺しちゃうけど、嘘とホントの事と混ぜて話すと罪悪感って少なくなるんだって。罪悪感が減れば全部が嘘じゃないぞって自分を正当化出来るから、うまく誤魔化せたりするんだよ。だから三人でっていうのは嘘だけど、元カノとライブに行ったのはホントの事だからいいだろ？　みたいに」

「うそ……すごいショック……」

「まあ、私の憶測だから。その子も元カノと魁と一緒にいたことを強調したかっただけかもしれないし。気にすんなって」

香里は声のトーンを戻し、私の肩をポンと叩いた。その軽い衝撃に弾かれるように、私は感情を爆発させた。

「三人で行ってたとしたって、元カノと一緒にだったのがすごく嫌だったんだよ。それが二人きりだったなんて耐えられないよ。まさか、復活しそうなってことはないよね？　でも、メールが魁から来なくなっちゃったのって、そのせいだったのかな。魁はまだ、元カノのことが忘れられないのかな。ねえ、香里、魁が元カノとヨリ戻しちゃったらどうしよう」

心を大きく乱された私はやっとの事で保っていた平常心を失い、自分の発した言葉で更に不安をかき立てていた。それをじっと聞いていた香里が、私の目を見ながら諭すように言った。

「自分の彼のこと、信じなくてどうすんのよ」

「そうだけど……」

「今の絢那、魁のことはまるっきり疑って、私の言う事を鵜呑みにしてるよ」

「だって、香里の話って妙に信憑性があるんだもん」

「そう？ それなら言うけど、男は魁だけじゃないから、信じられなければさっさと諦めるのも手だよ」

「そんなぁ……魁以外考えられないよ」

「もう、優柔不断だなぁ。疑ったり、魁以外考えられないって言ったり、どっちなのよ」

「……魁以外、考えられない」

「でしょ？ だったらひたすら信じなきゃ」

「ホントに信じていいと思う？」

「うん」

香里は満足気にニコリと笑った。

サイクリングロード9

嫉妬が猜疑心を生んでいる。ネガティブな世界に引っ張り込もうとするエゴの声を聞いてはいけないのだ。妙に悟り切った香里に比べ、同じ年でありながら自分はなんて未熟なんだろうと思った。

「そうだよ。ひたすら信じるしかないよね。自分の好きな人のこと疑ってたら救われないよね」

「そうだよ。とことん信じなさい」

「うん。信じる」

私はまだ半ば無理やりだったが、元カノは友達、元カノは友達……と、心の中で唱えながら前向きになろうと決意した。

川を見下ろすと、小さな中州に二羽の鴨がいた。間もなく一羽が水の上を泳ぎ始め、もう一羽はそれをじっと目で追っている。その距離はどんどん離れていくのに、中州の鴨は後を追って泳ごうとしない。

「どうして追いかけないんだろう。追いかけないと独りぼっちになっちゃうよ」

香里に言うでもなく、まして鴨に声を掛けたというのでもなく、私は小声で呟いていた。中州の鴨は、あえて一羽になりたくて留まっているようにも見える。私はなぜか、その鴨から目が離せなかった。

その時だった。閃光が走ったような耳鳴りと共に、こめかみの辺りに激しい痛みを感じた。私は反射的にぎゅっと目を閉じ、痛む箇所を手で押さえた。暗闇の中、脈と共に波打つ血液の流れに合わせ、周囲の音が大小交互に耳を圧迫する。じっとしていたはずの鴨が羽をばたつかせ、その音だけがやたらと強調されて聞こえる。先を歩いていた香里が私の異変に気が付いたのは、中州の鴨が、もう一羽の鴨とは反対方向に騒がしく飛び立った後のことだ。

「あれ？ 絢那？ どしたの？ 絢那！」

慌てて駆け戻ってきた香里の甲高い声が、更に痛みを助長する。

「顔が真っ青……大丈夫？」

香里の問い掛けに頷こうとした瞬間、胃の中の物が逆流し、嘔吐した。私は立っていられなくなり、脱力しながらその場にしゃがみこんだ。

「絢那？ 絢那！」

香里が私の名を叫び続ける。答えようにも吐き気が治まらず、まともに息が出来ない。

「誰か呼ばなきゃ……どうしよう……絢那しっかりして！……」

パニックに陥っている香里の声がだんだん遠くなっていく。一瞬だけ痛みが引いた気がして微かに目を開けると、視界に映った灰色のコンクリートが徐々にぼやけて見えなくなった。

モノクロの風景1

遠くに救急車のサイレンが聞こえ、近づくと同時にサイレンが止んだ。

近所に住む一人暮らしのお婆ちゃんに何かあったのだろうか。自家製の胡瓜のお漬物をくれる小柄でぷくぷくと太った笑顔の優しいお婆ちゃんに、最近、会っていなかったような気がする。もっと、気に掛けてあげればよかった。

様子を見に行かなくちゃ……。

そう思った私は今来た道を引き返し、お婆ちゃんの家に向かおうとした。だが、足が思うように動かない。

どうして足が動かないの？ 体も重い。早くお婆ちゃんのところへ行かないと……。

息だけが上がり、視界がだんだん濃霧で遮られていく。すべて見えなくなると、今度は耳に入ってくる外界の音が変わった。がさがさと布を擦るような音だ。何の音だろうか、耳元で鳴っている。その音に集中していると、今まで目を閉じていた事に気が付いた。私はその目をそっと開けた。

「絢那？ 気が付いた？ ああ、よかったあ。丸一日意識が戻らないんだもん。心配したよー」

私はベッドの上で横になっていた。その横で、香里がベッドに密着した状態で前屈みになり、私を見ていた。

香里が動くたびに、糊がしっかり利いた布団カバーががさがさと音を立てる。先程聞こえてきた音だ。救急車の音も今度ははっきりと聞こえ、再び近距離で止まった。点滴の管とベッドの周りを囲んでいるカーテンを見て、私はようやく、ここが病院であることを悟った。

安堵の声を漏らしている香里の横に、もう一人立っている。まだ意識が朦朧としている為、それが誰だかわからない。

「大丈夫か？ びっくりして飛んで来たからバイトさぼっちゃったんだぞ」

聞き慣れた低い声……魁だ。

「あたし一人じゃ、どうしたらいいかわかんなくて魁に電話したんだ」

「あの時、まだ学校にいて良かったよ。行ったらお前、真っ青な顔してぶっ倒れてるし」

「魁が救急車呼んでくれたんだよ。良かったね、魁が来てくれて」

体から余計な力がすーっと抜けていくのを感じた。魁が私の為に動いてくれたという事が何よりも嬉しかった。

「あ、そうそう。昨日の晩、叔母さんも来てたんだ」

魁が思い出したように言った。

私は両親から離れて東京の叔母の家に居候している。目だけを動かして周りを見渡したが、確かに叔母の姿が見えなかった。

「叔母さん、今日も朝から仕事があるっていうから、何かあったらすぐに連絡しますって言って帰ってもらったんだよ。私達は土曜日で学校休みだからって」

身内である叔母がここにいない理由を香里が説明した。

「すごく恐縮してたけど、徹夜して叔母さんまで倒れちゃったら大変だしね」

「先生も、とりあえず急にどうこうってことにはならないでしょうって言ってたし」

「だから、無理やりタクシーに乗せて帰ってもらったから」

何でも一手に引き受ける魁のやりそうなことだ。

「今日も来るって言ってたんだけど、仕事に行ってからにしてくださいって強制しちゃった」

香里も同様だった。この二人から言われたら、叔母も反論出来ないだろう。

「あ、香里。叔母さんに、絢那が気付いたから安心してくださいってメールしといて」

「うん、わかった。他の患者さんいないからここでいいか」

魁に頼まれた香里は、カバンから携帯を取り出し、叔母に連絡を入れた。

モノクロの風景2

黙って話を聞きながら、私は大好きな二人がそばにいてくれる安心感に浸っていた。二人とも優しい笑顔をしている。特に魁だ。魁が私を見て微笑んでいる。ずっと長い間、欲しても手に入らなかったものだ。その笑顔が心の中に占めていた不安を拭い去り、気持ちを軽くした。それは、いつからか無くしていた感覚だった。無くしていることすら気が付かなかった。不安な状態が当たり前になり過ぎていた。

そんなことを考えながら二人の顔を眺めていた。いつまでも見ていたかったが、軽い疲労感が否応なく私の瞼を重くする。私はまた少し眠ろうと思い、穏やかな空気に包まれながら静かにそっと目を閉じた……はずだった。

その瞬間、経験したことのないものを目の当たりにし、私は驚愕した。

普段なら光の残像しか映らない瞼の裏に、モノクロの情景がはっきりと浮かび上がったのだ。そこには、今、目の前に立っている香里と魁がいる。だが、その二人の表情は、目を閉じる前に見たものとは全く異質のものだった。私は怖くなって咄嗟に目を開けた。

「どうした？ 急にでっかい目開けて」

魁がきょとんとしながら笑っている。

「ハトが豆鉄砲を食らったような顔してるって、在り来りなこと言ってる？」

香里も親友であるがゆえの毒舌を振るった。

気のせいだったのか……。

私はこの出来事を自分が納得できる言葉に変換出来ずにいた。戸惑いながら小さく首を横に振って、大丈夫、と意思表示した。

今のはきっと幻……。

私はもう一度ゆっくり目を閉じた。だが同じだった。しかも今度は二人の声まで聞こえてきた。『つい、魁に電話しちゃったんだよね。他の子が学校に残ってるのわかってたけど、魁に会いたかったんだもん。私が魁のこと好きだってバレなきゃいいけど。この子、鈍感だからわかんないよね。おかげで昨日は一晩中、魁と一緒にいられたわ。叔母さんもうちらの策略知らないで帰ってくれたし。ライブだって三人で行ったんだよ。魁に不信感抱かせてギクシャクさせようとし

たら、まんまと信じてるの。バカみたい』

『メールがこないとあって愚痴るなよな。最低限のメールはしてるだろうが。女友達と遊ぶのがそんなに悪いのかよ。影で文句言うくせに、俺には何にも言わないのな。俺が何したって言うんだよ。元カノに拘ってるみたいだけど、不満があるんなら直接言えよ。顔ではいつも笑ってるから、おまえこそ何考えてんだかわかんねーよ。香里の方がさばさばしてて付き合いやすいや。面白いし、趣味は合うし』

私はまた目を開けた。温和な笑顔の二人がいる。

瞬時に夢を見たのかとも思った。が、目の開閉は自分の意志で出来るし、その度に目を開けて見ている状況のまま、目を閉じるとモノクロになるのだ。それに、気を失う直前の会話を魁が知っている。香里が喋らなければ魁が知るはずがない。

どういうこと……？

再び目を閉じ、いつもとは全く人格の変った二人に問いかけようと思った。だが、モノクロの世界では私は声を発することが出来ない。

『また二人きりになりたいなあ』

『ああ眠い。早く帰って寝たいよ』

私はくらくらと眩暈を感じ、早くなった鼓動に合わせて肩で息をしていた。

「神崎さん、ご気分がどうですか？ 血圧は測りますね」

ふくよかでハスキーな声の看護師が部屋に入ってきて、問い掛けるのと同時に私の腕に紺色のベルトを素早く巻いた。

モノクロの風景3

「あれ？ 少し高めだね、さっきは落ち着いてたのに。熱も計ってくださいね。後でもう一回来ます」

「あ、あの！」

私は、部屋を出て行きかけた看護師を咄嗟に呼び止めた。目覚めてから初めて声を出したので、香里と魁が驚いた顔をした。

「どうかしました？」

「今すぐ家に帰りたいんですけど」

私はこの場を立ち去りたかった。何が起きているのか全くわからなかったが、とにかくこの二人の前から早く消えたかった。

「真っ青な顔してるから、もう少し休んでいった方がいいと思うけど……」

看護師がそう言うと、魁も、「そうだよ、慌てて帰る事ないよ。俺、付いててやるから」と言った。

その時、香里の頬が引きつったのを私は見逃さなかった。闇の彼女は、『嘘の優しさに早く気が付きなさいよね』と、刺すような一言を放った。

「お願いします！」

香里の声を振り切るように、私は更に力を込めて言った。

「まあ、家の方が落ち着くだろうけどな」

魁が私の気持ちを代弁している。これも嘘なのか……。

「帰れるなら、ちゃんと家に送り届けますんで大丈夫です」

香里も善人に徹している。

耐えられなかった。

この時、私の潜在意識は闇の声を信じていた。白々しいくらいの二人の態度が、私の猜疑心を物凄い勢いで煽っていた。

看護師の姿が見えなくなったのを見計らって、私はベッドから下りた。

「絢那？ どうしたの？」

「何してんだよ。まだ寝てろって」

香里のふてぶてしさが鼻に付き、心配する魁の言葉に耳を覆いたくなった。

私はベッド周りを見渡して服の在りかを探った。ベッドサイドキャビネットがあったので扉を開けると、制服とカバンが入っていた。

「絢那ってば」

香里が私の腕を掴んだ。私は反射的に香里を睨みつけていた。

「靴はどこ！」

「絢那……」

今度は香里が唾然とする番だった。香里にしてみれば、なぜ私が敵意を示しているのかがわかるはずもない。

「ちょっと、どうしたんだよ。なんか変だぞ？」

魁が語気を荒げた。

「もういい。私に構わないで」

香里の手を振り解き、魁の目を数秒見据えた。哀しいはずなのに涙が出ない。人は哀しみに怒りが重なると涙も出ないのか、と思った。

私は空いていた隣のベッドに移動し、カーテンを引いた。泥の付いた制服を着て、ベッドの下にあった靴を見つけると、二人から逃げるようにして病室を出た。そして、正面玄関前で待つて

いたタクシーに飛び乗り、叔母と暮らしている家に向かった。

モノクロの風景4

角地に建つ一軒家の前でタクシーから降りた。叔母の家だ。

以前、叔母はここで叔父と住んでいた。だが、違う女性と暮らす為の別宅を持っていた叔父は、彼女を妊娠させたのを機に、自分の子どもが欲しいと言ってこの家から出て行った。

夫婦の間には子どもは居らず、ちょっとした考え方の食い違いから徐々に相手に対する違和感が大きくなり、いつからか会話もなくなって、目を合わせることもすらしなくなった。

冷え切った家庭は、夫婦という書類上だけで結ばれた人間関係を、他人以上に疎遠なものにする。

だから、叔母は叔父を引き止めなかった。慰謝料も取らなかった。自分の境遇を縛っていた仮面を捨て去るには好機だったと、あっさり別れを決めた。

叔母は四十五歳だが、目的意識を常に忘れないせいか、内面から滲み出る輝きを持った人だ。ニューヨークなどで世界各地から集まるバイヤーに混ざり、旬のブランド品を買い付け、セレクトショップで販売するという仕事をしていた。英語、フランス語に堪能で、仕事以外でも「自分に必要なものに出逢うため」と、休暇が取れるとすぐに、先進国、途上国問わず海外に飛んだ。人に甘えるタイプとは程遠いので、頼られたいと思う男性からすると自尊心を保てないパートナーなのかもしれない。叔父が離れていった原因も、その辺りにあるのだろう。

しかし、その潔さが私にとっては憧れであり、尊敬するところでもあるので、叔母と一緒に住みながら毎日たくさんの刺激を受けていた。

「叔母さん、ただいま！ お金貸して！」

私は玄関に入るなり、出し得る限りの声で叫んだ。何も考えられないままにタクシーに乗ったので、二日分の昼食代しか持っていなかったことに支払いの時まで全く気が付かなかった。

「え？ 魁くん達は？」

「一人で帰ってきたの。ごめん、早く貸して！ タクシー代どんどん上がっちゃう」

「いくらよ」

「二千元！」

私は叔母が差し出した二千円を乱暴に握り締めると、玄関を出て、ハザードランプを点滅させて待っているタクシーに戻った。

「どうしたの、いったい」

支払いを済ませ、気持ちが緩んだせいで重くなった足を引きずりながら玄関に戻ってきた私に叔母が訊いた。

「うん、ちょっとね……」

私は言葉を濁し、曖昧に笑って見せた。叔母は不可解な顔をしている。

「とにかく中に入んなさい。体は大丈夫なの？」

私は後ろ向きで靴を脱ぎ、「もう大丈夫」と答えながら家に上がった。

病院から飛び出してきたから先程まで、ただひたすら家に帰りたいとばかり念じていた。だが、無事に帰り着き、自分を脅かすものが何もなくなった途端、嫌な事を思い返す隙間が心に出来てしまった。弱っている部分をじわじわと踏みにじる裏切りの声が蘇り、怒りが再びこみ上げてきた。私は乱れる呼吸を必死で抑えながら、叔母には関係のないことだからと深呼吸を繰り返した。

気持ちが不快に高ぶったまま叔母の後に付いて居間に入った。海外に行く事の多い叔母が、日本にいる時くらい『和』を感じていたいという意向で作ったこの家の唯一の和室だ。

「何か飲む？」

叔母が訊いた。

モノクロの風景5

「うん……ココアが飲みたい」

「アイスでいいのよね？」

「ううん、ホットで」

「珍しいわね、いつも冷たいのじゃないと飲まないのに」

甘さが口に残るココアは、よほど寒い日でない限り氷で冷やされたものしか飲まない。でも今は、気持ちが落ち着くような温かいものを体が欲していた。

座布団の上に座ると、蓄積された疲れが怒りを上回った。まっすぐに背を伸ばして起きている事が辛くなり、テーブルに吸い寄せられるように上半身をうつ伏した。

ほんの一瞬だけ眠ってしまったのだろうか。私は、カタンという音で我に返った。顔を上げると、ココアの入ったカップから白い湯気がくるくると渦を巻きながら空中に吸い込まれていた。

「ところでさっきの質問なんだけど」

私がココアを一口啜った時、叔母が切り出した。触れてほしくなかった話題に心臓が一回だけ激しく鼓動を打った。私は緊張した表情を読み取られないように、カップを口に付けたまま目だけを叔母に向けた。

「魁くん達はどうしたの？ 退院したらアヤちゃんのこと送ってくれるって言ってたんだけど」

「え？ あ……うん」

私は口籠りながら、どう説明しようか考えあぐねていた。

「私も仕事休んで行ってた方が良かったんじゃないかしら」

「いや、それはいいよ」

「どうして？」

「なんか、すごく元気になっちゃったから一人で帰れるって言ったの」

「じゃあ、どうしてタクシー代足りないのよ」

「今月、小遣いピンチだったから……」

「嘘おっしやい。魁くんにタクシー代渡してあったのよ。お金が足りないわけないわ」

「あ、そうだったんだ……」

「何があったの？」

「え……っと」

誤魔化しきれなかった。かと言って、闇の情景が見えるという話を叔母が信じるだろうか。嘘も本当の事も言えなくなってしまった私は口をつぐんだ。

「まあ、いいわ。話したくない事もあるんでしょう」

叔母は人の心の動きをすぐに察する。言葉を濁した相手にしつこく詰め寄る事は、余計に口を閉ざさせる事を知っている。

そんな叔母をじっと見つめながら考えていた。交友関係の広い叔母なら私のような人間と接した事があるかもしれない、もしかしたら私の事をわかってくれるかもしれない……そう思った。

やっぱり誰かに理解してもらいたくて居ても立ってもいられなくなった私は、もやもやしている気持ちを吐き出してしまおうと思い、「あのね！」と、切り出した。

すると、同じタイミングで叔母の携帯が鳴った。

モノクロの風景6

「ちょっと待ってね、会社からだわ。はい、倉橋です。あ、その件は佐久間に頼んであるわ。ええ……」

叔母は電話の相手に次々と指示を出す。家にいてもいつもこんな調子だ。夜中に呼び出されて出掛けていくことなど日常茶飯事で、いつ睡眠を取っているのかわからないくらい忙しく働いていた。

きびきびとした口調で電話に対応している叔母を眺めながら、私は所在無くココアを飲んだ。

「ごめんね、アヤちゃん。何か言いかけてたわよね」

話を終えて携帯を閉じた叔母は、ようやく私の方に顔を向けた。叔母は電話を受ける前の話の流れをちゃんと覚えていた。しかし、一呼吸置いてしまったせいで私の話す気力は萎えていた。

「やっぱ、いいや」

「そう……。じゃあ、話したくなったら話してね。あ、そうだ。魁くん、治療費どうしたのかしら。まさか、立て替えてなんていないわよね。電話して聞いてみなくちゃ」

やはり叔母は、無理に言及しない。時にそれが冷たさを感じる事もあるが、追求されない事がありがたく思えることの方が多かった。

叔母は、一度テーブルに置いた携帯を再び手にすると、魁の番号を検索し始めた。このままここにいたのでは電話に出させられる可能性がある。魁と接触したくなかった私は、

「疲れたから寝るね！ 魁にありがとって言っといてね」

と言って、その場から離れた。

翌朝。一日寝れば大概の事は忘れられるのに、胸の痞えはなくならないままだった。

ベッドから降りて立ち上がると、軽い眩暈がして一瞬目の前が暗くなった。目を閉じて血の巡りに神経を集中していると、視界は元に戻ったものの、心を覆う靄が消えることはなかった。

「叔母さん、おはよう」

台所へ行き、朝食の支度をしていた叔母に声を掛けた。

「おはよう。具合はどう？」

振り向きざま、叔母が私に尋ねた。

「うん、まだちょっと眩暈がするんだ」

「まだ、顔が青いものね。学校はどうする？」

「休もうと思うんだけど」

「そうね、無理することないわ」

「また途中で倒れたりしたら友達に迷惑かけちゃうし」

「学校に連絡しないと」

「うん。掛けとく」

私はそう言って、食器棚の隣にある電話台の前に立った。

連絡先を記したアドレス帳を捲り、電話番号を調べる。番号を暗証し、ブッシュボタンを押すと、二回の呼び出し音で事務の女性が出た。私が欠席理由を述べると、女性は何の感情も込めずにそれを繰り返した。そして最後に、「お大事に」と、淡々とした形だけの言葉を付け足した。

モノクロの風景7

いちいち感情込めてたら、疲れるだけか……。

そう解釈してみたものの、心の通わない対応になんともなく空しさを覚えた。

脱力しながら受話器を置き、叔母を見ると、厚切りのトーストをかじりながら新聞を読んでいた。

「また、寝るね」

活字に見入っている叔母に言った。

「トースト食べない？」

叔母が新聞から目を逸らして私を見た。テーブルには既に私の分のトーストも置かれている。

「ごめん、食欲ないや」

「そう。サラダもあるから食べなくなったら食べなさいね。冷蔵庫に入れとくから」

「ありがとう」

「もう仕事に行くけど、何かあったら携帯に電話してね」

「うん、いってらっしゃい」

「体、ゆっくり休ませなさいよ」

「コーヒー飲んだら寝る」

「ミルクたっぷり入れなさいね。神経が休まるから」

「うん」

五杯分作れるコーヒーメーカーには、三杯分のコーヒーが残っていた。叔母も私もコーヒーは水代わりにしてよく飲む。眠れなくなるということがないので、これからベッドに入る時でも抵抗がない。

私は自分のマグカップにコーヒーを三分の二ほど注ぎ、冷蔵庫から牛乳を出してきて、なみなみと注いだ。

二階にある自分の部屋に戻り、両手でカップを水平に保ちながら背中でドアをパタンと閉めた。そしてベッドを背もたれにし、ソファ代わりにしている弾力のある丸い大きなクッションに腰を埋めた。

コーヒーに口を付けたが温かさを感じない。いつも牛乳を入れたらレンジで温め直すのだが、そんなことなどすっかり忘れていた。思い出したところで、力の抜け切った私には温めに行く気力などない。夕べ、この部屋に入った時は、何も考えたくない一心でベッドに潜り込んだ。布団を頭から被り、気を抜くと蘇ってくる思い出したくもない光景を打ち消すのに必死で疲れ切っていた。

私は温い液体が食道を通るのを何回か感じた後、部屋の中をぐるりと見渡した。自分のいる場所はいつもと何も変わらない。水槽のポンプが雨音のような音色を響かせ、その中でブルーグラスグッピーが大きな尾ひれをなびかせているのも同じ。カレンダーの海の写真が夏の終わりを告げ、少し淋しげな表情を見せているのも同じだった。

あのモノクロの映像は、私の勝手な思い込みだったのではないか……。

すっかり冷たくなった最後の一口を飲み干した時、何の気なしにそんなことを思った。

ブルーな気分の時、私には物事を悪い方へと考える癖がある。その上昨日は、意識が混沌としていた。その中で、無意識に自分の想像がそのような映像を作り出してしまったのではないだろうか。目を閉じる度に意識がなくなって、夢を見たのかもしれない。自分の想像の中でなら、香里にしか言っていないことを魁が知っていてもおかしくはない。

モノクロの風景8

きっと、そうだ……。

昨夜の出来事が、幻だったのではないかという気持ちが徐々に膨れ上がってきた。一番信じられる友達を疑うことは、すべての人を疑うことに繋がるくらいの大事だ。それなのに、助けてくれたお礼も言わなかったばかりか、二人を悪者にして病院を飛び出してきてしまった。

私は自分の妄想を信じてしまった浅はかさを悔やみ、謝らなければという気になっていた。このままではあの二人との仲が断絶してしまう。そんな事は耐えられない。

私は胸を押さえながら、意識的にゆっくりと息を吸い込み、ふーっと吐いた。不安からくる動悸のせいで、何もしていなくても息が切れる。いつの頃からか、心配事があつたり、流していたつもりの事に対して意識の奥の方で気にしていたりすると、動悸が起きて全身倦怠感に襲われるようになった。物事を深刻に考え過ぎだと人に言われるが、自分ではどうしようもなかった。

もっと気楽に生きたい……そう願っても、何かがいつも私の心に重く押し掛かっていた。

ベッドで横になり、うとうとしつつもぐっすりとは眠れず、吐く息はすべてため息になるほど憂鬱な時間を過ごしていた。

午後二時。机の上の置時計で時間を確認した私は、ベッドから降りて、パジャマを脱いだ。ジーパンをはき、黒とグレーのボーダーのロンTを着て、下校時間に間に合うように学校へ向かった。

徒歩七分の所にある駅から電車に乗った。降りる駅は三つ先だ。十分もあれば着いてしまう。

家を出るのが、少し早かったかな……。

そんなことを考えながらドア付近に立ち、発車までの間、ホームを歩いている人達を眺めていた。まだ帰宅ラッシュには早く、人影はまだらで、疲れてぐずった子どもを連れた買い物帰りの主婦や、ヘッドホンをつけて携帯から目を離さずに歩いている学生などがほとんどだった。その顔が皆、無表情なのが少し気になった。

メールを打ちながら歩いている学生達……私もその内の一人だ。他から見たら、あんな顔をして歩いているのだろうか。実際、笑顔になれる材料がないだけかもしれないが、文字でのやり取りは、時として平気で感情を偽る事が出来る。いや、喜怒哀楽、どの感情でいたとしても表情を

失いがちになる事には変らない。

冷たい器械を持っている人間が、物質の一部分と化している……。

客観的に自分の姿を学生達に映し出し、自分が生身の人間でなくなってしまうようで、なんだかとても怖くなった。

ドアが閉まり、電車はようやく走り出した。その直後、突然ガツンとロックが掛かったように電車が止まった。手すりに掴まっていなかったため、大きくよろけた私は隣で背を向けていたOL風の女性に体重を思い切り掛けてしまった。

「すみません」

咄嗟に謝ったが、OLは振り向くと同時に不機嫌極まりない顔で私を睨みつけた。肌のきめが細かく、ファッション誌のモデルにでもなれそうなくらい丁寧にメイクをしている女性だったのに、眉間に寄せた皺のせいで彼女の顔がくすんで見えた。

モノクロの風景9

私がもう一度謝ると、OLは顎をつんと上げながら元の方へ向き直った。とても綺麗な人なのに、心の在り方でこれほどまでに醜くなれるものかと、ある意味感心してしまった。

電車はなかなかホームを出ようとしなない。流れてきた車内アナウンスによると、次の駅までの途中で人身事故があり、その処理が終わるまで発車できないという。あちこちからため息が聞こえてきた。

電車から一歩ホームに降り、携帯で電話を掛ける人がぼろぼろと出始めた。椅子に座っている人達は、目を閉じて口をへの字に曲げている。連れがいる乗客は、声を荒げて会話する様子から、日頃いかに時間に縛られているかがわかる。苛立った空気が流れる中、ようやく出発したのは、それから三十分後のことだった。

学校の門まで辿り着いた時、校舎の中央、二階の壁に設置された時計は四時を指していた。予想もしなかった事故の為、考えていた時間より到着が遅くなってしまった。部活のない日なので、魁も香里もさっさと帰ってしまった可能性がある。六時間目は三時半に終わっている。でも、少し待ってみる事にした。

先生に見つかると面倒なので、門から少し離れたところの街路樹の影に隠れた。かろうじて顔が判別くらいの距離で、授業から解放された制服達を少し緊張気味に見ていた。

知らない人ばかりが徒歩や自転車に乗った姿で門から吐き出されてくる。一人で歩いている生徒はやはり、片手に携帯だ。クラスの友達数人の姿も見えたが、皆、お喋りに夢中で私には気付かない。もっとも、太い幹の影に隠れているのだから簡単に見つけられては困るのだが……。

三十分が経過した頃、生徒の姿はほとんど見られなくなった。

香里と魁のどちらかに会えればいいと思っていたが二人とも出てこない。だが、学校を休んでいない限り、まだ近くにいるはずだ。二人ともそれぞれまっすぐに帰宅するようなタイプではない。大抵どこかの喫茶店に寄り道をする。

私は香里に電話をすることにした。居場所がわかったら追いかけてみようと思った。

香里は五回目の呼び出し音の後、電話に出た。

「もしもしー、絢那？ 私も電話しようと思ってたんだ。具合大丈夫？」

香里は怒っている感じはなく、逆に心配してくれていた。声を聞いた途端、張り詰めていた気が緩み、涙が出てきた。

「うん、大丈夫。昨日はごめん。謝りたくて……」

「別にいいよ、気にしてないから。明日は学校に出てこれるの？」

「うん、行けると思う」

「そっか、良かった。待ってるからね！」

香里の声を聞くことが出来てホッとしたが、気のせいか心に引っかかるものがまだ残っている。

やっぱり魁とも話がしたい。

そう強く思い、魁のことを聞きだそうとしたが、何故か声に出す事が出来ない。居場所を聞いて会いに行こうとしていたのに、何かが私にブレーキを掛けている。

気持ちが乗らないまま電話を切りそうな香里に、

「あ、あのさ……」

と呼び止めた。すると、

「なに？」

と、香里が少し怒っているとも取れる強い口調で答えた。急ぎの用でもあるのだろうか。

モノクロの風景10

私は彼女の勢いに圧され、一歩引きながら、

「忙しい時にごめんね。魁はどこにいるか、知ってる？」

と、恐縮しながら訊いた。すると香里は、

「魁？ えーっと……わかんないや」

と、曖昧に答えた。歯切れの悪さが気になったが、それを問い詰められるほど今の私は強い立場にいない。

「そか」

「今日は顔見てないんだ」

「そか」

「部活ないから、とっとと帰ったんじゃない？」

同じ相槌を繰り返す私に、香里はぶつきら棒に言い放った。すると、その声が携帯と重なって門の方からも聞こえてきた。ぱっと振り返り、背を向けていた方を見ると、香里の姿があった。

まだ、いたんじゃない！

私は声には出さずに心の中で叫んだ。そして、電話を繋げたまま香里のところに行こうとした。先程まで香里に対し、びくびくしながら話していたのに、体は積極的に香里と接触を試みようとしている。

が、私はすぐに足を止めた。香里の話とは食い違う状況が目の前で起こっていた。私はそれをすぐに把握することが出来なかった。でも再び、体だけはこの事態に反応し、その場から私を動けなくした。

「おまたせー。どこ行く？ 腹減っちゃったよ」

香里の元に駆け寄ってきた人物が、声を弾ませながら彼女に問い掛けている。香里は咄嗟に通話口を抑え、その人物に耳打ちしている。そして、

「絢那、ごめん。友達が来たからまたね！」

と言って、一方的に電話を切った。

香里を追いかけて出てきたのは魁だった。「とっとと帰った」はずの魁が、香里と待ち合わせをしていた。

携帯から、ツーツーという音が冷たく響いている。

二人は校門を出て、川の方へ歩いていく。

魁、私はここにいるよ……？

心のは届かない。二人は大声で笑い合っていたかと思うと、香里が魁の耳元に口を寄せ、何かを囁いている。

魁、お願いだから、振り向いて！

まるで何かから逃れたいとでもいうように、二人は足早にどんどん遠くに離れていく。

魁、香里と一緒になんかいないで……！

もう角を曲がろうという時、私の叫びがテレパシーとなって伝わったのは香里の方だった。香里は魁の腕に自分の腕を絡ませた。

絢那には渡さない……。

香里の声が聞こえた気がした。

魁は一瞬驚きながらも、腕につかまった香里を見て上気している。それどころか、魁は自分の腕から香里の手を外し、彼女の肩を抱いた。そしてそのまま見えなくなった。

モノクロの風景11

魁の、あんなに嬉しそうな顔を私は今までに見た事がなかった。女友達とフランクに付き合う魁が女の子の肩を抱くことくらい大した意味はない。でも、今日の魁は他の女友達に接している時とは何か違う雰囲気があった。

これは、妄想でも闇の景色でもない。一気に体の力が抜け、私は地面にへたり込んだ。

私は魁を……失っちゃったの……？

二人が消えていった曲がり角を呆然としながら見ていた。

これで、いいの……？

私は浅く荒い呼吸を繰り返しながら自問自答した。

魁のそばにいられなくなってもいいの？

大好きな手を繋げなくなってもいいの？

ぎゅっと抱き締めてもらえなくなってもいいの……？

今、引き止めなければ魁とは終わってしまう。そんなのは嫌だと思った。

私はいてもたってもいられなくなり、魁に電話をしようと思った。自分で彼に何を言うつもりなのか全くわからなかった。頭の中に真綿が詰まって、思考回路が停止している。言葉など、きつと出てこない。

頭の中が真っ白なまま、震えの止まらない手で携帯を握り締めた。着信履歴を出し、魁の名前のところで決定ボタンを二度押した。

手の震えが全身に広がり、心臓が痛いほど高鳴っている。

魁、出て！

心の中で何度も何度も叫びながら、呼び出し音を聞いていた。

パニックになりかけた時、電話が繋がった。

『ただいま、電話に出ることができません。ピーという発信音の後に三十秒以内でお話ください』

聞こえてきたのは機械の伝言メッセージだった。一度電話を切り、もう一度掛けてみた。でも、結果は同じだった。

魁が校門から出て来た時、誰かと通話していて、携帯をポケットに入れたところを私は見ている。だから、携帯をどこかに忘れてきたということはない。マナーモードにしても、いつもバイブは生かしている。

私はメールに切り替えた。

【今、学校に来てる。魁はどこ？】

そう打って送信。疑問文にすると返事をくれる可能性が高くなるのでそう打った。五分経過。返信はない。

魁は着信があると、返事をするしないに関わらず、誰からメールが着たのかをその時に確認する癖がある。だから、私からの不在着信にも気付いたはずだ。それに、電波が届いているから呼び出し音が鳴ったわけだし、香里といるということ以外、電話に出られない状況にいるわけがない。

無視してる……。

素っ気なかった最近でさえも、無視することなど一度もなかった。忙しくても、必ず電話に出て、「かけ直すから」と言ってくれていた。

心変わり、されちゃったんだ……。

私は携帯を持った手をだらりと下げた。

いつも一緒にいられなくても、付き合っているという事実が私の心の支えだった。時々ヤキモキすることをされても、心を温めてくれる存在がいることが何よりの幸せだった。

ホントに魁は私から離れていっちゃったんだ……。

そう思ったら、喉に大きな塊ができた。鼻がつんとして痛くなった。景色を揺らす熱いものがどんどん視界に広がっていき、頬を伝って手の甲に幾粒も落ちた。

こんな終わり方って……。

私は恋人と親友を一度に失った。

モノクロの風景12

辺りがすっかり暗くなった頃、私は叔母の家に帰宅した。

どこをどう歩いてきたのか、電車に乗ったのかさえも全く覚えていなかった。しばらくしゃがみ込んでいて、悲しみに鈍くなった感覚が歩道の冷気を察知するまであの場にいた事だけは、うっすらと記憶に残っている。

玄関の靴箱の上に置かれた時計は八時を過ぎている。三十分もあれば帰って来られる距離を三時間掛けていた。

「ただいま……」

「おかえり。どこ行ってたの？ 具合はもういいの？」

叔母は玄関に小走りで出てきた。叔母も帰宅したばかりなのか、まだスーツを着ている。

「うん……大丈夫」

「大丈夫って、アヤちゃん、目が真っ赤よ。何かあったの？ 寝てると思ったら部屋にいないし、今から探しに行こうかと思ってたのよ」

だから、スーツのままなのか……。

その優しさにボロボロの心を刺激され、やっとのことで止まった涙が再び溢れそうになった。

叔母は親代わりというより、何でも相談できる姉のようだった。叔母とは友達や将来の事、ファッションや恋の悩みなど、親だったら到底話すことの出来ない話をいつもしていた。叔母は私の想いに対して、否定することなど決してしない人だった。何か違うと思っても上から物を言うのではなく、「私はこう思う」と自分の考えを述べながら、私が納得するようなアドバイスをくれた。そして、一歩踏み出せずにいる私の背中を押してくれた。だから、いつでも素直になれた。自分の考えに少しずつだが自信を持てるようになったのは、叔母のおかげだった。

私は今度の事も話せば少しは楽になるかもしれない、そう思った。

「私、今日ね……」

靴を脱いでから、廊下の先を歩いていた叔母の背中に語りかけた。でも、その後の言葉が続か

ない。

「どうしたの？ 何があったのよ」

喉を詰まらせている私に、叔母は立ち止まって振り向いた。

私は目に焼きついて離れない光景を思い浮かべていた。

魁にべったりと寄り添う香里と、それを嬉しそうに受け入れていた魁。

私は嫉妬で強張る体をどうにも出来ないまま、浅い呼吸を繰り返した。落ち着こうとすればするほど、心をかき乱す二人の姿が脳裏に浮かび上がってくる。

私はたまらなくなつて咄嗟にぎゅっと目を閉じた。

すると、目の前の叔母がモノクロになって瞼の裏に現れた。能力の事を忘れていた一瞬の間だった。

『失恋でもしてきた？ 辛気臭い顔しちゃって』

私は耳を疑った。

反射的に目を開けると、叔母は私を出迎えた時の心配そうな表情のまま私を見つめていた。

「ん？ どしたの？ ほら、話聞くから座って。今、お茶入れるから」

叔母は台所に入り、洗って伏せてあった湯飲みを手を取った。

私は、認識したくない恐怖に襲われながら、ダイニングチェアにゆっくりと腰を下ろし、今聞いた闇の声を頭の中で反芻していた。

嘘だよな……？

何度思い返してみても、叔母の言葉だとは思えない。

茶葉を急須に入れ、電気ポットのお湯を注いでいる叔母を見据えながら、はっきりと否定するために私はもう一度目を閉じた。

『外に出掛けられる元気があるなら、晩御飯くらい作っておいてよ。十七にもなって、おんぶに抱っこじゃ疲れるわ』

やはり叔母は、これまで私に向けたことのない冷酷な言葉を発していた。

モノクロの風景13

叔母との間で繋がっていた絆という名の刺繍糸……。数本の細い糸で縫ってある刺繍糸を更に何本かで編み込んで紐にしていたはずだった。なのに私の知らない間に解けていて、途中からぷつぷつと切れていた。その最後の一本がピンと張り詰めていて、弱い力を加えただけでぷつと切れてしまいそうなことに今、気が付いた。

安心する為の何かが欲しくて、私は必死に声を振り絞った。

「叔母さん……私、一人暮らし、しようかな……」

私が信じている叔母なら、きっと止めてくれるはず……。

「なによ、突然」

叔母は私の前に湯飲みを置いた。

「いつまでも叔母さんに甘えてられないし」

「生活費はどうするの？」

「親からの仕送り……それとバイト増やして……」

「そんなことしたら勉強に身が入らなくなると思うんだけど」

「大丈夫だよ、勉強はちゃんとするって」

「冴子だって心配するわよ。離れて暮らしてて、ただでさえ様子がわからないのに」

冴子は、私の母で叔母の妹だ。

「お母さんには私から言うよ」

「とにかく、この辺りで女子高生が独り暮らしだなんて危険過ぎる。不審者が多いの、アヤちゃんも知ってるでしょ」

私を懸命に引き止める叔母がいる。その目は、幼子を諭しているような優しいものだった。ずっと、この目に見守られてきた。そう信じて疑わなかった。

私は叔母の闇の顔を見る為に目を閉じてみた。

モノクロの叔母と対面した。そこには、連れ合いの子どもに愛を注がない継母のような、冷たい形相をした叔母がいた。

『馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ。今、出て行かれたら私が追い出したみたいじゃない。いなくなってくれば清々するけどね。でも自分から言い出したんだから、いくら止めても聞かなかったって冴子に言えばいいかしら。止めるの、やめてみようかしら』

止めるのをやめる……？

それが事実だとしたら、私がもう少し我を張ることで、叔母は同じ事を現実と言うかもしれない。

私は目を開けて叔母の言葉を待った。叔母も黙っている。

しんと静まり返った部屋の中で、叔母がお茶を啜る音だけが響き渡っている。誰かと一緒にいるのは明らかなのに、私の心の中は孤独感でいっぱいだった。

なかなか飲む気になれなかったお茶に口をつける。口を湿らす程度を含み、ごくっと喉を鳴らした。その音が引き金になったのか、叔母は重たい口を開いた。

「アヤちゃん、もし本当に一人でやっていきたいって思ってるんだったら、叔母さん、応援するわよ」

私が何も言っていないのに、先程まで反対しかしていなかった叔母が私に一人暮らしを勧めた。

闇の声が現実となった。私は本当に人の心の裏側が見えてしまうのだ。魁の言葉、香里の言葉、そして叔母の言葉もすべて、心の中で吐き捨てられている本音だった。

私は再び震え出した指先に気付かれないように湯飲みをそっと置いて、

「ありがとう」

と呟いた。

家出1

全く眠れずに朝を迎えた。

遮光カーテンを開けると、薄墨で染めたような曇り空が辺りの家や木々に暗い影を落としている。

もう少し明るい空だったら……。

気持ちも明るくなれたのだろうか。そんなことあるわけがないと、私は瞬時に自分の心を否定した。そして、この空と同じようにどんよりとしながら窓を離れた。

ボストンバッグに衣類を詰められるだけ詰め、叔母が仕事に行くのを待った。書置きには、『住む家が見つかったら連絡しますので、実家には何も言わないでください』と記し、自分の机に置いた。

玄関の閉まる音がした。レースのカーテンを少しだけ捲り、窓の外を覗くと、駅に向かって颯爽と歩く叔母の後ろ姿が見えた。いつも尊敬の意を込めて見ていたその姿を、今日は憎しみさえ込めてしまいそうな視線で見送った。

ボストンバッグを手にして一階に降りた。靴を履き、玄関の扉を開ける。外から鍵を閉めて、もう二度と戻ってこないつもりで郵便受けに鍵を入れた。これからどうなるのか、どうしたいのかという考えさえも漠然としたまま、私はこの家を後にした。

まずはどこへ身を寄せるか歩きながら考えた。私の行き来している場所と云ったら学校か友達の家かバイト先しかない。学校には魁と香里がいる。顔など見たくもない。他の友達も皆、親と暮らしている。友達に受け入れてもらえたとしても、親の立場で物事を判断する大人達に根掘り葉掘り聞かれ、帰るように説得されるのがおちだ。そうなる選択肢の余地などない。私はバイト先の喫茶店に向かった。

午前九時。裏口から店の事務所に入った。事務所と言っても事務機が一台と、人が一人入れる更衣スペースがあるだけの狭い部屋だ。そこで店長が机に向かって事務処理をしていた。

「おはようございまーす……」

私が掠れた声で挨拶すると、ドアの開いた音には気が付かなかった店長が顔を上げて目を丸くした。

「あれ？ アヤちゃん、おはよう。学校は？ バイトも休みじゃなかったっけ？」

店長は五十歳の誕生日を先日迎えたばかりの男性で、大学生になった娘さんと二人で暮らしている。奥さんとは五年前に死に別れたらしい。新たな出逢いもないのだろうが再婚する気配を見せず、料理が天命と自負しながら毎日仕事にのめり込んでいる。新しいメニューを考えては私達に試食させ、率直な意見を求めた。バイトの感想などで役に立つのかと聞くと、

「君達が一番正直な年代だから」

と、言った。私はそれでもかなり言葉を選んでいたつもりだったが、他の子の言葉を聞いていると、確かに言いたい事をストレートに表現している。傍で聞いていて、きついなど感じる事が多々あったので、

「あれだけぼろくそに言われて、店長、平気なんですか？」

と、こっそり聞いた事があった。すると、それまでポーカーフェイスを保っていた店長が一瞬吹き出すように笑って、

「俺も実際、ぐさっときてるんだ。内緒だよ」

と、眉をひそめてわざとらしい泣き顔を作った。そんな会話をした時からお互いに親近感を増し、『生き別れた父娘』などと冗談を言い合うようになった。実際に父親と離れて暮らしている私にとって、頼りにしているところが多分にあった。

「ボストンバッグなんか持って、どうした？ これから旅行でも行くのか？」

事務所の壁に掛けられた鏡には、目の下に真っ黒なクマを作った私がいた。旅行に行くような面持ちじゃないことは、店長にでさえ一目瞭然のはずだ。それでも、落ちた気持ちでいる人間を更に落とさないように仕向けるのは、店長特有の心遣いだった。

家出2

「学校、休んじやいました。だから、店長の顔でも見ようと思って」

私は思い切り無理をした笑顔で言った。

「店長の顔でも、ってなんだよ。まあ、たまには学校サボりたくなる時もあるよな」

店長は「学校に行け」などと野暮な事は言わない。無理に訳を聞き出すこともしない。ただ日常会話をしている中で心を緩く溶かされ、結果的に悩みを打ち明けてしまうということはよくあった。

しかし、今回だけはそんな店長にも、（学校へは二度と行くつもりはありません）と告げることは出来ないと思っていた。さぼる程度なら気にしない店長でも、二度と行かないとなると訳を聞くかもしれない。誤魔化しは通用しない店長のことだから、私は正直に闇の風景が見える事を伝えることになるだろう。その時にもし、信じてもらえなかったら……そう考えると、絶望した自分がどうなってしまうのかが怖かった。

「まあ、コーヒーでも飲むか」

そう言って店長が持っていたペンを書類の上に置いて立ち上がった時、開店前の店内から物音がした。

壁にレンガが埋め込まれ、レトロ調に統一された店内には、事務所から見て左手に、厨房に面したカウンターがある。テーブル席は三つずつ二列に並べられ、低めの丸いテーブル一台につき、ゆったりとした一人掛けのソファが二脚、対面に置かれている。白い壁面の割に店内が薄暗いのは、間接照明しかないからだろう。カウンターや天井に届くほどの棚に隙間なく飾られている骨董品や、壁に掛けられた明治時代の風景画を眺めていると、異空間に迷い込んだような錯覚に陥る。

この席数で、長居する客の多い喫茶店が二十年も潰れずにいるのは、骨董品を売りに出しているからだと聞いている。ただ一つだけ値札の付いていないものとして、太陽をモチーフにした天吊りランプがある。店長が九州に旅行した時に見つけてきたお気に入りらしいが、物音はそこから聞こえていた。バイト仲間の浅川竜也が三脚にまたがって。その電球を替えていたのだ。

「竜也さん、いたんだ」

私は三脚の上の竜也を見上げて声を掛けた。

竜也は大学生だが、単位が取れるのか周りが心配してしまうほど、学校には行かずに店にいる。竜也が言うには「独学でどうにでもなる授業ばかりだし、代返が利くから行くだけ時間の無駄。ただ、山川先生の授業だけは、教師と学生が講義を創っている一体感があるから出る」のだそうだ。さぼっているわけではないということを強調したいようだが、実際、成績がいいので説得力がある。

「誰かの声がすると思ったら絢那か。どうしたんだよ、こんな時間に。ああ、わかった。俺に会いに来たんだろ」

竜也はさらりと軽い事を言う。いつもなら「そうですう」と、同じく軽い調子で返すところだが、今日は苦笑いするのが精一杯だった。

「あれ？ 元気ないじゃん」

竜也はすぐに私の異変に気が付いた。

「そう……見える？」

「見えるよお。ってか、おまえほどわかりやすい奴いないよ」

口は悪いが察しはいい。

家出3

「ボストンバッグ持ってるくらいだから家出してきたんだろ？ それで行く当てがなくくて店に来た。違う？」

見事に言い当てられた。

「何があったんだよ。話してみ。力になれるかわかんないけど」

きつい言い方に時々反発したりもするのだが、相談すると何かしら道筋をつけてくれるのが竜也だった。私は家にいたくない一心で飛び出してきたものの、これからどうしたらいいのか全く考えつかずにいた。店の事で忙しい店長よりも、相談するのに気兼ねの要らないのは雇われ人の竜也だと思った私は、

「竜也さん、今、時間ある？ 相談に乗ってもらいたい事があるんだけど」

と、訊いた。

「ん？ じゃあ、ちょっと待ってて。店長に許可もらってくるよ。仕込みしなくちゃいけないからさ」

「それじゃ悪いからいい」

「何、遠慮してんだよ。蒼白い顔した奴ほっといて仕込みしたって、料理がまずくなるだけだろ」

いつもの悪態だったが、受け止められるだけの力が今の私には全くなかった。

「わかった……帰る」

「バーカ、冗談だよ。真に受けるなよ。いつもなら流すクセに重症だな」

「今のは冗談に聞こえないよ」

「そう？ まあいいや。とにかく待ってろ」

竜也は電球を替え終わると、三脚を降りて事務所の隅に片付けに行った。私は話す気力を失いかけたが、とにかく気持ちがいっぱいいっぱい、住む場所を自力でなんとかする自信がない。

竜也に頼るしか方法がないのだからと自分に言い聞かせ、カウンターから離れた一番奥の椅子に座って竜也を待った。

「時間くれるって。ほら、店長からの差し入れ」

戻ってきた竜也は、淹れたてのコーヒーを私の前に置いた。挽きたてのいい香りがする。

「あ、どうも……」

私はこくりと頭を下げてから、砂糖とミルクを入れずにコーヒーを飲んだ。インスタントなら甘くする私だが、店長の入れた果実の爽やかな酸味のあるコーヒーはブラックで飲むと決めていた。

正面に座った竜也に、闇の光景が見えることも含めて身に起きた一連の出来事を話した。話が進むにつれ、竜也は打っていた相槌を打たなくなった。私の吐き出す言葉だけに神経を集中させているようだった。

私が話終わると、竜也がぽつりと言った。

「そんなことがあったんだ……。辛かったな。不思議なことがあるもんだな」

神妙な顔をしている。人の話で滅多に動揺しない竜也の表情が曇ったことで、自分が悲惨な状況に追い込まれていることを改めて痛感した。でも、理解しようとしてくれた竜也の優しさが、私の気持ちを少しだけ軽くした。視線を動かすと、厨房にいる店長が仕込みを終えるところだった。

「あ、ごめんなさい。長く話しちゃった」

我に返った私は、店長と竜也を交互に見ながら言った。

家出4

「いいよ、大丈夫だから。竜也にちゃんと話を聞いてもらいな。竜也も気にしなくていいからな」

何も聞き出そうとしない店長だが、私の様子がおかしいことをずっと気に掛けてくれていたのだろう。私は店長の言葉を受け止めながら、見守ってくれる人達がいるという有り難みをしみじみと感じていた。

「どうするの、これから。住む当てあるの？ 頼れる友達とかいるの？」

「ない……」

「お金は？ 多少でもあれば、ネカフェとかで仮眠くらい出来るかもしれないけど」

私はここに来る前、途中にある自動販売機で飲み物を買おうとして財布を開いていた。百円ちょっとの買い物さえ躊躇うくらいの金額しか入っていない。病院から帰宅した際、タクシー代で小遣いを使い切ってしまっていた。

「その様子じゃ持ってないな。それで家出してくるんだから、よっぽど切羽詰ってたんだ」

悔しいが、その通りだった。私は唇を尖らせながら竜也の顔をじっと見た。

「じゃあさ、今日仕事終わったらうちに来いよ。そろそろ仕事に戻んなきゃ。いいか、その辺のベンチで寝たりとか絶対すんじゃないぞ」

「うん」

「なんか心配だなあ、どうしよ。店長、今日、絢那仕事しちゃダメかなあ」

頼りない私の返事に、竜也は店長に助けを求めた。

「こっちは全く問題ないよー。キッチンに入ってもらえると助かるかな」

「よかった。絢那、そうしなよ。他のところで時間潰すたって行くところないだろ？」

「商店街をぶらぶらするとか……」

「俺、五時まで仕事なんだよ。何にも食べないでずっと外にいる気？」

「食欲ないから……」

「嘘ばかり。さっき腹鳴ってんの聞こえたぞ？ ここんとこ、ろくなもん食ってないんだろ。キッチンに入れば昼飯タダだよ。俺が上手いもん食わしてやるよ」

竜也がそう言うと店長が、「竜也の給料から天引きしとくなー」と、茶々を入れた。

「なんとでもしてください。な？ そうしろよ」

店長を見ると、ニコリとしながら頷いていた。

「うん……じゃあ、そうする」

私は小さく呟いてから、頭をこくりと下げた。

平日にしては珍しく、一日中満席状態だった。休憩もほとんど取れず、慌しく半日が過ぎていった。竜也特性ランチはお預けとなったが、考える暇がなかったことで辛い事を忘れていられた。

五時からのスタッフが出勤してきたので、私と竜也は仕事から上がった。

「車持ってくるからちょっと待ってて」

店の裏口を出たところで竜也がそう言い残し、小走りで路地の角を曲がっていった。数分待っていると、黒のイプサムが竜也のいなくなった方とは反対の路地から入ってきた。背中を向けていた私に後ろからクラクションを短く鳴らし、振り向いた私のすぐ脇に車を寄せた。

「乗ってー」

助手席の開いた窓から竜也が私を呼んだ。私はドアを開け、「お邪魔しまーす……」と、聞こえるか聞こえないかくらいの小声で言った。竜也の車に乗るのは今日が初めてだった。いつも顔を合わせている人とはいえ、狭い空間に異性と二人で居合わせるというのは緊張する。

「シート、座りやすいように調節していいからな」

竜也は、座席を前後するならこのレバー、倒すならこのレバーと、私の体の上数センチのところを行ったり来たりしながら説明した。私は竜也に警戒心は持っていないものの、彼氏でもない男の接近に反射的に体を引いていた。

「店で作れなかったから、家で豪華料理作ってやるよ」

説明の終わった竜也は、そう言いながら車を発進させた。私が体を引いたことに気付いていないのか、なぜか楽しそうだ。

「今日は忙しかったんだし、疲れてるのにいいよ」

私はそう言いながら、引いた体を竜也に気付かれないように立て直した。

「こういう時は素直にありがとって言っとけばいいんだよ。普段、ずうずうしく奢れとかいうくせに、肝心な時に遠慮してどうすんだよ」

竜也が私の頭をこづいた。たまに腹の立つ乱暴な口振りに、今日は一日救われていた。

車で十五分のところに竜也のアパートがあった。アパートのすぐ脇に砂利の駐車場があり、竜也はそこに車を止めた。竜也のアパートに来たのも初めてだった。バイト仲間とは喫茶店が職場兼溜まり場だったので、それぞれの家を行き来するという事が全くなかった。

車から降りて竜也の後をついていくと、彼は二階建てのアパートの一階の前で足を止め、キーホルダーについた鍵をかちやかちやと探り始めた。キーホルダーには、どこの鍵を集めたらそんなになるのかというくらいの鍵がぶら下がっていた。

「なんでそんなに鍵があるの？」

私が思わずそう尋ねると、竜也は「まあ、いろいろとね」と曖昧に答えた。彼は立ち入った事には答えない主義だったと、返事を聞きながら思い出した。

竜也は四部屋あるうちの向かって右から二番目のドアを開けた。

「どうぞ。ちょっと汚いけど」

靴を脱いで上がると、玄関を入れてすぐのところにあるキッチンスペースも、引き戸の向こう側の六畳の部屋も、竜也の考える汚い基準がわからないくらい整頓されていた。大きな家電や家具が多く、小物が少ないせいか、とも思った。

「綺麗じゃない。こんなに片付いてるとは思わなかった」

「そか？ まあ、俺、几帳面だからな」

そう言って、私を部屋に通した竜也は、両手じゃないと抱えられない大きな厚みのあるクッションを投げてよこした。

「これ、座りやすいよ。ケツがすっぽりはまるから、読書とかするのにちょうどいいんだ」

低反発になっているので座った部分がぐっと沈み、背もたれが出来る。うちにある物と似ていたが、得意げになっている竜也の話の腰を折らないようにその事には触れなかった。

家出6

「竜也さん、本なんて読むの？」

「失敬な。俺だって読むさー」

「どんな本？」

「ん？ まあいろいろとね」

「誤魔化してる。どうせ、エッチな本とかでしょ？」

「そんなもんねーよ。ほら、テレビつけとくから見てろ。パッパと飯作るから」

竜也はテレビをつけてからリモコンを私に向かって放り投げ、台所に行った。

一人にされた私は、退屈凌ぎに部屋を見渡した。すると、意味深に布で覆った棚があった。竜也を見ると、後ろ向きで料理に集中している。何かからかう材料が隠れているかもしれないと、私はこっそり布を捲ってみた。するとそこには、太宰治、川端康成、松本清張などの本がずらりと並んでいた。

難しい本ばかり……。

私は竜也の意外な面を見た気がした。どちらかといえば軟派なイメージのある竜也だから、雑誌くらいしか読まないだろうと予測していたからだ。

「さて、出来た」

調理時間は十分程度だった。

「豪華料理にしては早くない？」

「時間掛ければいいってもんじゃないだろが」

そう言いながら運んできたのは、カレーライスだった。

「ああ、温め直しただけってやつね」

「バカ言え。それが旨いんじゃないか。それにな、エビが大量に入ってるんだぞ」

「アハ、そっか」

「おまえ、ホントにバカにしてるだろ。いいから食べてみ」

「はいはい、ではいただきます」

私は極普通のカレーの味を想像しながら一口頬張った。だが、期待はいい意味で裏切られた。噛むほどに溶け込んだ材料の旨味が口いっぱい広がる。

「美味しい……。これ、何が入ってるの？」

「これはな、玉ねぎとにんにくと生姜とトマトの水煮かな。隠し味にヨーグルトとナンプラーを入れてある」

「ナンプラーって何？」

「ナンプラーは小魚を塩漬けにして発酵した上澄みを熟成させたもので、タイの代表的な調味料だよ。醤油に近いって言えばわかりやすいかな。塩分が多いけど、隠し味として使うには丁度いいんだよ」

「へえ……。竜也さんって家でも材料にこだわるんだね」

「どうせ作るんだったら旨い方がいいじゃん」

お喋りしながらも、私達はあっという間にカレーを平らげた。元々竜也は早食いだっただが、今日は私も同じペースだった。

「おまえ、食うの早いな。よっぽど腹空かしてたんだな」

私は倒れた日の昼に弁当を食べたきり、二日間まともに食事をしていなかった。空腹を感じたのも久しぶりだった。

「やっとまともに食べた気がする。人間、食べなくても動けるもんだよね」

「ぶっ倒れるぞ。ただでさえ、ひよろひよろした体なのに。食べたくなくても食べろ。お代わりあるから」

「じゃあ……もう一杯だけ」

私がそう言って両手でそろりと皿を差し出すと、竜也はそれをさっと奪い取った。

「ほれ、何杯でも食べ」

「こんなに食べられないよ」

おかわりなのに、さっきよりもはるかに多く盛られていた。だが、自分が思っている以上に空腹だったようで、そのカレーもあっという間に空にした。竜也が私の食べっぷりをじっと見ていたが、それも気にならないほどスプーンを持つ手は勝手にカレーを口に運んでいた。普段だったら有り得ないことだ。私は食べているところを男の人に見られると、その味がわからなくなるほど緊張し、胃が一気に収縮したのではないかと思うくらい少食になる。どんなに親しい人でもそうだ。魁でもそうなる。

「ごちそうさまでした」

「もういいのか？」

「うん、お腹いっぱい」

私は手を合わせてお辞儀をした後、自分と竜也の皿を流しに運んだ。スポンジに洗剤をつけて洗い始めると、「気が利くねー」と、竜也がタバコに火をつけながら言った。その声を背中で受け止めながらひたすら皿洗いをしていると、「ところでさ」と竜也が切り出した。

「彼とはどうするの？」

その言葉を耳にした途端、瞬間的に手から力が抜け、私は持っていた皿をシンクの中に滑り落としてしまった。下にあった別の皿が鈍い音を立てて割れた。

「あ！ ごめんなさい、割っちゃった……」

割れた音に反応した竜也は、既に私の隣に立っていた。

「いいよ、ほら、どいてな」

竜也は私を片手で脇に追いやった。破片を拾い始めた竜也に「私がやるよ」と言うと、

「いいから。ホント、おっちょこちよいだよな。怪我しなかったか？」

と、更に気を遣った。

「大丈夫……」

竜也は割れた皿を手際良く新聞で包み、不燃ゴミの袋に入れた。私が洗いかけていた泡のついた皿も水で洗い流し、シンクをあっという間に空にした。

「おまえも手を洗いな。泡、つきっぱなしだぞ」

おぼけのように手を胸の前でだらりと下げていた私に竜也が言った。

「うん」

手を洗い、自分のハンカチがバッグの中だったので、「タオル貸して」と断ってから、下げてあったフェイスタオルで手を拭いた。彼の話に加え、皿を割った事で、私のテンションは今朝くらいの位置までぐっと下がっていた。

居間に行くと、先に戻っていた竜也が卓上で沸かせるポットで紅茶を入れていた。

「で、さっきの話しだけど」

皿を割った事などなかったかのように、竜也は私が動揺する話を再び始めた。

「どうするも何も、魁、私のこと避けてるから……もう終わったんだよ」

疲労感を伴う嫌な動悸がに苛まれながら、私は軽くため息を付いた。

「そうなの？」

「うん……。私、きっと魁にとってすごく嫌な事をしちゃったんだ。そうじゃなきゃシカトしたりしないよ。彼、優しい人だから」

私の中で魁は優しい存在としてインプットされていた。だから、今回の事があった後だというのに、「彼は優しい」という言葉が自然と出てきてしまう。

「それ、ちょっと違うんじゃない？」

「え？」

「優しくないから、態度をはっきりさせないで絢那とずるずる付き合ってたんじゃないの？ それで、悪者になりたくないから自分から別れを告げないんだよ。そういうの、冷たいっていうんじゃないの？」

「冷たい……？」

「そうだよ。本当の優しさっていうのは、考えている事をはっきり相手に伝えることなんじゃないの？ 現にそうされなかったことで絢那は傷ついてるんだし」

「でも、はっきり言われたらそれはそれでショックな気がするけど……」

「一時的にはね。でも表面ではいい顔してて、心の中では全く反対のこと思ってたっていう方が、後々引きずるくらいの傷を受けないか？」

「そうかもしれない……。でも、待って！ 魁はこれまで私にいろいろしてくれてたんだよ？ 忙しくてすぐには無理でも、私の願いをちゃんと覚えてて、遅くなっても必ず叶えてくれたの。私に誠実に接してくれた。だからきっと、あの時も何か事情があったんだよ」

もう終わったと口で言っているけど、心ではまだ、諦めきれずに魁を待っている自分がある。

「事情って？」

「香里にしつこくされたとか……」

「それだけで、絢那の電話、無視するか？ 百歩譲ってその時電話出来なかったとしても、もう一日経ってるのに、どうして連絡してこないんだ？」

「それは……きっと、何か考えを整理してるんだよ」

「考えてって？」

「彼、何かあると一人になりたがるから、そうなる私がいくら連絡しても全く取り合ってくれないの」

「二人の問題だろ？」

「そういう人なんだから仕方ないじゃん。でも待っていると、自分の考えを整理できた時にちゃんと向き合ってくれるよ？」

「どのくらい待たされるんだよ」

「一週間とか二週間とか……」

「その間、放置？ 絢那は平気なの？」

「平気じゃないよ。なるべく他の事をして魁のことは考えないようにして……」

「携帯が手放せなくなるわけね。おまえ、人と話をしてる時くらいメールチェックするのやめない？」

不安で心がいっぱいの時、私は何をしても携帯を視界に入る範囲に置き、着信がある度すぐに誰からのメールか確認する癖があった。そして、魁からのメールではないとわかる度、気持ちが悪くなった。今も竜也との会話中に二度ほどメールの着信があり、話を続けたまま携帯を開いていた。

「……振り回されてるよね」

「体、壊すよ。神経やられる」

「一人でいても平気な子になりたい」

「絢那は元々寂しがりなんだから、そうそう変われないよ」

「でも、付き合ってる人がそういう人なんだから、自分を変らないとうまくやっていけないじゃない」

「そうだけど、実際辛い思いしてるんだろ？ 無理してるようにしか見えないけど」

「でも、会ってる時はすごく楽しいんだもん。これは無理してないよ」

「会ってない時は他の女の肩抱いて歩いてる奴とでも？」

「思い出させないでよ」

「絢那、現実をしっかりと見た方がいいよ。もし、絢那の友達が同じ目にあってたら何てアドバイスする？」

もし、友達の彼氏が他の女の子の肩を抱いて歩いている、その間、彼女の事を無視しているという側面だけで判断するのなら、私も「そんな男、やめときな」と言ってしまいかもしれない。でも、二人の間のことは二人にしかわからない。そこまでに至った軌跡の細かな襞の部分まで、断片的にしか見ない他人にはわからないのだ。

「軽々しい事は言えないよ」

「どして？」

「二人には二人の歴史があるから」

「歴史ね。美しい過去にしがみついているわけだ」

「そうじゃないよ。積み重ねてきたものを大切にしなきゃって言ってるだけだよ」

「積み重ねてきた結果、何考えてるかわかんねーって言われたんだろ？ 他の女の方が付き合いやすいって」

「そうだけど……」

彼の事を弁護しているはずだったのに、闇の声を信じている自分が、竜世の言い分に反論しきれない。

「そんな男、まだ、好きでいるの？」

竜也は更に追い討ちを掛ける。

「……簡単には切り替えられないよ」

「諦めろよ。男なんて他に大勢いるだろ？ 辛いのに耐えて笑ってるおまえのこと、見てもらえないよ」

「でも、好きなんだからしょうがないじゃない」

「忘れろ」

「忘れられない」

「ボロボロに傷つきたいのか？」

「傷ついてなんかいないよ。勝手に私が不安に思ってるだけなんだから」

「影でお前の悪口言われてるんだぞ」

「悪口じゃないよ。ホントのことだもん」

魁が香里に私の事を楽しくない話題として持ち出したことが、本当は物凄くショックだった。やっかいもの扱いされているような気がして、凄く悲しかった。それでも私は魁のことをかばっている。自分でもどうしてそうしてしまうのか、わからなかった。

「絢那……」

竜也が私をじっと見つめた。

「俺が忘れさせてやるよ」

「え？」

聞き返した私の体を、竜也は腕を広げて抱き締めた。温かだった。大きなものに包まれている安心感があった。疲れ切っていた私は、複雑な思いにかられながらも、竜也の手を振り解くことが出来なかった。

「俺のところに来いよ。俺が大事にする」

そう言いながら、竜也は私の髪を撫でた。

俺が大事にする……。

その言葉が、私の頑なな心をゆっくりと溶かそうとする。

「そんなこと、出来ないよ……」

心細くて、寂しくて、哀しくて……息をしているのが精一杯な今、竜也はそばにいてくれる。言葉では否定しながらも、竜也の手のぬくもりに私の心は揺さぶられていた。

竜也が私の肩に両手をかけたまま体を離し、目を見つめた。

私は動けなくなった。竜也の瞳の奥をただ見つめていた。

竜也が私に顔を近づけてきた。

キス……？

一瞬ひるんだ私に、竜也は愛しいものを見るように目を細めた。そして、私の顎にそっと手を添えた。

体に力が入らない。目の前にある優しさに身を委ねようとしている自分がいる。そして何かに操られ、私はそっと目を閉じた。すると、闇の景色に竜也が現れた。

『この女、簡単だな。じらしてくれた方が面白かったのに。人の心の中が読めるなんてバカバカしい事、恥ずかしげもなく良く言えるよ。そんなことが出来るんなら、ここへだって来ないはずだろ』

唇を合わせる直前、私をあざ笑う竜也の表情が浮かび上がった。冷酷無情という言葉の似合いそうな、女を食いものとしか見ない男の顔だった。

私はハッとして目を開けた。

「ん？ どうした？」

鼻と鼻がぶつかる距離で、竜也はキョトンとした顔をした。

「竜也さん……あなたまで……」

私は失望と怒りが入り混じった感情で震えていた。

「なんだよ」

竜也は訳がわからないといった表情で戸惑っている。自分が闇の声を発していることなど夢にも思わないのだろう。私は魁を裏切りそうになった自分の不甲斐なさに耐えられなくなって、竜也の体を両手で思い切り突き飛ばした。

「ごめん、帰る」

「帰るってどこに帰るんだよ！」

「わかんない！」

「今から行くところなんてないんだろ？」

「適当に探す！」

「こんな時間からどうやって探すんだよ。この辺、何にもないぞ？ 痴漢にでもあったらどうす

んだよ」

私は竜也をキッと睨んだ。

ここにいたって、されることは同じじゃない！

そう心の中で叫んでいた。

「どうしてそんなに怖い顔すんだよ」

「自分の心に聞いて下さい」

私はそう言い捨てると、部屋の隅に置いてあった荷物を持って玄関に向かった。

「ちょっと、待てよ！」

靴を拾い上げ、玄関のドアノブに手をかけた時、竜也が私の腕を掴んだ。必死なのか、心配する振りなのか、痛いほどの力だった。私は痛みに顔をしかめ、捕まれた腕を数秒間見据えた後、視線を上げた。

「離して」

「急にどうしたんだよ。俺、何か悪い事したか？ 気に触ったのなら謝るよ」

竜也はいつになく慌てている。その姿が余計に私の神経を逆撫でした。

「お願いだから離してください」

私は竜也に対し、かつて出したことのない軽蔑を込めた低い声を出していた。

誰にも会わないように、おぼつかない足取りでひたすら人のいない方へ進んでいた。

どのくらい歩いた後だろうか。ふと、それまで感じていなかった寒さに全身が震えた。コンクリートが体の芯まで冷やし切るまで、私は裸足で歩いている事に全く気がつかなかった。

足の裏がざらざらしている。私は靴を履くために、片足ずつ後ろに折り曲げて足の裏の砂を払った。何か鋭利なものでも踏んだのか、血が滲んでいる。ちょっとした切り傷とは言い難いほどの傷なのに、感覚が麻痺しているため痛みを全く感じない。傷口を眺めていたら、無意識に閉じ込めていたむなしさがこみ上げてきた。

私は靴を履き、携帯の時計を見た。午後七時三十五分。どうしようかと途方に暮れながら、歩道の脇の石垣に寄り掛かった。遠くに都心の夜景が見える。キラキラと様々な色で輝いているはずの街の灯りが、晴れているのに今日はくすんでいる。少なくとも私にはそう思えた。

ボロボロだった。心を許すと途端に裏切られるという構図が頭から離れない。人の二面性をもろに感じ取ってしまう能力がある限り、もう誰のことも信じられない。誰かと接すること事態怖くなった。

目の前を通る二車線道路には、数は少ないものの、かなりのスピードを出して車が走っている。私は石垣を離れ、のろのろと足を引きずりながら一歩ずつ前を出た。ガードレールに両手をついて顔を右に向けると、自動車のライトに混じって、ひととき大きく輝いている光が見えた。

私は何かに取り憑かれたように、その光をじっと見ていた。その間も、通り過ぎる車は私の体に冷たい風を吹き付けていく。でもその大きな光だけは、空気の層に溶け込むように丸い円を描き、暖かささえ放っている。

気持ちのいい光だ。

私は、徐々に近づいてくる光のそばに行きたいと思った。

光はだんだん大きくなっていく。

もうすぐ手が届く。

重力がなくなったかのように、体がふんわりと地面から浮き上がる。

光が私の頭からつま先まで包み込むくらいの大きさになろうとしたその時だった。警告を示す音が辺りに響き渡ると共に、私は抵抗できない別の力に無理やり引き戻された。光は私から大きく反れていく。私はバランスを失い、その場に倒れた。

「危ねーだろ！ 何やってんだよ」

罵声がした。声の方を見ると、見知らぬ男性が怖い顔をしてこちらを睨んでいた。

「え……？」

「え、じゃないよ。お前、死のうとしてただろ？」

「死ぬ……？ 私が……？」

「自分のやろうとしてたこと、覚えてないの？ トラックの前に飛び出そうとしてたんだぜ？」

「車……？ 光が暖かかったから……私、寒くて……」

その瞬間、頬に鋭い痛みを感じた。

「しっかりしろ！ 大丈夫か？ おまえ、俺が通らなかつたら車に撥ねられてたところだったんだぞ」

「そんな……」

「死ぬのは勝手だけど、周りに迷惑かけんなよ。あんたを轢いた運転手さんの一生がめちゃくちゃになるところだったんだからな」

周りを見渡すと、確かにガードレールの道路側にいる。いつ、それを跨いだのか覚えていない。全く無意識だった。状況を認識した途端、体がガタガタと震え出した。

「ごめん……なさい……」

恐怖と共に、鼻の奥がつんと痛んだ。

「私……私……」

涙の粒は肌ではっきり感じ取れるのに、自分で何を言いたいのかはわからなかった。

「もう、いいから。とにかく歩道に戻ろう」

男性は私を支えて立ち上がらせた。

ルームシェア2

「俺、これから不動産屋に行くから一緒に行くか？ つつうか、来い。コーヒーくらい出してくれると思うし。これ、お前の荷物？」

石垣の手前に置き去りにしてあった私のバッグを拾い上げると、男性は半ば強制的に私を誘った。泣きじゃくっていた私は、ただ頷くことしか出来なかった。

エス・アイ・シー不動産と書かれた扉の前に来た。男性が手動の扉を押すと、女性社員がカウンターの向こうから「いらっしゃいませ」と私達を迎え入れた。

「まいどー。この人が部屋借りたいっていうんで連れて来ました」

私が何も言わないのに、男性は勝手な事を言い出した。

「杉山さんの御宅、空きが出たんですか？」

この男性は杉山というらしい。さっきは暗くてよくわからなかったが、二十代後半といった感じだ。

「ええ、昨日急に出ていっちゃったんですよ」

「あら、大変」

「だから、また募集かけようと思ってたら、丁度そこで会ったから」

店の外を指差しながら、男性はいかにも別々にここへ来たように説明している。

「そうなんですか。お客様、ラッキーでしたね。杉山さんのお宅は女性も入居なさってるから安心ですよ」

女性店員は、壮太の言う事を微塵も疑わない。

「詳しい事を説明したいんで、あっち、借りていいですか？」

男性が店の一角を指差した。

「いいですよ。今、コーヒーお持ちしますね」

女性店員が背を向けると、「ほらね、必ずコーヒー出してくれるんだよ」と口元に手を置きながら、男性が小声で囁いた。

「あの、私……」

一文無しなんですけど。

そう告げようとする、男性は話を聞こうとせず「入居条件とかお話ししますんで、こちらへどうぞ」と、明らかに私へ言葉なのに、女性店員に聞かせるかのような大声を出した。

窓に面していて、観葉植物のパーティションで仕切られただけの応接室に連れて行かれた。私は男性と対面に座った。

「どうも、杉山壮太です。よろしく」

杉山壮太と名乗った男性は、わざとらしくかしこまって頭を下げたかと思うと私の耳元に口を寄せ、「君、高校生でしょ？ しかも家出」と囁いた。

「なんでわかるんですか！」

ずばり言い当てられ、びっくりした声を出すと、即座に「しーっ！」と口止めされた。

「やっぱり？ 誘導尋問にひっかかるところなんて正に高校生だね」

私は壮太にバカにされた気がしたのと、正直過ぎる反応をしてしまった自分に慚然とした。

「だから、何なんですか？」

「行くところがないからあんなところにいたんだろ？ このままうろうろしてたら警察に補導されて連れ戻されるのが関の山だよ。これからどうすんの？」

「住むところ……探します」

「どうやって？」

「こういう不動産屋を廻って」

「何も知らないのな。こういうところで斡旋している部屋って、未成年は親の同意書がないと契約出来ないんだよ。それに契約金だって安かないよ。持ってるの？ お金」

「ないです……それもわかってたんですか？」

「まあ、そんな感じかなって程度だけどね。金なし同意書なしじゃホームレス確定だよ。俺がここそ話してる意味がわかった？ そういう人間に部屋を貸すのははっきり言って違約行為だからね。かと言って、死のうとまでした奴の事、何とかしてやれる俺が見捨てるわけにいかないじゃん。どうにか操作してあげるけど、どうする？」

「どうするって……」

「気分落ち着いたみたいだから家に帰る？」

私は激しく首を横に振った。しかし、今さっき会ったばかりの見知らぬ男性にほいほい付いていくのもあまりにも軽過ぎる。でも、とりあえずこの店には信用されているらしいし、私は行く当てがない。甘い話に迷いながら、私は自分の能力の事を思い出した。裏の顔が見えたらさっさと退散して別の方法を考えればいい。

私は壮太に顔を向け、静かに目を閉じた。

ところが、闇の情景が浮かんでこない。瞼の裏を走る血の色が、照明の明かりによって黒と混ざり合っただけだ。呆気にとられた壮太の「どした？」という声もリアルに聞こえている。

私は、「ちょっと待っててください」と言って、ちょうどコーヒーを運んできた女性店員と顔を

合わせ、ギョツと目を閉じた。

『変な子。何してるのかしら』

能力は健在だった。闇の声とモノクロ画面が見える。私は壮太のところに戻り、もう一度目を閉じた。やはり、何も見えない。

「どしたー？」

壮太は私の突飛な行動を、今度は半ば面白がりながら訊いた。女性店員は心とは裏腹な笑顔を作ってこの場を離れた。

「いえ、あの、信じてもらえなくてもいいんですけど、私、目を閉じると人の心の裏側が見えるんです。だけど、あなただけ見えない……」

「へえ、そうなんだ。すごいね」

「疑わないんですか？」

「ん？ だって、本人がそう言ってるんだから本当なんですよ？ 疑ったところで何の徳にもならないし」

「はあ」

「でもさ、その能力を俺の前で使おうとしたってことは、俺のこと疑ってるんだよね？」

また、凶星だった。

ルームシェア4

「いえ……そんなことは……」

「いいよ、それくらい警戒出来るってことはいいことだ。最近の若い子は優しい言葉をかける男にすぐついてっちゃうからね。これから部屋、見に行く？ 俺と二人で行くのは嫌だろうから池上さんにも付いてきてもらって。池上さん、これから空いてます？ ちょっと残業になっちゃうけど」

壮太が、先ほど座っていたデスクに戻って事務処理をしていた女性店員に訊ねた。池上とは女性店員の名前らしい。

「空いてますけど」

池上は座ったまま顔だけこちらに向けた。

「入居は部屋を見てから決めたいってことなんですけど、初対面の男についていくのは抵抗あるみたいなんで一緒に来てもらえます？」

壮太は私が言ってもいないことをペラペラと池上に話した。

「いいですよ。すぐに行きます？ ちょっと主任に許可もらってきますね」

池上も私を置き去りにしてどんどん話を進める。

「あの……」

池上が席を外したのを見計らって壮太に声を掛けた。

「え？」

「入居したいとも何ともまだ言ってないんですけど……」

「ん？ やめる？」

「いや、家賃のこととかまだ聞いてないから」

「ああ、そうだったね。家賃は毎月一万プラス光熱費を入居者で均等割り。これも一万もいかな

「いや、安いでしょ？ それを月末にもらってる。だけど家出高校生じゃ、それすら工面するのも大変だろ」

見透かされている。

「そこまでわかってて、どうして入居させようとしてるんですか？ いかがわしいことさせようとしてるんですか？」

私は猜疑心いっぱい質問した。

「アハハ、普通そう考えるよな。大丈夫だって。もし俺がそんなことしたら、ここに逃げ込んで訴えてもいいよ。過去にそういうトラブル全くないから。池上さんに聞いてごらん。ね、池上さん」

ちょうど戻ってきた池上に壮太は同意を求めた。

「え？ ごめんなさい、聞いてなかった」

「うち、入居者とトラブった事ないですよね？」

「ああ、そういう話でしたか。ないですよ、安心してください。問題のある物件はこちらでは取り扱わないですし」

「ほらね」

壮太は胸を張ってみせた。池上は壮太の自信満々な顔を見てクスリと笑うと、「今、車回してきますね」と言った。

「うん、ありがとう」

壮太は池上の姿が見えなくなったのを確認してから、

「そういうことだから。ってかさ、俺が用心しなくちゃいけないんだよ。君が泥棒の可能性もあるんから」

と、小声で言った。

「泥棒？」

「だって、家出とか言ってたって本当は帰る家があるかもしれないじゃない。家に忍び込んで物を盗もうとする奴だっているんだよ。初めて会う人間のこと、簡単に信じるバカがどこにいるの」

「私、泥棒なんかしないですけど」

「そか。じゃあ学生証持ってる？ それ見せて」

学校には二度と行かないつもりだったので制服は置いてきたが、学生証だけは出掛ける時の癖でカバンに放り込んでいた。壮太に手渡すと、彼はそれを数秒凝視した。

「十七歳か。ホントに高校生なんだね。池上さんにはこの話はボツになったことにして店と切り離して考えような。真面目に契約出来ないから。どちらにしても部屋を見た後、入るか入らないか決めていいからね」

「お金は？ 今払えるお金、ホントにないですよ？」

「バイトとかしてないの？」

「してます」

「じゃあ、給料は入ってからでいいよ」

壮太との内密な取り決めが終わると、ガラス越しに店の外から池上が「どうぞー！」と叫んでいるのが見えた。私は何だかよくわからないうちに壮太の部屋を見に行く事になった。

鬱蒼とした森にでも迷い込んだかのような場所に、そのマンションはあった。背の高い樹木が三階建てのマンションを囲んでいる上、こげ茶色の外壁に蔦を覆わせてあるので少々おどろおどろしい印象だ。この一角だけ、私が生まれるよりもずっと昔にタイムスリップしてしまったような雰囲気がある。

マンションの前で車から降りると、目の前に鮮やかなピンク色をした一輪のコスモスが、空を仰ぐようにしてピンと立っていた。建物がそんな様相だったので、たった一輪でもピンク色が一層華やいで見える。

「俺、コスモスが好きなんだ。特にこうやって道端で頑張ってる奴」

壮太が言った。

「ふーん、なんか、意外」

「そう？ 風に吹かれても雨に打たれても力強く生きてるところなんて泣けてこない？」

確かにいつ踏み倒されてもおかしくない場所で、そのコスモスは地面にしっかりと根を下ろし、細い茎ながらも逞しさを醸し出している。

「この二階だから」

私がコスモスに気を取られていると、建物中央にある表玄関の前で壮太が斜め上を指差した。壮太は両側に開く二枚扉の右側を開け、一階に通じる階段を五段上った。上りきったところから見て左右に分かれている廊下は、各部屋と、網入りガラスが使用された窓がそれぞれの部屋の前についている壁で囲まれているため少々薄暗い。建物の外側から見た時、表玄関側にも部屋があるのかと勘違いするような造りだった。

二階に上がる階段を七段上がると踊り場がある。そこにも柵付きの大きなガラス窓があり、こちらは透明なので廊下とは対照的に明るくなっている。もう七段上がったところを右に折れ、『202』と表示されたドアの前で、「ここがうち」と壮太が言った。

赤茶色の古びたドアの中に入ると、十二畳ほどのリビングダイニングが私を出迎えた。濃い木目が基調となったこの部屋には、低いアンティークな長方形のコーヒーテーブルを中央に、皮の破れかけた三人掛けのソファと一人掛けのソファが二つ、向かい合わせに置かれていた。壮太はその脇を歩きながら、「どうぞ、上がって」と、手招きした。

玄関の吐き出し口のすぐ横にあった間仕切りのせいで見えなかったキッチンが、廊下側の窓に沿って設置されていた。昔ながらの水道の蛇口のついたシンク、まな板を置いたらいっぱいになりそうな調理台、写真でしか見たことのない古い型の二口コンロ……。その脇から少し離れたところに、大型ではあるがかなり年季の入った冷蔵庫があった。

「ちょっと古いけど住めば都だから。あっちが個人の部屋ね」

建物同様、置いてあるものからして時代が違うと思いながら壮太の指差した方を見ると、真正面に扉が二つあった。

「二人ともいるかな？」

壮太がそれぞれの扉をノックし、「落合君と高城さん、いますかー？」と声を掛けた。

すると、何も返事のないまま二つの扉が同時にすーっと内側に開いた。幽霊でも出てきそうな雰囲気、私は息を呑みながら身構えた。

それぞれのドアの向こうから、男性と女性が何も言わずに顔を出した。一瞬、本当に幽霊が出てきたのかと思ってしまうくらいオーラのない二人だった。

「お休みのところごめんね！　こちら、入居希望の……あ、名前、なんだっけ」

壮太が二人とは対照的に明るく振舞い、私に名前を訊いた。

「神崎です。神崎絢那」

「神崎絢那さんね、よろしく。で、こちらが落合聡君。こちらが高城泉水さん」

壮太が一人で取り仕切ったの簡単な自己紹介は、名前を呼ばれた者が頭を順に下げる事で終わった。

「高城さん、部屋見せてもらっても大丈夫？」

「ええ」

高城泉水は微かに聞こえるくらいの声で返事をした。歳は二十五、六といったところだろうか。若いのに生気がまるで感じられない。心ここにあらずというか、魂ごとここにはないような、そんな不気味さがある。私は泉水が後ろを向いた隙に目を閉じてみた。

モノクロの中の彼女は、口を閉ざしたまま何かに怯えていた。異様なほどの警戒心を示しているが、私に対してだけではないようだ。自分以外のすべての人に向けられている。何かよほどのことがあり、心に大きな傷があるのだろうか。でも、それを必死で打ち消しているのか、誰にも知られなくないという思いが強いのか、何も語ろうとはしない。

落合聡のことも見たかったが、先ほどの自己紹介で私に軽く会釈をした後、彼はすぐに扉を閉めてしまっていた。

目を開けると、既にこちらに向き直っていた泉水に「どうぞ」と導かれた。

「失礼します」

二段ベッドだけで部屋はいっぱいだった。かろうじて歩けるだけの細いスペースしかない。ベッドは上段下段にそれぞれ引かれたカーテンで、中が見えないようになっていた。

「ベッドが自分だけの部屋ね。他の人は立ち入り禁止。ちょっと狭いけど、慣れると快適だよ。手を伸ばせば何にでも手が届く」

空室である下段のカーテンの端を少し捲りながら、壮太が言った。

「そう……なんですか」

一人一部屋あると思っていた私は、正直面食らった。

「まあ、とりあえずこんな感じだから。あ、池上さん、ありがとう。あとは神崎さんと二人で話しますんで」

個室の説明を簡単に終わらせた壮太はダイニングに戻り、玄関で待っていた池上を店に帰るように促した。

「じゃあ、決まりましたらご連絡ください」

「わかりました。気をつけて」

池上を送り出した後、壮太は私に「どうぞ」と言って、ダイニングの三人掛けのソファを片手で指した。そして、自分は向かい側の一人掛けに座った。

「どうする？ ベッドでの生活は嫌かな？ あ、このダイニングは共用だからいつでもくつろいでいいからね。月に一万ちょいで寝泊り出来るところってそうそうないと思うんだけど」

途切れることなく説明を続けてきた壮太だったが、ここまで言うとぴたりと言葉を発しなくなった。私も、これまで想像していたと一人暮らしのイメージとかけ離れていて、戸惑うことしか出来ずに黙っていた。

私は所在無く、壁に掛けられた時計を見た。九時を過ぎていた。

泉水の心の傷がこの住人のせいならば不動産屋に訴えているはずで、そうせずに暮らしているという事は問題はないのだろう。兎にも角にも一泊分の宿泊費さえ持ち合わせていない私がベッドでの生活は嫌だと言ってしまったら『寒空に野宿』が決定なのだ。選択の余地はない。

「よろしくお願いします」

私は頭を下げた。

「よし、決まりね。池上さんには、神崎さんに断られたけどネットから応募してきた人に入ってもらおうことにしたって言うから」

壮太が何を考えているのかさっぱりわからず、落とし穴があるのではないかという思いが抜け切れなかった。が、家出した身で誰も頼れる状況ではない私としては、すぐに住み家を見つけられたことは幸運だったかもしれない。それに再び騙されたとしても、心を開かなければこれ以上傷つく事もないだろう。

「荷物、ベッドに置いてきな」

壮太に言われ、私は小さく頷いた。

こうして、私の新しい生活が始まった。

カーテンを捲り、あてがわれた部屋であるベッドに入った。

上の部屋には泉水がいる。彼女少し動く度、ミシミシときしむ音ができる。慣れるまでに時間が掛かりそうだが、はしごを上り下りしないで済む分、下段の方が何かと利便性が良さそうだ。実際、シーツを敷く際に邪魔になったバッグをベッドの外に出すのが容易だったし、シーツの端をマットに折り曲げるのに、私は無意識にベッドから降りていた。

「神崎さん、ちょっといい？」

バッグから部屋着用のチュニックと七分丈パンツを取り出した時、ドアの向こうから壮太の呼ぶ声がした。大声だったとは思えないほどの声はかなりはっきりと聞こえる。同居人の出す音は、否応なしにプライベートゾーンに侵入してくるということか、と思った。

ベッドから降りてドアを半分だけ開けると、壮太がダイニングに来るよう片手で手招きした。再びソファに招かれ、また壮太と向かい合わせに座った。

「ベッドでは私語は禁止ね。携帯のテレビを見るのはいいんだけど、イヤホンつけて油断しないように。大声で笑ったり、ぶつぶつ独り言呟いてる人がたまにいるんだ。電話とかもダイニングに来るとかして、お互いに思い遣りましょうってことでよろしく」

ダイニングにいれば私語が許されるってものでもないような気がするけど……。

私は喉まで出掛かった言葉を飲み込んだ。

「そんなに神経質になる必要はないけど臨機応変にやってください。ここに詳しい約束事が書いてあるから読んでね」

壮太に手渡された紙には、家事分担について細かく書かれていた。

「一応説明した方がいいか。料理は各自が好きな時にやっていいってことになってる。食事はダイニングでしてください。ベッドでは食べないでね。匂いの問題と、神崎さんはしないとは思いますが、食べこぼしとかすると虫が来るでしょ。他の人の迷惑になるし不衛生だからね。掃除は四人でローテーション。トイレと風呂とリビング。で、神崎さんが入ってくれたから一日何もしなくていい日っていうのがある。自分のベッドは誰も触らないのが原則だから自分で綺麗にしてね。他に何か聞きたい事ある？」

共同生活なのだから当たり前だが、学校から離れても規則に縛られるのだなと思ったら少しだけうんざりした。

「面倒くさいって思ったでしょ。でもやってみるとそうでもないよ」

また、心を読まれた。読心術でも出来るのだろうか。

「神崎さん、って呼びづらいな。普段、なんて呼ばれてるの？」

「絢那とか、アヤちゃんとか……です」

「じゃあ、アヤちゃんって呼んでいい？」

「いいですけど」

「俺の事は壮太って呼んでいいよ」

「壮太さん」

「さんはいいよ、くすぐったいから。壮太で」

「じゃあ、私も絢那でいいです。ちゃんづけは、うんと年上の人からしか呼ばれてないから」

「わかった。絢那ね」

正直、名前の事などどうでもよかった。私は急激な睡魔に襲われていた。寝床が確保され、着替えて寝るだけというところで壮太に呼ばれ、道徳の授業のような規則の羅列が子守唄となつてとどめを刺したのだ。壮太の話を意識の遥か彼方で聞きながら、私の瞼は五秒位引力に従った。

「寝ちゃった？」

勢いのある声に、ハッと我に返った。

「あ、寝てました？ ごめんなさい」

「その調子じゃ最近まともに寝てないんだろ。家出するくらい辛い事があったんだろしな」

「すみません……」

謝りつつも、朦朧とした頭がすっきりすることはなかった。

「よしよし、もう寝よう。おやすみ」

「ホントにありがとうございます……」

頭を下げると、この部屋とは違う何か別の場所が見えた。

「ここで寝るなよー」

壮太の呼び掛けに、立ったまま寝ていた自分に気が付いた。ふらふらとベッドに戻り、出してあったチュニックを掴んだ時、限界に達した私はそのままの服装で眠りについた。

次の日。目覚めると辺りはやけに静まり返っていた。いつも聞こえるはずの水槽のポンプや側道を走る車の音がしない。その代わりに見慣れない木目の低い天井が目に入り、一瞬どこにいるのか混乱した。

部屋、借りたんだっけ……。

そう思い出すまでに何分掛かったのだろう。ようやく状況を把握し、手を伸ばしてベッドのカーテンをそっと開けると、上段の住人はすでにどこかへ出掛けていた。隣りの様子を伺うために部屋を出ると、ドアが開け放たれていて壮太も聡も不在だった。

私はとりあえずコーヒーを飲もうと思った。半分寝ぼけた状態で、叔母の家で毎朝していたようにキッチンの前に立ち、途方に暮れた。コーヒーの粉はおろか、カップもスプーンない。今の

私には最低限の生活すら送れないのだと、今更ながらに気が付いた。

ベッドに戻り、再びゴロリと横になった。ベッドの木目を目でなぞりながら、ため息を何度もついた。頭には、どうしようという言葉しか浮かんでこない。

私は携帯を手を取った。電話帳を開き、記された名前を端から見ていく。香里の名に辿り着いた時、気持ちがどんよりとし、体がずしんと重くなった。誰かを頼ったところで、またその人に傷つけられるだけだ。私の思考は自動的に「人は裏切るもの」と切り替わるようになっていた。

考えていても仕方がないので、給料を清算してもらいにバイト先に行こうと思った。まず先にそれを考えなかったのは竜也がいるからだ。バイトは辞めるつもりだ。それを店長に告げ、自分の荷物を引き取る為にも一度は顔を出さなくてはならない。私は意を決して出掛ける事にした。

店の正面のガラス窓から中を伺うと、美由が暇そうにカウンターに寄り掛かっていた。扉を静かに開けたが、上部に付いた鈴は相変わらずカランカランと大きな音を立てた。

「いらっっしゃ……あ、絢那！ もうそんな時間？」

美由が焦りながら事務所の時計を覗き込んだ。私はいつも、彼女が帰る時に交代して店に出ていた。

ルームシェア10

カウンターの向こうには竜也がいる。下を向いたまま食器を洗っていた。美由紀が私の名を呼んだので気が付かないはずはないのに、顔を上げようとはしなかった。好都合だった。

「ううん、違うの。店長に話があつて……」

美由も何を考えているかわからない。目を閉じないように気をつけながら、私は足早に前を通り過ぎた。

「店長……」

事務所で一服していた店長に声を掛けた。

「あ、絢那。おまえ、どうした？」

店長は昨日の出来事を知っているかのような口振りで言った。

「ちょっと、こっちにおいで。美由、店頼む」

そう言って、私を裏口の外に連れ出した。竜也がちらりところらの様子を伺ったのが視界に入った。

店の中に声が聞こえないように、裏口のドアを閉めると店長が切り出した。

「何があつたんだよ。竜也に様子を聞いたら出て行ったっていうから心配してたんだぞ」

「すみません……ちょっと、いろいろと考えることがあつて……」

「竜也のところ以外、世話になれるところあつたのか？」

「え、まあ」

「友達？」

「いえ……」

「違うの？」

「はい、不動産屋でルームシェア出来るところ探しました」

「シェアって、他人と一緒に住んでるの？」

「はい。でも女性もいるし」

「女性も……って、男もいるってこと？ 何人で住んでるの？ 大丈夫なの？」

「大丈夫です。何かあったら仲介してくれた店に言いますから」

「何かあったらじゃ遅いんだよ？」

「そうですけど、他に頼れるところなんてないし」

「うちにおいでって言いたいところだけど、かみさんがいい顔しないしな」

人の言い訳には必ず裏がある。あれだけ世話になった店長の事すら疑ってしまう自分が悲しかった。

「それで、今日はどうした？ 給料か？」

「給料日より早いんですけど、いただけますか？」

「いいよ」

即答だった。

「あと……」

「ん？」

「バイト、辞めようと思うんです」

「ええ？ ちょっと待ってよ。一人暮らし始めたのに、どうして辞めるんだよ。本格的に生活費稼がなくちゃならないんだろ？」

「そうなんですけど……」

「やっぱり竜也と何かあったんだろ？」

私は頷くことが出来なかった。闇の声以外、実際に何かされた訳ではない。

「言いたくなかったら言わなくてもいいけど、仕事辞めたら困るだろ？ もし竜也のことが気になるなら、顔を合わせないように何とかしてやるよ」

「何とかってどうするんですか？」

「やっぱりそうなんだ。大丈夫だよ、アイツとシフトが重ならないようにしてやるから」

「だって、竜也さん、毎日出てるじゃないですか」

「いや、来月から就職活動するんで、バイトの日を半分くらい減らすんだよ」

「そうなんですか……」

「うん、だから、いない日に一日いればかなり稼げるだろ？ 週四で今まで通り半日じゃ五、六万できついだろうし」

「一日いたら、美由と重なりますよ？」

「竜也がいない日は厨房に手伝ってよ。アヤちゃんデザート得意でしょ？」

「でも……」

シフトを工夫してもらったところで、全く接触がなくなるわけではないだろう。

「せめて、次のバイトが見つかるまでいたら？ アヤちゃんの気持ちは尊重したいし、無理に引き止める事は出来ないから」

生活の為には働かなくてはならない。竜也と顔を合わせないで済むのなら、美由や店長の闇の声を聞かないように過ごせば何とかなるかもしれない。目を閉じなければいいのだ。私は（生きる為……）と自分に何度も言い聞かせ、決心した。

「ありがとうございます。じゃあ……」

次が見つかるまでもう少し働かせてください。

そう言いかけたその時だった。コンタクトレンズにゴミが入り、目がちくちくと痛み出した。

私は反射的に目を閉じた。慌てて目を開けようとしたが、痛みのせいで数ミリも開ける事が出来ない。神様に、目を閉じて現実を見なさいと言われていたかのようだった。

案の定、モノクロの店長が瞼の裏に現れた。

『処女じゃあるまいし、覚悟があるから男のところに行ったんじゃないのか？ 急にやめられると困るんだよ。給料だって今日渡すとなったら俺のポケットマネーだし。それに、飲みに行こうと思ってたから金持ってるんだよな。タイミングのいい奴だよ、全く』

父のように慕っていた店長からの、過去には決して浴びたことのない冷たい台詞だった。予測出来たにしても、知らないのと知ってしまったのとでは雲泥の差がある。聞かなかった事にしてここで働く事はもう出来ない。

「目、どうした？」

「ゴミが入ったみたいで……」

「そう。あ、ちょっと待ってて。給料持ってくるから」

店長は裏口の扉をあけて入っていった。

「これ、給料ね」

戻ってきた店長に手渡されたのは、締めまでのものだった。昨日まで働いた分ももらいたかったのだが、言い出す気力が失せていた。

「ありがとうございます……」

私はやっとのことで声を振り絞り、店を後にした。

重い足を引きずりながら、暗い道を歩いていた。途中のスーパーに立ち寄り、インスタントコーヒーと砂糖と灰色の無地のマグカップを買った。可愛い柄や色の付いたものが好みのはずなのに、目に付くのは暗い色で厚みがなく、細めのものばかりだった。その中で一番安いカップを選んだ。コーヒーなどどうでもよかったのだが、給料をもらったらコーヒーを買うというプログラムが自分の中で勝手に動いていた。

スーパーを出て、夢遊病者のようにふらふらと歩きながらマンションの前に着いた。張り巡らされた蔦をぼんやりと目で辿りながら、私は大きくため息をついた。

どうして皆、人が傷つくようなことを笑顔の裏で呟いているのだろう……。私がいったい何をしたっていうの？……。

私は絶望感に打ちひしがれていた。身近にいる信用していた人達がすべて、心の裏側では私を罵っていた。壮太の囁きの声が聞こえないことが唯一の救いだったが、彼の事もただの同居人という位置づけで接しようと固く決意した。私が笑顔を見せなくなったのはこの日からだった。

過去の傷1

玄関を開けると、三人掛けのソファに聡が座っていた。一人で食事をしていたようで、皿にはタルタルソースのかかった白身魚が一欠けら残っていた。それを頬張り、箸を置くと、控え目な笑顔で私を迎えた。

「おかえり」

「た……だいま」

聡から声を掛けてきた事に意表をつかれながら、私は反射的に挨拶を返した。

「紅茶飲む？ 今、自分の分をいれようと思ってたんだ。絢那さん……でいいんだっけ？ なんだか疲れた顔してるよ」

昨日は頭を下げるだけで何も言わずに部屋の扉を閉めてしまい、暗い人というイメージがあった聡だった。だが、今日は臆することなく私に話し掛けてきた。柔らかで、すべてのものを包み込むような声をしている。でも、優しさを感じれば感じるほど嘘の度合いが大きい気がして、私は心に厚い壁を作った。

「いえ、自分の分は買ってきましたから」

人の好意など二度と受け取らない。親切に見える邪心などうんざりだ。

そう思いながら、私は買ってきたばかりの灰色のマグカップとコーヒーと砂糖を袋から取り出し、テーブルの上に置いた。マグカップを再度手に取って包装を剥がすと聡が、

「シンプルな買ってきたね。これに紅茶入れていい？」

と、私からカップを取り上げた。疑いの目で見られていることなど全く気が付いていない。

「ずいぶん、強引ですね」

カップを取り上げられてしまった私は、慚然としながらも仕方なく手前のソファに腰掛けた。そして、後ろ向きでお茶を入れている聡に顔を向けて目を閉じた。

きつとこの人も心の中では私の事をあざ笑っている。

人を信じないでいると、それを確かめるのが半分面白おかしく感じるから不思議だ。しかし、モノクロの景色の中の聡は泉水と同様、暗く沈んだまま何も語ろうとはしなかった。

「どうしたの？」

振り向いた聡が私に訊ねた。

「いえ、ちょっと目が痛かったから。でも大丈夫です」

聡の心の闇は見えなかったものの、本当の理由など絶対に話さない。

「今日はバイトに行ってきたの？」

「そうです。でも、辞めちゃいました」

信頼関係を築く努力など一切したくなかった私は投げ遣りに答えた。

「そう。他にやりたいことでもあるの？」

聡は、私の気のない返事にも穏やかな態度を崩さない。

「別にないですけど」

「そっか。疲れたらしばらく休むのもいいよね」

聡は私の言葉を否定することなく、静かに微笑んだ。

私が何も応えずにいると、聡もそれ以上何も話さなくなった。私は紅茶を飲み終えたらすぐに自分のベッドに潜り込もうとそればかり考えていた。聡はやはり何も感じていないか、平然と紅茶を啜っている。

「ただいま。あ、二人でお茶してたの？ 俺も入っていい？」

ドアが勢い良く開けられ、密閉された部屋の空気がふわりと動いた。壮太が帰ってきた。

「おかえり。紅茶でよければいれるよ？」

「ああ、頼む」

そう言って、壮太は荷物を部屋に置きに行った。戻ってくるなり、「ジャスミンティ？ いい香りだね」と言いながら、鼻から大きく息を吸い込んだ。

「聡と絢那が二人でいるところなんて初めて見たよ。管理人としては、同居人が仲良く過ごしているのを見るのはとても嬉しい」

壮太が私達を交互に見ながら大袈裟に喜んでいる。一緒にいただけで仲良くしているように見えるなんて楽観的過ぎると、私は心の中で反論した。

「そりゃそうだよ。二人でいるの初めてだし」

聡は壮太につられて嬉しそうな顔をした。私は気付かれないように鼻でため息をついた。壮太が聡を見て更に声をあげて笑った後、話を戻した。

「二人で何、話してたの？」

「内緒」

聡が私の顔をちらりと見ながら呟いた。かばっているつもりだろうか。

「別に内緒にしなくてもいいです。管理人さんにはちゃんと話しておかないといけないし」
私は和やかな雰囲気を持ち破るような冷淡に吐き捨てた。

過去の傷2

「何？ あちっ」

熱い紅茶に火傷しそうになりながら、壮太が私の話に耳を傾けた。私は壮太の慌てぶりを見遣ってから、

「今日、バイト辞めてきたんです。お給料はもらってきました。これ、今月の家賃です」

と言って、給料袋の中の一万円札を二枚、壮太に差し出した。

「辞めてきた……って、何かあったの？」

壮太はやっと私の深刻な状況に気付いたのか、神妙な顔つきになった。

「いえ、別に」

「じゃあ、他にやりたい仕事が見つかったの？」

「いえ」

「仕送りしてもらえるの？」

「いえ」

「じゃあ、どうするの？ お金は使えばなくなるんだよ？ 俺達、金銭的援助は出来ないよ」

「わかっています。ご迷惑は掛けません。明日、仕事見つけてきます」

「うん、そうしてくれる？ でも、大丈夫なの？ 今日もらってきたバイト代だって、高校通いながらだったから微々たるものでしょ？」

「ええ」

「家賃、今、払っちゃって食べていけるの？ 月末まで日数あるからこれ持っててもいいよ？」

「今日払っても月末払っても同じですからいいです」

「じゃあ、もらっておくけど。無理すんなよ」

「大丈夫です」

私は口角を全く上げずに受け答えした。壮太はじっと私の顔を見てから、首を傾げた。

「やっぱり、なんかあっただろ。話し方が昨日と全然違うよ？」

「別に……」

「また誰かの闇の声を聞いてきたのか？」

私は黙ったまま肯定も否定もしないでいた。

「闇の声って何？」

聡が話しに割って入ってきた。もう誰にも自分に深く立ち入って欲しくなかった私は、壮太に話した事を後悔した。

「あ、いや、何でもない」

壮太は私の心の動きを読み取ったのか、追求せずに話を止めた。聡も察するものがあつたのか、「そう」とだけ呟き、それ以上何も訊ねてこなかった。

「あの……明日、朝からバイト探ししますんで、今日は寝てもいいですか？」

人と接しているのが苦痛でならなかった。私は二人からの答えを待たずに、半分程度残っていた紅茶を一気に飲み干して腰を上げた。

「何か困った事になったらすぐに言えよ。一人で思いつめるなよ」

カップを流しで洗い始めた私に壮太が言った。

「ありがとうございます」

頼るつもりが毛頭ない私は、上辺だけの礼を言って自分の部屋に入った。

過去の傷3

翌日、私は近くのコンビニで履歴書を買った。店を出たところにあったベンチに座り、持っていたペンで経歴を書いた。高校の名前を書いたところで、ふと手が止まった。

中退はしてないけど、もう行くつもりはないんだよな……。

私はとりあえず、在学中と書いて後の事を考えるのはよそうと思った。

商店街を歩き、アルバイト募集の張り紙を出している店を探した。『十八歳以上。高校生不可』や、『フロアレディ募集』ばかりで、高校生可のところはファーストフード店くらいしかない。あんな甲高い声が飛び交うところに行きたくなかった私は、一日一人で過ごせるような地味な仕事を探していた。

ここも違う、ここはちょっと……と見て歩き、気付いたら商店街の端まで来ていた。生活の為には贅沢を言っていられない。私は逆戻りして、張り紙のある店ない店、端から当たってみる事にした。

君、高校生？ その割りに元気ないね……。

ああ、力仕事だから女の子はちょっと……。

エクセル出来ないんじゃない意味ないなあ……。

客じゃないとわかった途端、店主達は表情を変え、否定的な言葉を返してきた。雇い主にならない限り私はまた客の立場に戻るのに、強気でいられる理由がわからない。目を閉じて闇の声を聞くと、表面上もさることながら更に失望するような言葉を浴びせてきた。

『援助交際でもすればいいのに』

『女としてはいい体してんだけどなあ』

『かみさんが事務所にいなきゃ、いろんなこと教えてやるんだけど』

いい歳なのに先のことを読めないばかりか、いやらしい事ばかり考えている。世の中、こんな店主ばかりなのだろうか。例え私にスキルがあったとしても、これでは安心して働けない。往復し終えて、この商店街には女性の店主が一人もいないこともわかった。私はどうしたらいいのか途方にくれながら帰路についた。

商店街を抜け、人気のない路地に差し掛かったところで、向こうから聡がやって来た。

「バイト、見つかった？」

私のそばまでくると、そう質問してくるだろうなと予想した事を聡が訊いた。私は、表情から読み取ってよと心の中で呟きながら、

「いえ、まだ。この商店街は全滅でした」

と、ぶっきらぼうに答えた。

「そっか。この方向に歩いてるってことはもう帰るところ？」

「ええ」

「なんか気持ちのいい陽気だから散歩しない？」

「私、今日一日何も食べてないんで帰ります」

「何も食べてないの？　じゃあそこの店で揚げたてのコロッケ買って公園で食べよう。奢るから」

そういうと聡は無言で店に向かって走っていき、「コロッケ二つ」と注文した。一つずつ油を通さない紙に包まれたコロッケを受け取ると、店の隣に設置されていた自動販売機でペットボトルのお茶を二本買った。

過去の傷4

「その公園で食べよう」

私のところに戻ってくると、聡は住宅地の一角にある、滑り台とブランコしかない小さな公園を人差し指で指した。

「あれ？ ベンチがないからブランコでいいか」

聡は二つぶら下がったうちの一つに座り、「ここ、どうぞ」と隣りに招いた。

「聡さんってホント強引ですよ。見た目に寄らず」

私は悪態をつきながら、仕方なくブランコに腰掛けた。

「え？ 普通だと思うけど。ほら、熱いうちに食べよう」

聡は全く悪びれた様子もなくコロツケを差し出した。

「このサクサクしてところが旨いんだよね。ここのコロツケ好きでよく買うんだ。美味しくない？」

一口かじると、揚げたてのせいもあるだろうが家で食べている味と確かに何かが違う。

「北海道産の男爵を使ってるんだって。それも古じゃが。新じゃがとかメークインだとこの旨味は出ないんだってさ。店のおばちゃんが前に教えてくれたんだ」

「そんな企業秘密、喋っちゃっていいんですか？」

「調味料まではさすがに教えてくれなかったからいいんじゃない？ 俺も男爵で作ってみたけど、この味にはならなくて」

聡は三口で平らげると、空になった紙をくちやくちやくと丸めた。

「ところでバイトどうするの？ 違う場所で探すの？」

「そうですけど」

「もし見つからなかったらどうするの？」

「そんなこと、わかりません！」

私は無然と答えた。大人しいタイプの間かと思いきや、人の心に土足でずかずかと入り込んでくる。人の感情に対し、鈍いのかおおらかなのかわからない。何だかだんだん腹が立ってきて、聡の本心を聞き出してこの場から立ち去ろうと思った。私は眠い振りをして軽く目を閉じた。しかし、この間と同じくモノクロの聡は黙ったまま何も話さない。

「今日は頑張ったから疲れたみたいだね」

私がどんなに苛立っていようと、聡は平静さを保ち続ける。

「壮太が言ってたこと、覚えてます？」

自分からあの話を持ちかけるつもりなどなかったのだが、一人にさせてくれない聡に、私の心情を理解してもらうには説明するしかないと思った。

「ん？」

「闇の声のこと」

「ああ、なんかそんなようなこと昨日言ってたね」

「私、目を閉じると人の心の中が見えたり聞こえたりするんです」

「へえ、すごいね。俺の声も聞こえる？」

聡は驚きも疑いもせず、感心してみせた。

過去の傷5

「それが聡さんの声は聞こえないんです、姿は見えるけど……。泉水さんもそう。壮太は姿すら現さないんです」

「へえ、そうなんだ。なんでだろうね」

「だけどこの数日間、会う人みんな、私を陥れることばかり言ったんです。表面では調子のいい事並べるくせに。明日もきっとそう。場所を変えて仕事を探してもきっと同じです。魁も香里もおばさんも店長もみんな信じてたのに私を裏切ってた」

「魁って誰？」

「彼……だった人です」

私は少し迷って過去形で答えた。

「その人も嫌な事言ってたの？」

「私のこと、いつも笑ってるけど心の中で何を考えてるかわからないって。香里の方がさばさばしてて付き合いやすいつて……。彼、知らない間に二股かけてたんです。香里とこそこそ影で会ってた」

「浮気？」

「心変わりだと思います。香里と会ってる時、私が電話しても出なかったし、メールの返信も結局来なかったから……。やましいことがあるから連絡してこれないんです」

「そう。辛かったね」

「香里が彼の腕につかまった時、周りに人がいても振り解こうとしなかった。香里と公認の仲になってもいいってことですよね。私が具合悪くて学校を休んでた日に……。酷すぎませんか？いつからそうなったのか全然わからないけど、私がいなくて何してるかわかんない」

「絢那さん……」

「私の味方って顔してた人、みんな敵だった。優しい振りしながら影では私を邪魔者扱いしてた。大好きだった人達全員ですよ。大切に思ってた人全部、いっぺんに失っちゃったんです。悲し

過ぎて涙も出なかった。この先ずっと、そういう嫌な声を聞く毎日が続くんです。ずっとずっと、人を信じられないまま一人で生きていけなくちゃいけないんです。この辛さ、あなたにわかりますか？」

心を見せまいと思っていたのに、私の目をじっと見つめて黙って聞いている聡に、封印しようとしていた悲しみが溢れて止まらなかった。

「こんなことなら死んだ方がまし！ 死にたい！ 壮太にさえ出会わなければ死ねたのに。もう生きていたくない」

最後に私がそう言い放つと、聡は一瞬にして顔から笑みを消した。そして、低く小さな声で言葉を放った。

「簡単に死ぬとか言うな」

聡と出逢ってから見た事のない怖い表情だった。聡は刺すような視線で私を睨みつけながら言葉を繋いだ。

「俺には弟がいたんだ。三歳年下。そいつを俺の不注意で死なせたんだよ。これからたくさんやりたいことがあっただろうに。弟は生きたかったんだよ。それでも人間なんて簡単に死んじゃうもんなんだ。だから、自分で自分の命を殺めるようなこと言うな」

聡を怖いと思った。ゆがんだ優しさで適当にあしらう人達とは違う、真っ直ぐに向き合う誠実な怒りだった。居たたまれなくなった。が、ここから逃げてはいけないような気がした。そして、人間が簡単に死ぬということの深い意味を知りたくて、私は聡に質問した。

過去の傷6

「どうして……亡くなったんですか？」

「弟？ 脳溢血。あっけないもんだよ」

「脳溢血……って、そんなにすぐ死んじゃうものなんですか……？」

「いや……俺がもっと気をつけてやれば良かったかもしれない。弟と二人暮らしだったんだけどさ。何日か前からずっと頭が痛いつて言ってたんだ。その日も朝から具合が悪そうだったんだけど、あいつ、薬飲めば治るよってニコニコ笑って言ったんだよ。だから大丈夫だと思って、あいつを置いて夜まで出掛けちゃったんだ。帰ってきたら、うつ伏せに倒れて冷たくなっていた。急いで救急車呼んだけど遅かった。元々体の弱い奴だったから、普段から心配してたつもりだったのに、肝心な時にそばにいてやれなかった。俺、何やってるんだろな。俺のせいで死んだんだ」

聡は泣いていた。

「自分を……責めないで……」

「いや、俺のせい。発見が早ければ助かったかもしれないのに」

「聡さんが苦しむなんて、弟さんだって望んでないはず」

「そうだとすると、俺は一生、罪の意識を消しちゃいけないんだ」

「そんな……」

私はそれ以上、何と言葉を掛けていいかわからなかった。俯いたまま片手で顔を覆っている聡を、そばで見守っている事しか出来なかった。

しばらくして、目を真っ赤にした聡が顔を上げ、一回鼻を吸ると口元に笑みを浮かべた。

「弟といた部屋は広すぎるし、思い出があり過ぎるからここに越してきたんだけど、壮太に会った時には驚いたよ」

「え？」

「背格好や目鼻立ちが弟にそっくりでさ。弟が生き返ったのかと思った」

「そうなんですか」

「ここ、家賃が安いからあまり考えずに入居したんだけど、最初の一年くらいは壮太の顔を見る度、弟の事を思い出して辛かったよ。そしたらあいつ、それを見抜いて『辛い事からは一度離れないと心は癒えないよ』って言ったかと思ったら、俺と一切口を利かなくなったんだ。俺がダイニングにいる時は部屋から出てこなくなった。顔を合わせないようにしたんだよな。気を遣われるのが嫌で癪に障ったりもしたけど、どうでもいいかって開き直ったら、壮太の思惑通りだんだん心が落ち着いてきてね。それもまた見抜かれてた。壮太から話をするきっかけを作ってきて、普通に会話できるようになったんだ」

「なんか、壮太ってエスパーみたいですね」

「うん。あいつ、絶対人の心の透視出来るよ」

初めて意見が一致した。私達は顔を見合わせて少しだけ笑った。

「それでね、罪滅ぼしっていうか、弟にしてやれなかったことを壮太にいろいろしてやりたいと思ったんだけど、壮太って弟と正反対の性格なんだよ。しっかりしてて一人で何でもやっちゃう。実際年下なんだけど、世話になりっぱなし」

「そんな感じしますね」

「そうでしょ？ でき、ある時、壮太がぴしっと言ったんだよ。聡さん、俺を誰かの代わりにするのやめてくれませんかって。ありがた迷惑ですって」

「キツイですね」

「いやあ、おかげで目が覚めたよ。それまで弟の死を受け入れられなかった自分にも気が付いた。罪悪感を壮太で誤魔化そうとしてた。それで、生前に弟が言ってた事を思い出したんだ」

「なんて？」

「兄ちゃん、俺の心配ばかりしてないでもっと自由にしていいよ。兄ちゃんは兄ちゃんなんだから自分の人生楽しんでって」

「自分の人生……」

「それまでの俺って、誰かを世話する事でしか自分の存在価値を認めてなかったんだよ。結局は依存。自分を維持するために誰かを利用してた。それを知らせる為に弟は死んで、壮太が現れたんだな」

「そうだったんですか……」

「生きていく上での必然的な出来事とはいえ、人の死をもって教訓を得るっていうのは辛すぎるよな。でも、だからこそ、心に深く刻みつけられるんだろうね」

聡にいつもの穏やかな笑顔が戻った。

過去の傷7

「だから絢那さんの今の境遇、必ず意味があるんだよ。辛いだろうけど、乗り越えた先には何か開けた世界が待ってるよ。俺もまだその入り口に立ってる感じだけ」

聡の心が暗く沈んでいた理由はこれだったのかと思った。

「この事、誰にも話してなかったんだけど、絢那さんに話したら少しすっきりしたよ。ありがとう」

聡はそう言って笑った。私は照れて俯く振りをして目を閉じてみた。すると、モノクロの聡も笑っていた。

「あとさ、思ったんだけど、彼の事を否定するのは早いような気がするよ」

「え？」

突然、魁の話に切り替えられ、私に再び緊張感が走った。

「上っ面な付き合いをしてきた訳じゃないんでしょ？」

「私はそう思ったけど」

「絢那さんがそう思えるなら、彼だってそうだよ。本音、ぶつけてみた？ 何かお互いに心に引っかかっているものがあるのかもしれないし。彼が絢那さんのこと、何考えてるのかわからないって言ったのは、絢那さんも彼を信用していないところがあって心を開かなかったってことの表れなんじゃないかな」

「信用してない？……」

「うん。嫌われるのが怖くてとか、遠慮してたとか、人との間に壁を作ってたなら相手も壁を作ると思うよ。でも今は、いろんな人にいっぺんに辛く当たられて頭の中ぐちゃぐちゃだろうから、無理に接点持たない方がいいと思うけど、少し落ち着いて来たら言いたい事言う様にしてごらんよ」

「また、傷つくの、嫌だ……」

「焦らなくていい。そう思ってるうちは何もしなくていいんだよ。自分を癒すことだけ考えて。自分を大切にしながら進んでいけば、心が休まる日がきっと来るから」

「そんな日が来るなんて思えない」

「決め付けたら前には進めないよ？」

「この能力がある限り、人なんて信じられません。壁があろうとなかろうと、罵られていたことには代わらないし」

「まあ、とにかく今は自分のことだけ考えてごらん。今さ、酷い事を言った人達のが憎くて仕方ないだろ？」

「うん……」

「でも、人を憎むことにエネルギーを使ってる状態って苦しくないか？」

「苦しいです」

「それをね、変えるんだよ」

「変えるって？」

自分に近い存在の人達に思いもよらない酷い事を言われて、憎まずにいられる冷静な人間などいるのだろうか。反発する気持ちに心を占められ、私は聡の言葉の意味を理解することが出来なかった。

過去の傷8

「人ってね、同じ状況下においても心の持ち方で全く違う気持ちになれるんだ。人生において、本当の意味での目標って知ってる？」

「目標？」

「うん」

「えっと、夢を叶えること……ですか？」

「大抵、そう考えるよな」

「違うんですか？」

「うん、違うよ。いいや、仮に夢を叶えることだとするよ。絢那さん、何か夢がある？」

「将来に絶望しか感じないけど」

「持ってた夢でもいいよ」

「介護士になりたいと思ってたこと、あります」

「お、そかそか。じゃあさ、その介護士になるにはどうしたらいいの？」

「資格を取る……」

「そうだね、勉強をいっぱいして試験受けて合格しないとね。でさ、晴れて受かったとするよ。働く場所も見つかった。夢が叶った訳だ。でも、もしね、その時に今みたいな状況だったとしたら心はどうか？ 介護士になる夢が叶ったことで、嫌な事すべてちゃらに出来る？」

「今のままだったら、試験に受かった喜びはあっても心の底から喜べないかもしれない。空しさが残るかも……」

「夢も叶ったのに空しいっていうのは変だよな」

「夢を叶えることが目標じゃないとしたら、いったい何なんですか？」

「絢那さん、どういう時に幸せを感じる？ シチュエーションはともかく、気持ちがどういう時に幸せ？」

「今と正反対の時、かな」

「今ってどんな気持ち？」

「辛くて悲しくて、心が落ち着かない」

「じゃあ、その反対は？」

「楽しくて嬉しくて、心が穏やかでいられる」

「そうだよ、心の穏やかさを保っていられば、少くくらい何かがあっても平気って思えたりしないか？」

「そう言われれば、魁とうまくいってる時は部活でへとへとになっても全然辛くなかった」

「そうなんだよ。心穏やかに過ごしていると何でも充実するよね。夢を叶えれば高揚するし嬉しい気持ちになれるけど、その一瞬だけなんだよ。夢を叶えたはずなのに、また新たな目標に向かって山を登り始めるから辛いことが待ってたりするんだ。それも大事なことだけど、苦しむ事は人生の目標じゃない」

「本当の意味での目標は……」

「心を穏やかに保つこと。俺はそう思って日々過ごしてる」

だから、この人は私の事を否定するようなことを言わないんだ、と思った。

「あー、ごめん。すっかり暗くなっちゃったね。帰ろ」

聡はブランコから降りるとマンションの方を指差した。私も立ち上がり、黙って頷いた。

導き1

マンション自室の玄関前に付くと、壮太が私達に背を向けた状態で廊下にしゃがみ込んでいた。

「壮太？」

私が声を掛けると、壮太は振り返って口に人差し指を当て「シーツ」と言った。

「久しぶりに現れたね」

聡は何が起きたのか知っているらしい。

「何かいるんですか？」

「ほら、あそこ。見えない？」

聡が暗い廊下の突き当たりを指差した。目を凝らしてみると、山積みになったダンボールの陰に生き物がいた。白い顔だけをひょっこり覗かせている。

「犬？」

「この家に何かあると現れるんだよ。絢那に会いに来たかな。近づいてみ。絢那が目当てなら、そばにいくとどこかに連れてってくれるよ」

壮太は犬から視線を逸らさずに、斜め後ろにいた私の方に顔を向けて呟いた。

「どこかって？」

「迷える人をその答えのある場所に導いてくれるのさ」

「迷える人って私の事？」

「他に誰がいるんだよ」

私は壮太の言葉に無言で口を尖らせてみせた。犬は暗がりで見えないオーラを放っている。

「ほんとだよ。絢那さん、そばに行ってください」

聡までそう言っている。

「なんだか怖い」

「犬、嫌い？」

「いえ、動物は大好きです」

動物は好きだが、日く付きの犬となると話は別だ。

「じゃあ、大丈夫だよ。ほら、あいつも待ってるよ」

壮太が急かした。犬は微動だにしない。

「俺は部屋にいるね」

さっきまで執拗なまでに私の世話を焼いていた聡なのに、この事には我関せずという態度でさっさと家の中に入ってしまった。

「ほら、行ってみ」

聡に気を取られていると、壮太が私の背中を押した。

「ちょ、ちょっと、一人で行くんですか？」

付いて来てくれると思込んでいた私は慌てて訊いた。

「そうだよ、って言いたいところけど、もう夜だしな。付いてってやるよ」

「お願いします」

壮太に頭を下げている自分に納得がいかなかったが、どこに行くかわからない犬を一人で追跡する勇気などない。

「今日は素直だね。よし、行ってみよう」

壮太はそう言うと、一歩前を出て私を手招きしてから歩き出した。置いていかれそうになった私は壮太のシャツを掴んだ。

壮太の背中越しに犬の様子を伺いながら、一步一步忍び足で近づく。一室分進むと、ダンボールに隠れていた犬の全身が見えた。柴犬だった。真っ白な柴犬を初めて見た。犬の体に触れられる距離になった時、動物好きの血が騒ぎ出し、私は頭を撫でようと手を伸ばした。すると、柴犬は私の横をすり抜けて、私達が今来た方向へと走り去った。

導き2

「あ、行っちゃった」

「焦って触ろうとするからだよ」

「別に焦ってなんか……」

「ほら、追い掛けるよ！」

壮太は私の腕を掴むと、柴犬の後を走り始めた。私は急に引っ張られた為、転びそうになりながら壮太に付いていった。

柴犬は部屋の前を通り過ぎ、階段を降り、外に出ていった。いつの間にか降り出した雨の中、道を外れ、木々の間をひたすら走っていく。でも、私達から距離が開きそうになると必ず立ち止まり、振り返ってこちらを見ている。意図して見失わせないようにしているようだった。

柴犬に連れられて辿り着いた場所に、古びた洋館があった。

「ここかあ……」

壮太がぼそっと呟いた。魔女でも住んでいそうな佇まいだ。

「あれ？ 犬は？」

気が付くと、柴犬の姿が消えていた。

「連れていきたい場所に着いたからいなくなったんだよ」

壮太はあっさりと答えた。いなくなるにしても、ぱたぱたと足音くらい聞こえても良さそうなものだ。洋館に気を取られている一瞬の隙に、見えなくなるほど遠くに行けるものだろうか。

「だって、今いたんだよ？ 瞬間移動したみたい」

私は半ば強引な意見を言った。

「そうかもね」

「普通の犬じゃないってこと？」

「さあ？ 俺にもわかんない。けど、ここぞという時にしか現れないから、普通じゃないかもね」

壮太は曖昧に答え、ドアのチャイムを鳴らした。何回もしつこく鳴らしている。

「なんでそんなに鳴らすの？ うるさいって思われたい？」

「瞑想してるとチャイムが聞こえないんだよ」

壮太は話しながらもチャイムから手を離さない。しばらく鳴らし続けた後、すっとドアが開いた。

「壮太！ 久しぶりね。元気だった？ びっしょり濡れちゃって、今日はどうしたの？」

ふくよかな体に、ひらひらとしたブラウンのシャーリングトップスカートを纏った中年の女性が出迎えた。彫りの深い顔立ちからすると、日本人ではなさそうだ。

「ちょっとね。アムリタはいつも元気そうだね」

「もちろんよ。あら？ 気が付かなかった。お友達と一緒にだったのね。早く入って！ 今、タオル持ってくるわ」

アムリタは、気後れして数歩下がっていた私を中に招き入れると、廊下の奥に消えていった。玄関で待っていると、真っ白なふかふかのコットンタオルを持って戻ってきた。私に差し出しながら、「これで拭いて。冷えちゃったでしょ？ 今、あったかい飲み物いれるから。ささ、どうぞ」と言った。

麩脂のトルコ絨毯が敷き詰められている廊下を歩いていくと、天窓のついた部屋に辿り着いた。天井から下がっているシャンデリアが天窓と重なり、夜空に舞う天使の様だった。

白い布張りのソファが二組、L字に置かれていて、私達はそこへ座るよう促された。

「私まで上がりこんじゃって良かったの？」

アムリタが席を外している間、私は壮太に訊ねた。

「あの犬の導きだから、絢那がアムリタに会わなくちゃいけなかった理由があるんだよ。ま、気楽に構えて」

知らない人の家に突然上がりこんで、気楽も何もないと思った。

「お待たせ。これ飲んでみて」

戻ってきたアムリタは、小さなカップに入った飲み物を差し出した。一口飲んでみると、想像もしなかった程の甘さが口に広がった。

導き3

「これ、チャイっていうの。インドの一般的な飲み物」

「ミルクティ……ですか？」

「そうよ。ただ、日本のミルクティとは少し違って、ミルクとお砂糖をたくさん入れるの。低品質の紅茶でほこりのように細かくなっているものだけを使うと美味しいチャイになるのよ。今日はシナモンも入れてみたんだけど、どうかしら」

「美味しいです」

飲み物としては甘過ぎるが、液状のお菓子を食べていると思えば嫌いではない味だった。

紅茶を啜っている間、しばらく静寂が訪れた。チャイのせいなのか、ソファーがあまりにもふかふかしているせいなのか、緩やかな時間が流れる中で、今までの疲れがすーっと抜けていくような感覚に陥った。そんな私に涼しげな眼差しを送っていたアムリタが静かに口を開いた。

「ちょっと見えちゃったこと、話していいかしら」

アムリタが何を言っているのかわからず、私は首を傾げてみせた。

「アムリタは霊視が出来るんだよ。情報がなくてもその人の状況が見えちゃうんだって」

壮太が補足した。霊視という言葉はよく耳にするが、実際にどんなものなのかまでは知らない。私は半信半疑で、「なんか、怖い気がするけど……」と、どっちつかずの返答をした。それをアムリタは了承の意味に捉えたらしく、「じゃあ、詳しく見るわね」と言った。

「えっと、まだお名前聞いてなかったわ」

「神崎絢那です」

「アヤナ、素敵な名前ね。あのね、玄関でアヤナを見た時からなんだけど、あなたの姿が二人見えるの。少しずれて重なっていて、一人は壮太も見えているアヤナで、一人はモノクロのアヤナ」

「モノクロ？」

「うん、モノクロのアヤナはとっても寂しげな顔をしてる。何かとっても悲しい事を経験したんじゃないかしら。あなたが二人になってから、徐々にその悲しみが強くなっていった感じがするわ」

「それは生まれつきですか？」

「ううん、つい最近。ここ数日じゃないかしら。悲しみに陥った速さも尋常じゃないわね。それまではごく普通に楽しく暮らしていたのに。人を信じられなくなることもあったんじゃないかしら。それも何か特別な力によって、そうさせられてしまったような感じがするわ。とても辛かったでしょう。よく耐えられたわ。タイミング良く救ってくれた人がいたのでしょうね」

「それ、俺だな」

壮太が口を挟んだ。アムリタは構わず話を続けた。

「アヤナはとっても純粋な人ね。今時珍しいくらい。だから、今回の事がなくても、出来事に対して敏感に察してしまって、疲れてしまうことが多かったんじゃない？ 嫌な事があっても、心が狭いせいだっけとすぐに自分を責めてしまうでしょ。人に辛いって言えないの。顔では笑っているけど、心が泣いているわ」

アムリタの霊視は当たっていると思えることばかりだった。でも、誰にも心を開くまいと誓った時の頑なな私と、この人なら今の私の全てを理解してもらえるかもしれないと期待する私が、アムリタの微笑みの前で葛藤している。それに気付いたのか、壮太が私を肘で突付いた。

導き4

「アムリタは信頼出来る人だよ。大丈夫、俺が保障する」

根拠のなさそうな壮太の言葉が一番信用できないと思い、彼を横目でちらりと睨んだ。でも、アムリタが私の心に寄り添ってくれたおかげで、胸に痞えていた塊がすーっと流れ出てきていることを確かに感じていた。

「話してみようかなって気になってきただろ」

壮太が私を煽る。

「無理に話そうとしなくていいのよ。ゆっくり、ゆっくり……。ねえ、お腹空いてない？ 何かお菓子持って来るわ」

そう言って立ち上がったアムリタを、私は「あの……」と、無意識に引き留めていた。

「ん？」

アムリタは再びソファーに腰を下ろした。

「私……人の心が読めるようになったんです。モノクロの映像で見えてくるの。その中のみんなはとても意地悪な顔をしていて、酷い言葉を浴びせてくるんです」

「可哀相に……。とても信頼していた人達ばかりですもんね。悲しかったわよね」

「とっても……辛かった……。みんな、味方だと思っていたのに……理解してくれてると思ってたから何でも話してたのに」

「そう。わかるわ」

「もう、誰も信じられない……」

「アヤナ」

羽のようにふんわりと包んでくれるアムリタの前で、私はいつの間にか泣きじゃくっていた。アムリタは私の隣に座り直し、私の肩を抱いて髪をそっと撫でた。

「うんと泣きなさい。涙は心を浄化するわ」

子どものように泣いている私に、壮太も「全部、吐き出しちまいな」と言って、私の頭をポンポンと軽く叩いた。

私が少しだけ落ち着いてからも、しばらく三人で静寂に身を委ねていた。その心地良さについて眠ってしまいそうになった時、アムリタが口を開いた。

「アヤナ、聞いてくれる？ アヤナは今、悪い事だけを闇の声に変換してしまっているの。人は良い心と悪い心を持っていることは理解できるわよね。人を尊敬したり、その人といると心地良いと思ったりするのと同時に、羨んだり、ひがんだり、嫉妬したりする気持ちを持ってたりするでしょ？ 私も持っていないなんて言ったら嘘になるわ。アヤナは特に仲良くなった人達に対して、その気持ちを強く持ってしまう傾向がなかったかしら。その人達と触れ合うごとに寂しさが溢れてきたりしたことない？ アヤナと同じ歳くらいの女の子が見えるんだけど、彼女に心当たりないかしら？」

アムリタに言われ、私は真っ先に香里の事を思い出した。

「います……」

私は二年前、東京の高校に通うために親元を離れて上京した。そして香里に出会った。引っ込み思案でなかなかクラスに溶け込めなかった私に、声を掛けて仲間に引っ張り込んでくれたのが香里だった。でも、クラスでもリーダー格で、細かい事には拘らず天真爛漫、男女の隔たりなく友達の多い香里を、憧れると同時に妬ましく思っていたことは否めない。香里が活躍して脚光を浴びる度、心から喜べない自分がいたことを、これまでさんざん否定しながら胸の奥にしまい込んでいた。

「いつも一緒にいてとても仲良しなのに、彼女に嫉妬することが多かったんじゃないかな？」

「そうです……。羨ましいと思ったり、自分は香里にみたいになれないって思って落ち込んだり、感情のコントロールが出来ない事がよくありました」

「そうなる自分を嫌で嫌で仕方がなかったでしょ」

「はい」

「あと、もう一人、やっぱり同年代の男の子が見えるんだけど……。とってもアヤナに近い存在……。アヤナには彼氏がいる？」

「はい……。あ、いえ、いました」

私はまた、過去形で答えた。

「とても大好きで、一番頼りにしてて、心の支えで、一緒にいると安らげてっていう存在よね。ああ、でも……。気を悪くしないでね。アヤナはとっても女の子らしいから、彼の悪気のない言動でも傷ついちゃったりしてたわね。自分が彼を求めた時にそれが叶わなかったり、彼が他の女の子と一緒にいるのが耐えられなかったでしょ」

凶星だった。付き合いだての頃、魁はいつも私の心のそばにいた。それがくすぐったくて、嬉しくて、いつしか当たり前になっていた。そして、一緒にいればいるほど相手の行動もよく見えてきて、香里と同様、異性の友達の多い魁が女の子とからむ度、私は感情の赴くままに嫉妬心を露にした。最初のうちは、私が魁を責めても安心するような言葉で包み込んでくれていたが、付き合いが長くなるにつれ、魁はうじうじと不満を漏らす私を非難し、私よりも他の事を優先することが多くなった。

魁が、だんだん離れていく……。

私の心は絶えず不安が支配していた。彼を取り囲む女の子は、皆快活でいろんな特技を持っていた。彼と趣味が同じ一緒だったりする女の子も大勢いて、その子達と話をする時の彼は、とても楽しそうに声を弾ませていた。私は彼の趣味の話を知っているのがただ嬉しかったのだが、内容を掘り下げて会話するまでには至らなかった。私も彼と同じ位置に立ちたくて、本を読み漁ったり、テレビを見て話題についていこうとしたが、一夜漬けなど大した効果を発揮しない。他の

女の子達のように魁を惹き込ませることなど到底出来なかった。

私は徐々に自信を失っていった。それまで彼が見守ってくれているという安心感で充実していた心は乱れ、頭の中はいつも彼でいっぱいになり、他の事に対する意欲が半減していった。何かを楽しむというより、気持ちを紛れさせる為だけに物事に取り組んでいた。こんなことじゃいけないと自分を戒める自分といつも闘っていた。そして、自分らしさというものを無くしていった。

「彼の心がどこにあるのか不安で仕方がなかったのに、それを表に出せなくなったのよね？ 彼に嫌われまいと無理に笑っていることが多くなかったかしら」

「確かにそういうこともあったけど、一緒にいる時は私を見ててくれるのがわかるから心から笑えたんです」

「でも、一番わかってほしいことを言えなかったから、心の繋がりまで感じる事は出来なかったんじゃない？」

「心の繋がり……？」

「本当の自分をお互いに理解し合えてこそ、心の繋がりを持てるというものでしょう。相手に合わせて波風を立たせないようにしているだけじゃ、表面的な付き合いにしかならないわ。アヤナは自分の不安を彼が理解するように伝えることが出来なかったから、彼に拒絶されて、ネガティブなことを想像して、彼を信じ切ることができなくなったのではないかしら？ 最初に見えた女の子の事もそう。自分にない魅力を持つ彼女を疎ましく思う気持ち、いいエネルギーに変えられれば良かったのだけど、押さえ込んでいるうちにどうしようもなくなってしまったのよね」

「そう……かもしれません。でも、魁の事、信じてなかったわけじゃ……」

「うん、ごめんね、語弊があったわ。信じてたけど、自分に自信がなかったから不安だけが膨らんでいったのよね」

「はい……」

「それが、能力の芽生えと同時に表に出てきちゃったの。今まで出さないようにしてきた感情のエネルギーがとてつもなく強いものになってるから、人の心の中を見た時にそればかりが強調されてしまったのね。たぶん、本当は人の綺麗な心も見えるはずよ。でも見えないのは……高校に入る以前に心に深い傷を負ってるからだわ」

アムリタは、私の奥に潜むものをもう一つ見つけたようだった。

高校以前の深い傷、甘えたい時に甘えられなかった哀しみ……。

それが何なのか、思い当たる節が全くなかった。東京に出てくる前までの私は、何の悩みもなく生きてきたつもりだ。

「うーん、なんだろう。その部分がブロックされててよく見えないんだけど、甘えたい時に甘えられなかった哀しみをずっと抱えてたんじゃないかしら」

「中学までは楽しかったんですけど……」

「そう、それならいいわ。私にも見えないってことは、無理に思い出す必要がないってことだから」

アムリタはそれ以上昔の話をするのを避けた。

「とにかく、今のアヤナは人を信じられなくなった哀しみでいっぱいだから、まずはそれを取り除いていきましょう。深く考え込まないで済むように、これから出逢うこと……少しドキドキするくらい意識を向けられるものに触れて、哀しみに集中していた意識を分散させるといいわ。いろんなことを知るといいかもしれない。様々な状況にいる人達のことを見るとかね」

私はここへ来る前、聡と話をしていた時の事を思い出した。複雑な心のひだに触れ、自分が心を閉じようとしていたことなど忘れて、感じた事を聡にぶつけていた。これまで自分を押さえつけ、言いたい事を言えなかった自分にはなかったことだ。

「無理に心を開こうとしなくていいからね。テレビとか映画とかでもいいから、自分の知らない世界に目を向けることに集中してみて。そうしていると、悲しい気持ちを忘れていられる時間が増えるから、だんだん余裕が出てきて楽になるわよ。そうなるとアヤナから良い波動が出始めて、状況が変わってくるから」

アムリタの言葉を、聡との会話に照らし合わせる事で理解した私は、「はい」と小声で返事をした。

結ばれぬ恋1

アムリタの家から帰宅後、ベッドに入ったものの、うとうとしては目覚め、また浅い眠りにつくという繰り返しで朝を迎えた。

私はアムリタに言われた事を思い返していた。

悪い事だけを闇の声に変換してしまっているのは、本当の自分を押し殺しているから。今、疲れ切っている。だから、まずは哀しみを取り除いていきましょう。知らない世界を見る事に意識を集中しなさい……。

一人でいるとすぐに嫌な事で頭がいっぱいになってしまう状態は、この数ヶ月で完全に自分の癖になっていた。それを治すことなど出来るのか、私には自信がなかった。

心の傷は浅くない……。

アムリタの家で思い切り泣いてすっきりしたはずなのに、私は再び気分を暗く沈ませていた。心が体ごと重い。やらなければならないことが山積みなのに、何もする気になれない。

私は毛布を頭から被って、猫のように丸まった。自分を自分で抱きかかえるからだろうか、それとも、心に刺さる冷たい空気や寂しさにさらされる面積を少しでも減らせるからだろうか、この姿勢になるとなぜか安心出来た。また少し浅い眠りに付きかけると、上段にいた泉水が声を掛けてきた。

「絢那ちゃん、ちょっといいかな」

「あ、はい」

泉水が上にいるのは知っていた。泉水とは入居した日に挨拶して以来すれ違いばかりで、まともにした事がなかった。まさか呼ばれるとは思っていなかったので、意表をつかれながらカーテンを開けて顔を出すと、泉水がはしごを伝って上から下りてきた。

「お願いがあるんだけど……」

生成りのフレアースカートにふわっとしたサマーセーターを着た泉水が、爽やかな装いとは裏腹に何か切羽詰った様子で話を切り出した。

「どうかしたんですか？」

「あのね、付いてきて欲しいところがあるんだ」

「え？ どこへですか？」

「電車で一時間ちょっとのところなんだけど」

「電車？ ああ……ごめんなさい、私、交通費というか、今日食べる分のお金もないんです……」

「もちろん、払うよ。付いて来てくれたら日当も払う。一万円」

「そんなに？」

「うん、私、電車に一人で乗るのが怖いんだ。だけど、どうしても会いたい人がいるの。お願い出来ないかな」

「人と会うのに私が一緒に行っちゃっていいんですか？」

「うん。少し話をするだけだから、その間だけ待っててもらう事になっちゃうけど……」

電車が怖い事や、私よりも七、八歳年が上のいい大人が、人と会うのに付き添いを必要とする理由がよくわからなかった。だが、真剣に頼み込む泉水を拒否することも出来ず、私は彼女の願いを聞き入れた。

結ばれぬ恋2

「何時頃、出発しますか？」

「出来たら今すぐに」

「わかりました。支度しますからちょっと待っててください」

「ありがとうございます。恩に着ます」

泉水は私に向かって深々と頭を下げた。なんだか大袈裟な気がしたが、深い訳があるようにも見える。私はカーテンを閉めて服に着替え、ベッドから降りた。

ダイニングに行くと、泉水は心細げに背中を丸め、ソファーに座っていた。

「行きましょうか」

私が泉水の前に廻って顔を覗き込みながら声を掛けると、泉水は少しだけ口角を上げて微笑んだ。

「うん、じゃあ、これ。先に渡しておくね」

泉水は立ち上がりながら、封筒に入れた一万円札を差し出した。

「後でいいですよ」

働いてもいないのに、先に受け取ることなど出来ない。

「ううん、後でだと気が動転して忘れちゃうかもしれないから」

泉水は私の手を取り、封筒を握らせた。泉水の手は、氷水に数時間さらしていたのではないかと思うくらいひんやりとしていた。その冷たさに驚いて顔を見ると、窓から差し込む光が、血の気のない頬を浮かび上がらせた。

「泉水さん、大丈夫ですか？ 顔色悪いですよ」

「え、そう？ 大丈夫、たぶん」

泉水はまた、弱々しく笑った。

駅につくと、泉水は私を改札で待たせて切符を購入しに行った。私は泉水の後姿をずっと目で追っていた。足元がおぼつかない。販売機にお金を入れるのでさえ力が入らないのか、小銭を下に落としている。

私は見ていられず、泉水のそばに行こうとした。その時、電車から降りてきた乗客が改札から大勢出てきた。時間に追われた人達が、私と泉との間に流れの速い川を作る。それに遮られ、押し戻されそうになりながら泉水の元に辿り着くと、彼女の買った切符が販売機から出てくるところだった。

「お待たせ」

今にも消え入りそうな声を出しながら、泉水は私に切符を手渡した。

「本当に大丈夫ですか？ 休んでからの方が良くないですか？」

泉水は今にも倒れそうだった。

「休んだら、きっと行けなくなっちゃうから」

「今の時間、きっと座れないですよ？ 一時間立ちっぱなしに耐えられますか？」

「わからない……でも、今日は行こうって決心したの」

「今日じゃないといけないんですか？」

「いけなくはないけど、いつにしても同じなんだ。だからあなたに付いてきて欲しいの。一人で行って帰ってくる自信ないから。迷惑掛けちゃうと思うけど……」

「そうですか……」

やはり不可解なまま、先に歩き出した泉水の後を追って改札を抜けた。

ホームへの階段を上ると、ちょうど急行が来た。これなら目的の駅まで三十分でいけるはずだ。開いたドアに向かって私が一步踏み出すと、泉水が後ろから私の腕を掴んだ。

「ごめん、各駅でいいかな」

驚いて泉水の方に振り返ると、彼女は「急行はダメ……」と、小さく首を横に振った。

結ばれぬ恋3

「急行の方が電車に乗ってる時間、短くて済みますよ？」

「うん。でも、各駅に乗りたいの」

思い詰めた表情の泉水は、とても悲しげな目をしている。

「わかりました。各駅の方が空いてるかもしれないですよ」

「ごめんね……」

私達は脇に寄り、急行を見送った。

七分後、次に来た各駅に乗り込んだ。確かに空いている。しかし、座れるだろうという憶測は外れ、乗り込んだ車両の席は全て、学生や少数のサラリーマン、お年寄り達で埋められていた。

「座れないみたいですけど……」

「うん。でも、いいの」

そう言うと、泉水はドア近くの手すりにもたれかかった。

急行なら四つの駅に止まるだけだが、各駅だと二十もの駅に停車する。一、二分置きに止まるため速度も上がらない。泉水は自身の存在を隠すように口を閉ざしている。私はただ、窓の外ゆっくりと流れる景色を見つめていた。

三つ目の駅を過ぎた頃、隣でがざがざと音がした。ふと見ると、泉水がカバンからビニール袋を出していた。

「どうかしました？」

私がそう訊くと、泉水は顔を引きつらせながら呟いた。

「ちょっと、お守り」

「気持ちが悪いんですか？」

エチケット袋だった。

「まだ大丈夫」

「具合悪くなったらすぐに降りましょうね。言ってくださいよ」

「ありがとう」

すぐにでも下車した方がいいような様子だったが、とりあえず彼女の判断に任せることにした。

泉水を座らせたくて、私は駅に近づく度に乗客の動きを見た。しかし、降りていくのは元々立っていた人ばかりで、座席は一向に空く気配を見せない。泉水は苦しそうに肩で息をしている。気が気ではなかった。

出発から三十分が経過し、停車した駅でかなりの人が乗り込んできた。ドアが閉まり、それまでにはなかった圧迫感が泉水を襲った。

「泉水さん、大丈夫ですか！」

私の問いに答える余裕など泉水にはない。泉水は目を大きく見開き、額にはうっすらと汗を滲ませながら荒い呼吸を繰り返している。唇は完全に色を失っていた。

泉水は意識を失い、崩れるようにして床に倒れた。

結ばれぬ恋4

「泉水さん！」

呼び掛けにも反応がない。泉水を取り囲むように人垣ができ、一斉にざわめき始めた。

どうしよう……。

私は一瞬パニックに陥った。が、同じような場面に遭遇したことを思い出した。

遠足の山登りの最中に友達が倒れ、先生が応急処置をほどこしている場面だった。その友達は貧血だった。泉水の唇が青く、顔から血の気が引いている様は友達とよく似た症状だった。

「泉水さん、カバン借りるね」

自分のカバンを持っていなかった私は、泉水の腕からカバンを外し、彼女の両足の下にそれを敷いた。足を心臓より高くするためだ。それから、泉水が握り締めていたビニール袋を口元に添えた。貧血を起こした友達は倒れると同時に嘔吐していた。

何度か名前を呼ぶうちに、目を閉じたまま泉水は小さく頷くようになった。

「横になってれば楽になってきますからね。まだもう少し、このままでいきましょう」

泉水が安心するように、私は声を掛け続けた。あと少しで次の駅という時、泉水の顔に少し赤みが戻ってきた。そして、薄目を開けた。

「起きられますか？ 少しずつ頭上げてみてください」

私の問い掛けに、泉水はゆっくりと頭を動かし始めた。

「まず、座ってみましょうか」

泉水は数回ゆっくりと呼吸すると、徐々に上体を起し、床に座った。

「そのままゆっくりと深呼吸してくださいね。次の駅で立てそうだったら降りましょう。無理しなくていいですからね」

私は泉水の背中にそっと手を添えながら言った。

電車はまもなく次の駅に着こうとしていた。私は泉水の荷物を抱え、降りる準備を始めた。すると、泉水が力の入らない手で私の体に触れた。

「あと少し……だよな？ このまま座ってれば最後まで行けそうだから乗っていたい」

「え？ 大丈夫なんですか？」

「降りてからまた乗ったら、同じこと繰り返しそうな気がするの。だから……」

「大丈夫ならいいんですけど……」

私の方が不安を覚えた。が、泉水はおそらく何度もこのような状態を経験してきたのだろう。きっと、先の事まで予測出来ているのだ。私は泉水の言う事に従い、そのまま乗っている事にした。

席を譲ろうとしてくれる人が何人もいたが、泉水はすぐに横になれる床に座っている方がいいと、礼を言いながら断った。私も普段なら床に座ることに抵抗を感じそうだが、この事態ではどうでもいい事のように思っていた。

「泉水さん、顔色戻ってきたね」

「うん、楽になった。ありがとう」

話せるようになったものの、不安そうな表情に変りはなかった。

目的の駅に着いた。ドアが開く。私達が降りようとしていたのを見ていた大柄の男性が、ホームに降りて両手を頭の上で大きく左右に振った。駅員に合図を送り、病人が降りるからドアを閉めるのを少し待ってくれるよう頼んでくれたのだ。

「立てますか？」

「うん」

「ゆっくりでいいですからね」

私は泉水の体を支え、彼女のペースに合わせて立ち上がった。駅員にコンタクトしてくれた男性が車内に戻ってきて、一緒に泉水の体を支えてくれた。ホームに降り立ち、二人でお礼を言いながら、再び電車に乗った男性を見送った。そして、目の前にあるベンチに座った。

「ごめんね、ありがとうね。絢那ちゃんがいてくれて助かった」

「もう大丈夫ですか？」

「うん、落ち着いた」

泉水の顔色は家を出る前と違い、うっすらとピンクを混ぜた綺麗な肌色になっていた。

「私ね、パニック障害なんだ」

泉水がぼつりと呟いた。

「前に一度、一人で電車に乗ってる時に気分が悪くなったことがあったの。次の駅までなんとか我慢したんだけど、ホームに降りた途端に吐いちゃった。それ以来、電車に乗るとまたそういう事になるんじゃないかと思って具合が悪くなっちゃうのよ」

「そうだったんですか。辛いですね、どこにも出掛けられないじゃないですか」

「車ならなんとか大丈夫。だから、出掛けられない事はないんだ」

「泉水さん、車持ってましたっけ？」

「持ってない。人の車の助手席。今日はその運転席に座ってる人に会いに来たの」

「彼氏ですか？」

「うん」

「じゃあ、なおさら私が付いていったらまずいじゃないですか！」

私はつい、素っ頓狂な声を出してしまった。

「ん、いいの」

「いいのって……」

「喫茶店で待ち合わせしてるからそこへ行きましょう」

「ホントにいいんですか？」

「うん。まだ、待ち合わせの時間に少し早いし、来てくれるかどうかわからないから」

「確実に会えるわけじゃないんですか？」

「ちょっとあったからね……」

彼氏なのに会えるかわからなくて、いつも車に乗せてもらうのに、今日はこんなに辛い思いをしてまで電車で来なければならなかった。そんな事情だとすると、話の内容は限られてくるのではないかと、私はますます気後れがした。

駅の構内から出て歩道をしばらく歩くと、泉水は一階がブティックになっているビルの前で立ち止まった。ブティックの横には、『喫茶オレンジハート』と書かれた看板と狭い出入り口があった。

「ここの二階なんだ」

出入り口に足を踏み入るとすぐに上階への階段があった。薄暗くて喫茶店への通路とは思えない。だが、泉水は慣れた足取りで躊躇なく上っていった。

結ばれぬ恋6

自動ドアを開けて店内に入り、私達は窓側の席についた。先ほど乗ってきた電車の線路がここから見えた。

「アイスコーヒー頼んでもらっていいかな。絢那ちゃん、お腹空いてたら好きなもの頼んでいいよ。私、ちょっと連絡してくる」

泉水は足早に店の外に出て行った。入れ替わりにウエイトレスが来たので、私はアイスコーヒーを二つ頼んだ。泉水に甘えて他にも注文しようかとメニューを見たが、空腹なのに食欲が湧かない。電車での一騒動から開放されて疲れが出たのと、泉水の身に起きることを案じて新たな不安が生じたからだ。

アイスコーヒーを運んできたウエイトレスと一緒に泉水が戻ってきた。

「五分くらいしたら来るって」

「彼、来てくれるんですね」

「うん。ちょっと強引に約束しちゃったから心配だったけど」

「よかったですね」

「とりあえずはね」

「私はどうしてたらいいですか？」

「店の前で待ってるって言うてあるから、ここにいてもらっていいかな。戻ってきても別の席に座るから」

「わかりました」

「すぐ終わるから。でも、もし時間が掛かったらごめんね。大丈夫？」

「ええ、私は特に用事ないですから」

バイト探しをしなければという焦りはあったが、帰りも電車に乗るのに、あんな状態になる泉

水を置いて帰る事の方が気掛かりだ。

「じゃあ、行ってくるね。ホントにごめんね、巻き込んだじゃって」

泉水は私に何度も頭を下げる。

「気にしないでください。頑張って」

私の応援に、泉水は小さく頷いた。

アイスコーヒーをストローで少しずつ口に含みながら、私は窓の外をぼんやりと眺めていた。駅のホームに沿って看板が立ち並び、入ってくる電車がその隙間から見える。プレートに記された行き先は本八幡だ。

本八幡ってどこだっけ？

私は携帯を取り出して検索画面を開いた。文字を打ち込む。検索。出てきたリンク先をスクロールしていくと、ページの途中に居酒屋の住所が出てきた。

千葉県市川市八幡。

あのまま乗ってたら千葉まで行けたんだ……。

市川が千葉のどの辺りにあるのか知らない私は、波の高い外房の海を思い浮かべていた。

私は海が好きだった。友達と行くのは江ノ島の海ばかりだったが、何かとすぐに海を見に出掛けていた。ジュースとお菓子と敷物を持って、サーファーを眺めながらお喋りしているだけで楽しかった。

友達とはもう行けないが、一人でも電車を乗り継いで千葉の海に行きたいと思った。

その為にも早くバイトを探さないといけない。お金を溜めて、いろんなところを旅しよう。一人でも楽しみを見つけて生きていける。大丈夫……。

まだ、心の支えなしに一人でいることに慣れていない私だったが、精一杯背伸びしたことを考えてみた。すると、私の心に丸くて温かな炎がポツと灯った。魁とのデートの前日には必ず灯って

いた、力の湧いてくる炎だ。だが今日の炎はまだ、風に揺られるとすぐに消えてしまいそうな、小さくて弱々しいものだった。

一杯目を早々に空にして、お代わりしたアイスコーヒーも飲み干すと泉水が帰ってきた。

「お待たせ。ごめんね、話が長くなっちゃった」

そう言って泉水は最初に座っていた席に着き、注文して飲まずにいたアイスコーヒーにストローを刺した。彼女のアイスコーヒーは氷がすべて溶け、コップについた水滴さえもすっかり乾いていた。

「何か、食べた？」

唇の渴きだけ潤すと、泉水が私に訊いた。

「いえ」

「あら、遠慮したの？ 何か頼もう。私、お腹空いちやった」

泉水は心なしか晴れ晴れとした表情をしている。

「何にしようか.....私、ナポリタンがいいな。絢那ちゃんは？」

「じゃあ、私も同じ物を」

「何でもいいんだよ？」

「私も好きですから、ナポリタン」

「そっか。わかった。あ、すみません」

泉水はそばを通り掛ったウェイターを呼び止めた。ここへ来るまでとは違い、泉水は先へ先へと私をリードする。これが本来の泉水なのだろうか。私は戸惑いながら目を閉じた。モノクロの彼女はやはり暗い影を漂わせながら黙っている。ただ、最初に見た時よりも少しだけ、安堵の笑みを浮かべているようにも感じられた。

「どうでしたか？」

私は気になっていた事を泉水に訊いた。

「ん？ うん、お互いの気持ち、確認してきた」

泉水は少し照れくさそうに答えた。私は「それならよかった」と一言だけ告げ、詳細を訊ねる事を避けた。すると、泉水の方から話の続きを語り始めた。

「ここんところずっと彼と連絡が取れなくなっちゃってて、その理由を聞いてきたんだ。今まで私

、自分の事しか考えられなくて、気付かないうちに彼のこと苦しませてみたい。でも、彼、許してくれた」

「そうですか……」

「でね、一緒にいられないことには変らないけど、私は彼以外、好きになれる人がいないって確信したの。彼、家庭もあるし、交友関係が広くて忙しい人だから連絡もあまり取れないけど...
...会った時は私の事、本当に大切にしてくれるの。それだけでいいって思った」

「え？ 彼氏って既婚者なんですか？」

「うん、言ってなかったっけ？ 前に勤めてたところの上司なの」

「知らなかった……だけど泉水さん、それじゃいつまで経っても幸せになれないじゃないですか」

「そうかな」

「だって、このまま付き合いを続けてたって結婚できないってことですよ？」

「そうなんだけど」

「知りたくないこと知って傷つくことだってあるだろうし、制約はあるし……辛くないですか？」

「辛い事の方が多いかも……」

「じゃあ、どうして？」

誰からも祝福されない恋をしている泉水の気持ちを、私は想像することさえ出来なかった。

「幸せの形っていろいろあると思うんだ。結婚したからって幸せだとは限らない」

「でも、好きな人とは一緒に暮らしたくないですか？」

「うーん……暮らしたくないって言ったら嘘になるけど……彼みたいな人、どこを探してもいないのよ。自分さえ良ければって思う人が多い中、情に厚くて、困ってる人がいると多少の犠牲は厭わなくて……かと言って何でもかんでも受け入れるんじゃないで、冷静に物事を筋道立てて考えて、自分で納得した上で行動してる。だから、彼を慕っている人がたくさんいて、彼と話をしている時の顔はみんな生き生きしてるの。でも、それに甘んじてなくて、常に向上心を持ってる。これでいいのかって悩みながらね。そんな彼を人間として尊敬してるの。これほどまでに想える人と出逢えただけで私は幸せなんだ」

「独身同士ならそうだけど……」

「神様がね、寂しがり屋の私を強くする為に彼と逢わせたのよ。いつも何かに依存してなきゃいられなかった私に、一人の時間を充実させられる人間になれって仕向けたの。そうとしか思えない」

「強く……なれたんですか？」

「まだ寂しくて泣いちゃう日の方が多いかもしれない。なかなか会えないからね」

「寂しい思いをさせない人を見つければいいのに」

「そう思った時もあったよ。いつも一緒にいてくれる人を見つけようとしたこともあった。でも、彼じゃないとダメなの。何か違うの。私がこうしたいってことをその通りに察してくれるのは彼しかいないの。そばにいてくれれば誰でもいいんじゃないのよ」

「彼は泉水さんの寂しさをわかってはくれてないじゃないですか。連絡があまりないっていう事実からしても」

「それは忙しいんだから仕方がないわよ。他の人だって、付き合いが長くなれば同じことじゃないかしら。まめにかまってくれるのなんて最初だけ」

「それは信頼で結びつくからですよ」

「そうよ。私は彼のこと信じてる」

「彼は？」

「私の事、信じてくれてるわ」

「でも、奥さんと別れてあなたと一緒にならないってことは、泉水さんの気持ちに答えようとしてないってことじゃないんですか？ 大事に思っていないから、今みたいな状況が続けてるんじゃないですか？」

「彼は責任感の強い人なの。結婚して相手を養うって一度決めたから、それを最後まで貫き通すって……」

「泉水さんのことは？ 独身で未来のある泉水さんと付き合い続けてるってことは、泉水さんに対しての責任を考えてないからってことにならないですか？」

「だから……私がもっとそばにいたいって我が侘を言った時、彼は離れていこうとしたのよ。俺はおまえに何もしてやれないって。泉水が期待には答えられないって」

「そんな……」

「私が彼といることを選んだの。彼の責任じゃない。私が自分の幸せは何か考えた時、彼と一緒にいる時間を少しでも持てることが幸せだと思ったの。彼の事を好きでいることが幸せなの。彼の気持ちじゃないの。自分の気持ちを一番に考えたの」

何か間違っている。私は激しい感情に揺さぶられていた。

「でも泉水さん、奥さんと逆の立場だったら嫌じゃないですか？ 影で彼女作ってたら悲しくないですか？」

私がそう言った途端、それまで穏やかだった泉水が私をきつく睨みつけた。

「奥さんの立場の方がいいに決まってるわ！ 彼は毎日、彼女の元に帰ってくるのよ。毎日、彼に守られてるの。世間でも認められてる立場にいるの。堂々と彼の妻だって言えるのよ。それ以上に何を求めるのよ。一緒に暮らしてれば彼を黙って支える事が出来る。料理を作ったり、洗濯したり、体調が悪い時には看病だって出来る。彼が疲れて帰ってきたら、眠りに着くまでマッサージしてあげられる。愚痴を聞いてあげる事も出来る。私にはそれが出来ないの。メールでいくら言葉を交わしたって彼の力になれない。それどころか、忙しい合間にメールをさせるってことは逆に疲れさせることになるの。だから、よほどのことがない限り連絡するのを我慢してるのよ。それにね、知り合いの前で私は彼に知らん顔されるの。二人でいる時はとても優しい彼に無視されるの。他人の振りをされるのよ。挨拶も交わさずに帰っていく後姿を見送る辛さ、あなたにわかる？」

泉水の鋭い目に涙が潤んでいた。ほんの少しの幸せと引き換えに、数倍もの辛さに耐えている。

「わからないです、泉水さん。その辛さは私にはわかってあげられない。でも、好きな気持ちを貫き通すのはありかもしれないですね」

私は、やはり何かが違うと感じながらも、泉水の一途な気持ちを否定するのはやめようと思った。

「好きで好きで……どうしようもないのよ……」

「人を好きになるって理屈じゃないですもんね」

「私といる時は私の事だけを想ってくれてるって信じたいの……」

「そっか……」

「うん……ごめんね……絢那ちゃんに八つ当たりしちゃった」

「いいですよ、大丈夫」

「辛いなんて言っちゃいけないんだよね。そんなのわかりきった事なんだから」

「泉水さん……」

「ごめん……ごめんね……」

泉水はすべてをわかっている。それでも彼への想いを断ち切る事が出来ないのだ。決して結ばれることのない恋。それでも彼女は自分の運命を受け入れようとしていた。

頬を伝う涙を何度か拭った後、泉水はまた、明るい表情に戻った。

「彼と関われる時間をうんと幸せにするために、いつも穏やかでいなきやって思ってるんだ。境遇を嘆いていても何にも楽しいことないから。彼と接する時はメールでも何でも明るく振舞うようにしてるの」

「本音は言わないんですか？」

「本音、言ってるよ？ でも、彼が困るだろうなってことは言わない」

「前向きですね」

「人間、いつ死ぬかわからないでしょ？ 私もそうだし、彼だっていついなくなっちゃうかわからない。もし、我が侂言って気まずくなってる時に二度と会えなくなったら、後悔しても仕切れないしね」

「泉水さん、強い……」

私は自分と置き換えて考えた。魁が自分との時間をあまり作ってくれなくなったというだけで不満ばかりが膨れ上がり、彼だけの世界で楽しそうにしているのを心のどこかで妬んでいた。そんなことでは、魁の事を本当に好きだなんて言えないのではないか。ただそばにいてくれる人を求めていたのではないか。だから魁は私に愛想をつかし、離れていったのではないか……。

「私ね」

魁との事に思いをはせていた私は、泉水の声に我に返った。

「好きな人と笑ったり、泣いたり、喜んだり、悩んだりっていう毎日と一緒に過ごす事が出来ないでしょ。でももしかしたら、何か奇跡が起きて、周りの人に祝福される日々がくるかもしれないじゃない。その日の為に、彼の全てを受け入れて、彼の全てを包み込める女になりたいの。私がいないとダメくらい、必要とされる女になりたいの」

「そう……なんだ」

「今はまだそうじゃないから、神様は私達を一緒にしないのよ。心が狭すぎて彼の行動を不安に思っただけの女だから、私は彼と結ばれないの。でんと構えて、何事にも動じない女になるように、神様が認めてくれるまで……神様がしっかりした赤い糸で結んでくれるまで自分を成長

させなきゃいけないのよ」

「泉水さんの夢……だね」

「うーん、なんだろう。そうなのかな……」

夢という言葉は儂さを伴うからだろうか、それを耳にした泉水は寂しそうに笑った。そして、

「全力を出して叶えようとしちゃいけない夢って、切ないよ」

と、呟いた。

少しの沈黙の後、ウェイターがナポリタンを運んできた。

「さて、食べよう。そうだ。私が電車で来たって言ったら彼、すごくびっくりして、帰りはタクシーに乗っていきなってお金くれたの。もう、絢那ちゃんに迷惑かけなくて済むよ」

泉水はそう言って、今度は嬉しそうに笑った。彼の優しさに浸っている女の顔だった。

余命1

電車賃を節約する為、隣の駅まで歩いてバイトを探しに行った。

隣の町はここ五年くらいの間を開発が進み、次々とデパートや大きなビルが建てられた活気のある街だ。その賑やかさが今の私には逆に暗鬱な気分させられるものがあったが、これだけたくさんのお店があるのだから、自分に合う地味な職種が見つかるだろうと安易に考えていた。

実際、私に合っていそうな求人がいくつかあった。だが、そこで働いている人を前にして目を閉じないように心掛けていても、必要以上に愛想のいい人ほど信じられなくて反射的に能力を使う癖が抜けなかった。そして、面接にこぎつける前にそこで働く意欲を失う、ということを繰り返した。

人の悪い面ばかりを闇の声に変換してしまう状況は相変わらずだ。闇の姿を見せない壮太や、暗い影を漂わせているものの裏表のない泉水や聡と過ごす毎日の中で、マイナスの感情に苛まされることが減ってきているはずなのに、ふとした隙に悲しい出来事が頭を過ぎる。胸を掻き毟られ、猜疑心でいっぱいになってしまう。哀しみはまだ、癒えないままだった。

朝の九時から六時間、飲まず食わずで歩き続け、成果のないままマンションに戻ってきた。

玄関を開けると、壮太が流しで筆を洗っていた。コーヒーテーブルには絵の具のチューブや筆や何枚もの白い紙が広げられている。その紙の一枚一枚に水をたくさん含んだ淡い色の動物達が描かれていた。

「ただいま。何描いてたの？ それ、水墨画？」

「おかえりー。惜しい、墨彩画っていうんだよ。色が着いてるだろ？」

私は墨彩画という言葉初めて聞いた。乾いているか確かめる為に絵に顔を近づけ、ふーっと息を吹きかけてから一枚手に取った。

「あれ？ これ、ハガキだ。和紙とかに描くんじゃないんだね」

「人に送るからね」

「誰に？ こんなにたくさん」

「病院にいる子ども達」

「病院？」

「俺が入院してた時に知り合った子ども達」

「壮太、どっか悪かったの？」

「うん、今も通院してる」

「今も……って、壮太、病気なの？ 元気そうに見えるけど」

「俺、あまり長く生きられないらしいよ」

ちょっとした苦手な事が出来ないといったような、軽いニュアンスだった。

「え？」

「今のところ治療方法のない病。結婚する予定もないし、相手がいらないから出来ないんだけど、自分の子どもをたぶん持てないだろ。だから、知り合った子ども達に俺の特技を生かさせてもらってる」

涼しげな顔でさらりととんでもない事を言いながら、壮太は洗い終えた筆を布巾で拭いた。

余命2

「ちょっと待ってよ。子ども達の事より、自分の事は？」

「治らないって言われてるんだから仕方ないじゃん」

「そんな簡単に言わないでよ……」

「いいんだよ。それに今はなんともないし」

「何ともない時期に何とかすれば何とかなるんじゃないの？」

私は興奮気味に言った。

「まあまあ、気にしないで。俺は病院の先生を信頼してるし、無茶はしてないつもりだから」

「でも……」

私が口籠ると、壮太は話題を戻した。

「子ども達とこうして文通してるんだけど、描き方を教えに行ったのが知り合ったきっかけなんだ。友達が看護師やってて、声かけられてさ。子どもの扱いなんてわからないから一度は断ったんだけど、今はもう病みつき。子ども達いい顔するんだよ。すごく喜んでくれる。それ見ると、俺も心底嬉しくなるんだ」

私は言葉を失った。自分の死に直面しながら、どうしてこんなに明るくしていられるのか不思議でならなかった。

「あ、もう約束の時間だ。今から病院に行くんだけど、一緒にいく？」

壁時計を見上げ、壮太は綺麗になった道具をガチャガチャと無造作に箱にしまった。動揺が治まらない私はその場に立ち竦んでいた。

「どうする？ 子ども達、可愛いぞ」

何も答えないでいたら、壮太に急かされた。半ば、来いよと強制されている気がしないでもない。

「邪魔にならない？」

「ぜんぜん」

「行っていいの？」

「もちろん。よし、決まり」

壮太は画材一式を手にとって、ズボンの後ろポケットから車の鍵を取り出した。

壮太の車はマンション脇の駐車場にあった。白のワゴンRだ。壮太が画材を載せる為に後部座席のドアを開けると、席を半分占領した透明ボックスが置いてあった。洗面器やくるくると巻かれた薄手のマットなどが入っているのが透けて見える。私はなぜこんなものを載せているのか、助手席に乗り込んでから壮太に聞いた。

「急に旅に出掛けたくなるから、車内で寝られるようにお泊りセットを用意してあるんだよ。寝袋とかタオルとか歯ブラシとか下着も入ってる」

私の質問に答えながら壮太は車を発進させ、ゆっくりと駐車場を出た。

余命3

「軽なのに、寝られるの？」

「寝られるよ。助手席倒せばフラットになるから」

「ふーん……お風呂とかトイレはどうするの？」

「銭湯とか日帰り温泉があちこちにあるし、トイレだって公園とかにあるし、なきゃコンビニって手があるじゃん」

信号待ちした交差点で、壮太は角のコンビニを顎で指した。

「そっか。不便はないってわけね」

「よほどの僻地に行かなければ困ることないよ。泊まる場所を気にしなければ、日本中どこにも行ける。その土地の人と触れ合うのがまた楽しいんだ。もうちょっと車を改造して部屋みたいにしたんだけど、そしたらこのマンションにいること、減るだろうなあ」

「車に住むの？」

「そう、男はさすらわないとね」

「ふーん」

流離うのは男に限らなくてもいいのにと思いながら、そんな生き方も面白いかもしれないと新鮮な刺激を受けていた。今いるこの場所や人に固執することのない生活……それを自然にやっけてのける壮太のような人を自由人と呼ぶのだろう。

「もう着くよ」

壮太に言われ、私は辺りをキョロキョロと見渡した。助手席の窓から見えるのは個人の店やレストラン、ガソリンスタンドなどで、運転席側の景色はずっと林だ。

「病院なんてどこにあるの？」

「すぐそこだよ」

林の切れ間の信号を右折した先に大きな建物が姿を現した。

「ここ、初めて来る人にはわかりづらいね」

それほど鬱蒼とした林ではなかったのだが、場所を知らないでいたら通り過ぎてしまう可能性も無きにしも非ずだ。壮太は何も答えずに建物から一番近い場所に車を止め、小児科のある三階に私を連れていった。

ナースステーションに顔を出すと、壮太は手前にいた三十代前半くらいの看護師に声を掛けた。

「子ども達、元気？」

「お待ちかねよお。壮太先生に早く会いたって騒がしいったらありゃしない」

「嬉しいね。いつものプレイルーム？」

「うん。みんなそこで待ってるわ」

ナースステーションを通り過ぎ、廊下をしばらく歩くとプレイルームがあった。壮太の後ろから部屋に入ると、大きなテーブルを囲んで子ども達が座っているのが見えた。頭に包帯を巻いている子、点滴の管に繋がれたままの子、車椅子に乗っている子など、痛々しい姿に私は一瞬怯んだが、子ども達の表情は皆、明るく生き生きとしていた。そして、壮太を見つけた途端、その瞳をいっそう輝かせた。

「ういーっす」

「ういーっす！」

五歳くらいから小学校二、三年生といった辺りだろうか。五人の子ども達が幼さを十分に残して、壮太と屈託の無い笑顔で挨拶を交わしている。私は入り口近くで立ち止まり、少し距離を置いて絵画教室を見学する事にした。

余命4

「今日は、何描くの？」

壮太がテーブルの上に道具を並べると、一年生くらいの男の子が待ち切れない様子で筆に手を伸ばした。

「何でも好きなもの描いていいぞー」

壮太は全員に聞こえるように指示した。

「えー！ オレ、お父さんの車描く！」

「お、いいねえ」

「昨日、新しい車がうちに来ただって。前のより小さいんだけどカッコいいんだよ」

「そうか。どんなんだか、描いて見せてくれな」

この会話にかぶるように、別の女の子が小さな声を出した。

「わたし、クマさん、描きたい」

「いつも抱っこしてるヤツか？」

「うん、大事なお友だちな」

「可愛いもんな」

壮太は女の子に合わせた優しい口調で受け答えした。他の三人の子ども達にも、壮太はそれぞれに声を掛けながら筆と紙を渡した。

子ども達は画材を受け取ると、思い思いに絵を描き始めた。四つ切サイズの紙いっぱい筆を滑らせている。躊躇することなく思い切り描けるのは、心が解放されている証拠だろう。しばらく子ども達の様子を伺っていた壮太も筆を持った。教えているというより一緒に楽しんでいるといった感じだった。

少し部外者的な寂しさを感じていると、先ほど壮太と話をしていた看護師が私の隣に立った。

「みんな、楽しそうでしょ」

看護師が子ども達に顔を向けながら小声で呟いた。

「病気を抱えているとは思えないです」

私も子ども達に聞こえないよう声を潜めた。

「そうね、見えないわよね。壮太という時はキラキラしてるもの」

「壮太ってすごいんですね」

「人を元気にするオーラみたいなのを持ってるのよ」

「自分の事は元気に出来ないんですか？」

「ん？」

「壮太のこと、聞きました。あまり長く生きられないって」

看護師は私と目を合わせると、「ちょっといいかしら」と、廊下へ誘った。そして、プレイルームの扉をそっと閉めた。

「彼、自分で言ったの？」

「はい」

「なんて言ってた？ 自分の病気のこと、詳しく話したの？」

「いえ、長く生きられないとだけ」

「そう。じゃあ詳しくは話せないけど、さっき頭に包帯巻いていた子がいたでしょ？ 壮太、あの子と同じ病気なの。あの子の方が症状が進んでるけど」

「え……壮太は頭に疾患抱えてるんですか？ それにあのお子さん、壮太と同じ病気ってことは

長く生きられないんですか？」

「そういうことになるわね」

「でも、二人ともすごく元気そうなのに……。あの子だって子ども達の中で一番声が大きくて、包帯が取れたら退院するのかなって思ってたのに」

「人間ってわからないわね。壮太だって二十八で、まだまだやりたいことがあるでしょうに。ただ、私個人の見解なんだけど……」

看護師は周囲を見渡して、誰もいない事を確かめた。

「壮太の場合、まだ病状が酷くないから、もしかしたら助かる道があるかもしれないのよ」

「どういうことですか？」

「壮太を担当している先生もいい先生なんだけど、治療方針で他の先生と意見を対立させることがよくあるの。実際、壮太のこともそう。だけど、私の立場で別の先生の話も聞いてみてとは言えないじゃない。それに壮太って頑固でしょ。自分でこうって決めたら、てこでも動かないところがあるからね。だから、そばで見ている分、歯痒くて」

「この病院で状況的に難しくても、他の病院に行けば治せる先生がいるかもしれないってことですか？」

「その可能性は否定できないわ」

「そんな……生きられる可能性を逃してるなんて……」

「生きることへの意欲が湧くといいんだけど。壮太が長生きしなくてもいいと思っているところがあるの。彼がその考えを持っている以上、私達は何も出来ないからね」

壮太の考えが、とても悲しく私の胸を刺した。治る可能性を諦めてしまう壮太に対し、自分でもわからないくらい心の奥の方で悔しさを溢れさせていた。

眉間から皺の消えない私に、看護師は話を切り替えた。

「壮太と同じ病気の子、とっても前向きなのよ。自分の病気の事は知らないはずなのに、一日を大切に生きてるの。宝物みたいに」

毎日が宝物……。

どこかで聞いたフレーズだった。私は目線を下ろし、遠く記憶を遡っていた。

「あ……」

「どうかしました？」

「い、いえ」

思い出した。私の双子の姉のセリフだった。

姉は病弱で入退院を繰り返し、一年遅れで中学を卒業後、現在に至るまで家事手伝いをしながら生活している。医者から成人式を迎えられるかわからないと言われながら、提案された治療をすべて受け入れ、治るという希望を捨てずに生きてきた。確実に死が近づいている事を知りつつ、1%にも満たない可能性を信じているのだ。

想いは奇跡を起こす……。

これは、時折心が折れそうになる姉に向かっていつも言っていた母の言葉だ。母も奇跡を信じて疑わなかった。そんな家族を持っているから、出逢ってから間もない壮太にこれ程までの苦い感情が湧きあがったのだ、と思った。

しかしもう一方で、心の片隅に封印していた感情も思い出していた。姉の回復を祈りながら、私の中の悪の心が常に姉の存在を否定していた。

お姉ちゃんさえいなければ……。

壮太の言動に思い煩っているうちに、過去の心の痛みがはっきりと蘇った。

「壮太に、下でお茶飲んでるって伝えてください」

看護師にそう告げると、足早にこの場を去った。一人になりたかった。

一階ロビーの長椅子に腰掛けて、私は軽く傷む頭を抱えていた。

「いたいた。お待たせ。どうした？ 具合でも悪くなった？」

荷物を抱えた壮太が戻ってきた。

「ちょっと、頭が痛くて」

「大丈夫？」

「うん、大したことない」

「そか。じゃあさ、近くのピザ屋に行こうよ。うまいところ知ってた」

「あんまり、食欲ないんだけど……」

「残したら俺が食べてやるよ。一口食べれば食欲湧くって。それに普段ろくなもん食ってないんだろ？ 人がご馳走してやるっていう時にちゃんと食べとけ」

今日は朝から何も食べていない。しかも、数日前に泉水に奢ってもらったナポリタン以外まともな食事をしていない。

「奢ってくれるの？」

「金ないってわかってる奴誘っというて、割り勘なんて言えないだろ？」

「う、うん」

「ささ、行こう。子ども達と大笑いしてたら腹減ったー」

車を置いたまま、私は壮太に連れられて病院の裏手にあるピザ屋に向かった。

「ここだよ」

住宅地の中にある一軒家のような店だった。赤いペンキで塗られた外壁と、入り口に置いてあるメニューの書かれたボードだけが普通の家ではないと主張している。それに、庭が垣根で囲まれている為になんか見えず、常連でないと入りづらい雰囲気がある。

「営業してるの？ 店なのに地味だね」

「マスターが自分ちを改造して作った店だからね。本来、ネットとか電話で予約してから来る店

で飛び込み客を当てにしているから、外装を派手にしないらしいよ」

「じゃあ、今日入れるの？ 予約なんてしてないでしょ？ 私が来る事になったのって突然なんだから」

「俺は特別だから大丈夫」

「うわっ、また説得力のない理屈こねてる」

「またってなんだよ。文句があるなら食わせねーぞ」

「わかった、もう言いません」

私はそう言いながら、ペろっと舌を出した。

壮太が店の扉を開けると奥様らしき人が出て来た。

「あれ？ 壮太、久しぶりじゃない。珍しいわね、女の子連れ」

「たまにはね」

「彼女？」

「まさか！ うちの同居人」

「そう、いらっしやい」

「こんばんは」

私は軽く頭を下げた。奥様はにっこりと笑って私に会釈をすると、再び壮太と親しげに会話を始めた。話題についていけない私は、店内を見渡ししながら内装を眺めた。地味な外装とは違い、暖炉のある洋風の別荘とも言えるような贅沢な匂いがした。

私達は屋根付き、ガラス付きの温室のようなテラス席に通された。

「お決まりになりましたらお呼び下さい」

「はい」

会話の最後はありきたりな言葉で締めていた。私は奥様の姿が見えなくなるのを確認してから

「壮太っていろんなところの女の人と仲いいね。しかも年上」

と囁いた。

壮太にはなぜか軽く憎まれ口を叩ける。壮太と同じ時間を過ごすごとに、思った事を深く考えずに口に出せる楽な自分でいられるようになっていた。

余命7

「つまらないこと言っていないで選べ。どれがいい？ 好きなの頼んでいいぞ」

私の戯言の相手はせず、壮太はテーブルに置いてあったメニューを広げた。

「この一番高いのでも？」

「どれよ」

「これ」

私は一枚三千五百円するイタリア産サマートリュフと半熟卵のピザを指差した。

「食べられるんならどうぞ。でかいよ」

壮太は本気にしていない。

「俺は、こっちが食べたいから」

千円のマルゲリータだ。

「壮太、それ全部食べるの？ 私、ピザまるまる一枚食べられないよ」

「だろ？ だからピザとスープとサラダ頼もう。絢那が食べられるだけ食べればいから」

冷たいのか優しいのか、壮太の性格が私には未だによくわからない。

「すいませーん！」

壮太が奥様を呼んだ。奥様は水の入ったコップを運んできて私達の前に置いた。

「マルゲリータとコーンスープ二つとグリーンサラダ。あ、エビグラタンと特製パンも頼んじゃおうか。あと、アイスコーヒー。絢那は？」

「じゃあ、私も」

私は奥様の顔を見ながら答えた。

「えっと、マルゲリータピザとグリーンサラダ、グラタンが一つずつ、コーンスープとアイスコーヒーが二つずつね。パンは二個ずつ持ってくるけど、足りなかったらお代わりしてね。デザートはいいの？」

「そうだなあ、食べてから考えてもいい？」

「うん、いいわよ。アイスくらいだったらサービスするから」

「ありがとう」

奥様がいなくなると、壮太が水を一気に飲み干してから私に訊いた。

「さっき、どうしたんだよ。ロビーで暗い顔してたけど」

「頭が痛かったんだって言ったじゃん」

「それだけじゃないだろ」

やっぱり見透かされている。

「お腹もちょっと痛かった……かな」

「あとは？」

「えっと、腰も痛くて」

「足もなんとなく、だるくなって……」

「ババァか、おまえ」

壮太が勢い良く悪態をついた。

「同居人に下手な嘘つくなよ。信頼関係を保てるかが大事なんだから」

「どうして壮太に話さなくちゃいけないのよ」

「いけなくはないよ？ 話したくなきゃ話さなくていいよ。たださ、悩みを人に話すことで気持ちが落ち着いて、筋道立てて考えられるようになったりするからね。何かあったのなら聞くよって言いたいだけ」

「ふーん」

「それに、落合君や高城さんが自分のことを話すなんて珍しいから、あの二人が信用する相手がどんな人物なのか、ちょっと興味あったんだよ」

「興味って……」

「変な意味じゃないよ？ おまえって実は人の心を解きほぐす凄腕なのかなって思ったんだよ」

「あ、そう……」

「あの二人、どちらかっていうと、自分の殻に閉じこもっちゃう方だろ」

「そうかなあ、泉水さんも聡さんもけっこう喋る方じゃないの？」

「泉水も喋った？ お前、本当に信用されたんだな。でも、気が付かなかった？ 落合君は人の話してることをすべて否定しないの」

「否定しない？」

「弟さんを自分のせいで亡くしたと思ってるから、自分をずっと責め続けてるんだよ。人が言っていることが絶対だから、反対意見を言わないんだ。全部受け入れちゃう」

「他人を受け入れられるなんて良いことじゃないですか」

「自分を責めていることが前提じゃなければね」

「ああ……」

一番大切にしなければならぬ自分を受け入れていないのでは、幸せとは言えないかもしれない。

「どころが、だよ」

「ん？」

「絢那、落合君に怒られなかったか？ あいつ、絢那が気分悪くしなかったか気にしてたんだけど」

私は、聡の言葉を思い返していた。二人でブランコに乗りながら、死にたいと言った私に聡は一喝したのだ。

「怒られた……」

「本気で？」

「本気で」

「なら、やっぱりそうだ。落合君、絢那に心を開いたんだよ。どうでもいい相手になんて、怒りの感情湧かないし」

「そうかな」

「そうだよ。他の人はどうか知らないけど、落合君に限っては絶対そう。絢那、相当落合君の深層心理にぐさっとくるようなこと言ったんだよ」

「そんなことない……と思うけど」

怒られた原因となった言葉など、壮太には口が裂けても言えない。

「あと、高城さん。彼女の事情はよく知らないけど、絢那に助けてもらったのがよほど嬉しかったんだろうな。あのあと俺に、絢那ちゃんに話したら気持ちが整理出来たって言ってたよ。おまえ、やっぱりすげーな」

「私は何もしてないよ」

「何か不思議な力を持ってるんだよ」

「闇の映像が見えるだけだよ」

「いや、それは後から付いてきたもので、何か先天的に備わったものがあるんだよ。それがなんだか気になるな」

「いいよ、私の事は。気にしないで」

そう呟いた時、注文の品が運ばれてきた。一つ一つが結構な量で、四人掛け用のテーブルは隙間のないほど料理と小皿で埋め尽くされた。

「ささ、食べよう。いい匂い」

壮太の関心は料理に移り、私の話題にはそれ以上触れようとはしなかった。壮太は「たくさん食べな」と言いながら、ピザカッターでピザの中央にぎっくりと切り込みを入れた。

無くした鍵で開けられたもの1

ここの材料はどうだとか、食器もすべて外国で見つけてきたものだとか、店に関する壮太のうんちくや、先ほど訪れた病院の子ども達の話などをしながら、私達はすべての皿を空にした。結局、注文したものだけで満腹になってしまいデザートは頼まなかったのだが、奥様が「お口直しに」と自家製バニラアイスをご馳走してくれた。甘いものはご多分に漏れず別腹だった。

「美味かったな。さて、帰るか」

会計を済ませ、店の外に出た。もうすっかり暗くなっていて、携帯の時刻を見ると十時を過ぎていた。

「ごちそうさまでした。ずいぶん、長居しちゃったね」

「他のお客、みんな帰っちゃってたもんな。あそこ、閉店何時だ？」

「十時だって書いてあった気がする」

「あ、そうだった？ 奥さん、何も言ってこなかったね」

「良心的だよな。普通だったら追い出されるのに」

「俺、常連だからな」

「真剣に喋ってるから割って入れなかったんじゃない？ ホントは閉店ですって言いたかったのに」

「そうかなあ。そんなことないだろう。まあ、いいやな。病院に戻ろう。車あるかな」

「なかったら大変じゃない」

「門が閉まってるかも」

「そんなあ！」

「嘘だよ。こういうことはすぐに信じるのな。根は素直な証拠だよ。心を閉じた状態、絢那には辛いだろ」

いつも誰かに支えてもらいながら、いろいろな問題を乗り越えてきた。問題とは言い切れない小さなことでも人に向かって吐き出す癖の付いていた私が、誰の事も信じないと決めてから自分の中ですべてを抱え込むようになったのだ。辛くないわけがない。

「平気だよ」

それでも私は強がっていた。そうすることに決めたのだから……。

病院の敷地内に入ったところで、「あれ？ ない」と、壮太が慌て出した。ズボンのポケットを上から叩いたり、手を突っ込んで何かを探っている。

「どうしたの？」

「キーがないんだよ」

「なんの？」

「車の」

「え？」

「やべー、どこに落としたんだろ。ちょっと、戻ってもいい？」

車の目の前まで来たが、私達はUターンしてピザ屋への道のりを戻り始めた。

「暗くて見えづらいね」

「キーホルダーがじゃらじゃら付いてるから、落ちてればすぐ見つけれられると思うんだけど」

「その前に、大きな音がしそうだもんね」

「そうなんだよ。音しなかったよね？」

「うん」

そう話しながら、私達の日線はずっと地面から離れなかった。

無くした鍵で開けられたもの2

店の前まで来た。

「閉まっている……」

「電話、掛けてみるよ」

壮太が看板に出ていた電話番号を携帯でプッシュした。

「ダメだ……。本日の営業は終了いたしました、だって。ドア叩いても奥まで聞こえねーんだよな」

「病院は？ でも、面会時間過ぎてるから入れないか」

「だろうな。一応、警備員さんに聞いてみるか」

三度、病院に戻り、病院の建物の入り口にいた警備員に事情を話した。案の定、防犯上無理だと言われた。

「どうするの？」

「家にスペアキーがあるから、明日にでも車取りに来るよ」

「明日はいいけど、今日は？ 今、どうやって帰るの？」

「タクシーでも捕まえるか。通りに出れば走ってくるだろ？」

鍵探しを諦め、車で走ってきた道に出た。私達はタクシーのランプが見えないか、たびたび後方を振り返りながら歩道を歩いた。

「車が全然走ってこないよ」

「まあ、焦らずに」

鍵を無くした本人は至って冷静だ。

「あ、バス停！」

私は走ってバス停に近づき、時刻表を見た。

「四〇分後だって……」

「そっかあ。これは歩けてことなんだよ。腹ごなしってことで歩きましょう」

「車で十五分ってことは、どのくらい歩く？」

「一時間くらいじゃない？ 四キロくらいだから。俺だけだったらもうちょい速いけど」

私は思わず立ち止まった。昼間、バイトを探し歩いていた時、石を踏んづけて足首を捻っていた。そのまま歩き続けていたため痛みが酷くなり、夜になってむくんだところへ鍵探して更に歩いたので、もう既に足の痛みが限界だったのだ。

「たまには運動した方がいいよ。さき、歩いて歩いて」

数歩先にいた壮太は振り返りながら言った。

「わかったよ」

足が痛かろうが歩いて帰るしかない。私は諦めてぶっきら棒に答えた。

しばらくの間、壮太と距離を置いて後ろを歩いていた。彼は颯爽と腕を振りながら元気良く進んでいく。余命幾ばくもないとはとても思えない。

「ねね」

私は少し早足で壮太に近づいた。

「ん？」

「壮太も、毎日が宝物？」

「何？ 唐突に」

「さっき看護師さんから聞いたの。子ども達がそう言うって」

「ああ、いい言葉だな。俺もそう思うよ」

「そうなんだ」

「どして？」

「私の姉もそう言ってたの」

「絢那にお姉さん、いるの？」

「うん、双子のね」

「初耳」

「言ってなかったもん」

「絢那と似てる？」

「うん。でも病弱でね、今でもずっと家で療養してる」

「そうなんだ」

「それで思い出したんだけど、アムリタが言ってた言葉と重なったの」

「アムリタの言葉？　なんて言ってたっけ」

「甘えたい時に甘えられなかった哀しみをずっと抱えていたんじゃないかって」

「ああ、そんなこと言ってたね」

「ホントに覚えてるの？」

壮太が話を合わせているだけではないかと思い、たしなめた。

無くした鍵で開けられたもの3

「忘れてたけど、思い出したよ。高校に入る以前に心に深い傷を負ったとも言われてただろ」

「あ、ホントに覚えてる」

「当たり前だろ？ 俺の記憶力を舐めてもらっちゃ困るぜ」

忘れてたくせに、と喉まで出かかったがやめた。

「私の親は入退院を繰り返す姉に掛かりつきりだったの」

「いつ頃から？」

「幼稚園の運動会で、一人でお弁当を食べてたのを覚えてる」

「うわ、それは寂しいね」

「先生と一緒にいてくれたけどね。他の子はみんな親と一緒にだから羨ましいなって思った。あと、一年生の時の劇の発表会も、両親ともいなかったのは私だけだったかもしれない」

「はりきって練習してただろうにな」

「うん、でも半分諦めてたところはあったよ。どうせまた見に来れないだろうなって思った」

「我慢してたんだね」

「家でもそうだった。姉の具合が少しでも悪いと、もう私の話なんて聞いてもらえない。それでも少しの隙を狙って、母親のそばにくっついて一生懸命話しかけてた。でも、母親の手の空いている時って、いつも疲れてる時なんだよね。上の空でしか返事をしてもらえないし、すぐ眠っちゃうの。だから、自分は甘えちゃいけないんだって思った。どんなに辛くても寂しくても耐えなくちゃって。その時からかな、自分の言いたい事をぐっと抑える癖がついたのは」

「それが成長するにつれ、普通になっちゃったんだな」

「友達にもそうだった。何か理不尽なことがあっても反論しなかった」

「距離置いてたんだ」

「うん……。何気ない事なら言えるけど、意見が合わなくなった時の自己主張は出来なくて、だけどそれじゃ苦しくて、別の人に自分の気持ちを話して自分は間違ってるか聞いてたの」

「それが彼に誤解される原因だったわけだ」

「でも、信じてる気持ちは本当だったんだよ」

「壁作ってるって周りも感じるよ。信じてる気持ちが伝わらなかったんじゃないかな」

「たくさんお喋りしてても？」

「肝心な事は話さないんだろ？」

「ああ……うん」

「そうなるって、何考えてるかわからないって受け取られるから、相手も警戒するんだよ」

「警戒？」

「思い出してみ。友達と接してる時は表面的には笑いながら話してたけど、嫌われたくなくて本音を隠してた。でも、落合君や高城さんとは最初から仲良くしようとは思わなかったから嫌われて元々で話してただろ？ 一見、友達との方が距離がないように見えるけど、本当の自分を見せて、人と近い距離にいたのはこの二人といた時なんだよ」

思ったままに本音をぶつけた時、後々自分の中にわだかまりが残らなかった。何よりも聡と泉水が心を開いていることを深く感じられた。他者と自分を否定していたつもりが、そのままの自分を出し、ありのままの他者を受け入れていたのは今の自分かもしれない。

無くした鍵で開けられたもの4

「ちょっと、疲れてきたな」

壮太が歩道から逸れて、シャッターの閉まった店の敷地内に入っていった。吹きさらしになっている順番待ち用のベンチに座ると、壮太は「絢那も座ろう」と私を誘った。

「大丈夫？」

私は壮太が病気のせいで疲れやすいのかと咄嗟に心配になった。

「昔だったらこのくらい、全然平気だったんだけどな。弱くなったもんだ」

隣に座ると、壮太は軽く肩で息をしていた。早くタクシーが通らないかと道路を見ると、どの車も客を乗せていた。

「絢那さ、まずは自分を充実させてみ。人に嫌われまいとか、人に振り向いてもらいたいってことばかりに囚われてて、自分を見失ってるんだよ」

息の落ち着いた壮太が、ぽつりと言った。

「極端な事を言うと、人の事なんてどうでもいいんだ。誰かが喜ぶからとか、役に立ちたいとか、そんなことはどうでもいい。たいていそういう時って、そうしてあげる自分を相手にアピールしたいって気持ちが先に立ってるから自己満足だったりするんだよ。偽善とまでは言わないけど」

「でも、壮太は子ども達の為に絵を教えるんじゃないの？」

「いや」

壮太は即、否定した。

「子ども達の為なんて、一回も考えた事ないよ」

「え？ だって、子ども達の喜ぶ顔を見てると嬉しいって言ってたじゃない」

「そうだよ。でも、喜ばせようとはしてないよ」

「どういうこと？」

「俺は俺の好きな事をただしているだけ。自分が楽しいから絵を描いてるんだ。教えに行ってるってことにはなってるけど、子ども達と一緒に絵を描いてるって言った方が正解。俺が絵を描きたくて描いてたら、子ども達が自分で楽しめるものを見つけられただけだよ」

壮太はさらっと言いつつ、少し得意げな顔をした。でも私は、相手の為にと意識していないことが、なぜ相手の役に立つのか、今ひとつ理解できなかった。

「何かやりたいことが見つかったら、無我夢中でやっごらん。その時、少しでも誰かの役に立てるかなとか雑念持ちちゃダメね。何も考えずにひたすら取り組むんだ。そうすると、見てる人は見てるから。評価されようなんて一つも思わなかった時に『感動して泣けちゃったよ』なんて、人の心を動かしてたってこともあるからね」

「うーん、好きなスポーツをただ夢中でやってただけなのに、見ていた観客が感動してくれたって感じ？」

「ああ、そうそう。でも、そこまでしなくても生活の中にたくさん転がってるんだよ。絢那が美味しそうに物を食ってたら、それ見て俺は『おもしれー』って気分になれるし」

「なにそれ」

「好きな事をしてただけで人を楽しい気分させられるっていう一つの例えだよ。人の役に立とうと思って食事してないだろ？」

「まあね」

「わかりやすかったろ？」

苦笑させられたが、今の説明で十分理解出来た。同時に、腑に落ちないことが心の中に湧き上がってきた。

無くした鍵で開けられたもの5

「壮太の病気、本当に治らないの？」

「そうみたいよ」

「いろんな先生に診てもらった？」

私は、看護師の言葉を思い出していた。

「いや、今行ってるよこの先生だけ。なんで？」

「セカンドオピニオン」

「ん？」

「治らないって言ってる先生のところにも仕方ないんじゃないかな」

「他の病院にも行けってか？」

「そう」

「俺、今の先生、信頼してるからなあ。裏切り行為みたいで嫌じゃん」

「自分の体のことだよ？ その先生がいくら名医でも壮太の病気は治せないって言ってるんなら、他の治せる先生を探すべきだよ」

「俺は別に長生きしたいとは思ってないから」

「どうして、そういうこと言うのよ」

「寿命が短くても、毎日が楽しいからいいんだよ。もう思い残すことないし」

「寿命ってどうして決め付けるのよ。治せる先生、探しもしないくせに」

「俺はさ、今、幸せなんだよ。生活も食うに困らないし、同居人にも恵まれてるし、子ども達が喜んでくれるだけで他には何もいらなんだ」

飄々としている壮太の言葉に、私はだんだん腹立たしさを覚えてきた。

「壮太ってホントに自分の事しか考えないんだね。他の人に辛い思いをさせることに気が付いてない」

「なんでだよ」

「自分の体を大事にしないから」

「それがどうして、人に辛い思いをさせてることになるんだよ。辛くなるとしたら、病状が悪化した時の俺だけだろ？」

「それを周りで見てる人達のことを考えたことないの？ 周りはお医者さんじゃないから、壮太の体を治してあげることができなくて、それでもなんとか生き延びる方法を見つけて欲しいって願ってるのに、壮太は今の先生の言う事を丸呑みして、生きる事を諦めちゃってる。子ども達はそんなことを知らないから今は笑っていられるけど、突然、大好きな先生が目の前からいなくなっちゃったらどうなると思う？ すごく悲しむよ。役に立とうとしないのはいいけど、子ども達から元気を奪う事になるんだよ？ 病気になったら、壮太先生みたいに死んじゃうんだって、病気と向き合う意欲をなくしちゃうかもしれないんだよ？ 壮太は人を不幸にしたいの？」

「そんなわけないじゃん」

「だったら、自分の命をもっと大切にしておいてよ。生死の瀬戸際にいる子ども達を相手にしてるなら、絵を教えることよりも何よりも、壮太自身が病気としっかり向き合って精一杯生きる事が、子ども達に一番勇気を与えられる事なんじゃないの？」

壮太は黙っていた。何も反論しない。

「ああ……人の為に何かしてあげたいとは思っていないんだっけ……」

私は嫌味交じりに呟いた。

「まあね」

壮太はまた、さらりと答えた。

自分の言葉が空回りしている。私はじれったく思いながら、ある事を思い出した。

無くした鍵で開けられたもの6

「コスモス」

「ん？」

「壮太、道端で頑張ってるコスモスが好きだって言ったよね？」

「ああ、よく覚えてたな」

「壮太もコスモスみたいになって」

「どういうこと？」

「コスモスみたいに最後まで諦めないで頑張ってる生きて。頑張ってるコスモスが好きっていうのを聞いた時、この人もそうやって生きてるんだろうなって思ったの。一人で頑張ってるんだなって思った。でも、今の壮太はコスモスに負けてるよ？ 与えられた命をまっとうしようとしてないよ。コスモスは、強い風が吹こうと大雨が降ろうと、自分で水を吸い上げられる限りは生きようと踏ん張ってるんだよ。壮太がそんなんじゃ、壮太に認められて、頑張ってるコスモスが泣いちゃうよ。壮太の生きようとするエネルギーが弱いと、壮太の好きなコスモスが悲しみで枯れちゃうよ」

私は思いつくままを声にした。無我夢中だった。

「おまえ、面白いこと言うんだな。支離滅裂だけど言いたいことはわかるよ。ありがとな、絢那」

壮太はやはり感情を見せず、ただ微笑むだけだった。

「そういう絢那、彼に見せてなかったろ。見せてたら彼も絢那のこと、見直してたかもな」

壮太が急に魁の名前を出した。私の頭の中は瞬時に魁でいっぱいになった。

最初はいつもそばにいて、何かと構っていてくれた魁。徐々に、そばにいてくれる時間が減っていったことで心が不安定になっていった私。バレーを頑張っていたのも、魁に認められたい一心、セーターを編んだりお弁当を作ったりしたのも、彼に褒められたいが為だった。その行為そのものを楽しんでいる自分はいなかった。

「うん。何かやっても彼の反応が気になってた。だから、自分の考えてる事とか言わなかった。恐る恐る言ってみて、思った反応と違うと落ち込んでた」

「辛かったろ？」

「うん……」

「でも、彼が絢那を辛くしたんじゃないのはわかる？」

「え？」

「自分に信念を持っていれば、人の言動なんて関係なくなるんだよ。俺に今、自分の考えをぶちまけた時、俺の反応なんてどうでもよかったろ？」

「うん、考えてなかった」

「たぶんさ、彼に出逢う前の絢那は、いろんなことに今よりもう少し純粹に向き合ってたと思うんだ。まあ、小さい時のトラウマは持ってたにしてもね。でも、心を開き切らないながらも彼に満たしてもらえる心地良さを知って、それを失う恐怖に自分の心のバランスを失ったんだよ。まずは、そこから立ち直らないとね。絢那は何をしている時が一番楽しい？ 何かない？ 夢中になれること」

「写真……撮ることかな。被写体追いかけてシャッター押してると周りが見えなくなるくらい熱中する」

「お。いいじゃん、コンテストとかがあるから応募しても面白いかもよ」

「そんなすごい写真、獲れないよ」

「また自分に枠を作ってる一。自分を信じなきゃ。人の可能性ってのは無限大なんだぜ。やってもないのにどうして出来ないって決めちゃうんだよ」

「そか……」

「とにかく今の絢那は、何も考えずにひたすら何かに打ち込める時間を持つこと。それが習慣になれば、いつの間にか穏やかな自分になってるから」

「ホントに？」

「うん、抱えている問題から離れる事になるから。それが一番の解決方法なんだよ。あ、でも、解決しようって考えないでね。魂の喜ぶ事だけをしてればいい」

「魂の喜ぶ事？」

無くした鍵で開けられたもの7

「それ、おまじないだから覚えといてね。落ち込みそうになったら、魂の喜ぶ事をしようって唱えて」

「いい言葉だね。出来そうな気がする」

「自分を輝かせているだけでいいんだよ。自分の為に生きて、自分を幸せにしてあげて。あとはそのままの自分を受け入れるんだ。人はいろんな感情を持って生きてるんだから、醜い感情だってあって当たり前なんだよ。それはいけないことだって抑え込んでて苦しかったんだから」

「辛かった.....親に甘えちゃいけないって、甘えたい気持ち抑えてて辛かった。彼が他の子と一緒にいるのを見てて、自分のそばにはいてくれないのにつてすごく嫉妬してた」

「それも抑え込んで、平気な振りしてたんだよな」

「うん.....」

「彼に文句が言えたなら楽だったのにな」

「嫌われると思ったから.....」

「自分に自信が持てるようになれば、素直に自分を出せるようになるからな。つか、自分に自信が持てるようになると、嫉妬とか甘えとか、そういう感情がなくなるから」

「気持ちを楽に生きたい.....」

「大丈夫だから。魂の喜ぶ事、いっぱいしような」

「うん。ありがと.....そうする」

私は心を縛っていた鎖がす一つと解けていくのを感じていた。私の表情が緩んだのを壮太は見逃さず、「その調子」と言った。

その時、私の携帯の着信音が鳴った。

「彼から.....メールだ」

魁からの着信に設定してあった曲が流れた。

「おお、すごいタイミング。なんて書いてある？」

まだメールを開く前に壮太が訊いた。

「読むの、怖い」

「代わりに読んでやろうか？」

「いい。自分で読むから」

自分で読むのも怖いけど、人に読まれるのはもっと嫌だ。私は恐々携帯のボタンを押した。受信ボックスの中の魁専用のフォルダをクリック。反射的に私は目を閉じた。

「目、瞑ってたら読めないと思うけど」

壮太がすかさず茶々を入れた。

私は携帯から顔を逸らし、壮太の方を向いてから薄目を開けた。

「一つ、いいこと教えてやろうか。人に自分の心を振り回されない方法」

「そんな方法あるの？」

私は反射的に携帯を閉じた。

「聞きたい？」

「うん」

「極端な発想ではあるんだけど、抜群の効果があるんだよ。気丈になれる」

「もったいぶらないで教えてよ」

「ハハ、もったいないもん。とっておきの方法だから」

「教える気ないでしょ」

「あるよ。いい？ 聞き逃すなよ」

「うん」

頷いた私の耳元に壮太は顔を近づけた。そして、小声で呟いた。

無くした鍵で開けられたもの8

「すべての人は自分に対して無責任だと思え」

「は？ 随分乱暴だね」

あまりにも突飛な言葉に、私は思わず眉を潜めた。

「まあね。でも、人ってさ、なんだかんだ言って自分が一番大切って思ってるだろ？」

「うーん……」

「悪い事じゃないんだよ。逆にそうじゃないと人の事も大切に出来ないし。自分を一番大切に思うって大事なことなんだ。自分を大切にしているといつも穏やかでいられて、心に余裕が出来るしね」

「うん」

「余裕が出来る分、周りにも目を向けられるようになるんだ。そうすれば、困ってる人がいたら助けてあげたいって自然に思える。今まで自分を犠牲にしてた絢那が自分しか信じられないと思った時、無意識のうちに自分を大切に始めたんだよ。だから、泉水のことを助けてあげられた。それまでは人がどう思ってるかってことばかりに囚われてたから、助けてあげる事なんて出来なかった。そうじゃない？」

「そうかもしれないけど……。でも、自分を大切にすることと人を無責任に思うって事がどう繋がってるのよ」

「だからね、人は自分に対して無責任だって思うことは、責任に関することだけは人を信用するなってことなんだよ」

「ん？」

「何か事が起きた時に、この人は誠実だし自分と仲良しだから最後までちゃんと支えてくれるだろうって当てにしたとするだろ？ そしたら、その人にも何か起きて自分の事で精一杯になっちゃったとするじゃない」

「うん」

「途中まですごく親身だったから心を委ねてたのに、突然身を翻されたらどう思う？」

「心の支えを失って、どうしたらいいかわからなくなる」

「そうだろ？ だけど、落ち込んだのは自分だし、元々この人の問題でも何でもなかったんだから、この人を責めるのは筋違いってもんじゃないか？」

「辛い時に人に頼るなってこと？」

「いや、軽く愚痴を言うくらいだったらいいと思うけど、この人は私の心の支えって心底頼り切っちゃうと、支えがなくなった時に何倍も自分が辛くなるんだよ。頼らなければ、そっぽを向かれた事で更に傷つくことはなかったんだから」

「ああ、そっか……」

「でも、最初は親身になってて、途中で放り出すっていうのは責任感があるとは言えないよな」

「うん、そう思う」

「だけど、現実的にはそうじゃない人の方が断然多いんだよ」

「え、そうなの？」

「でもね、意識的に無責任になってるわけでもないんだ」

「無意識に？」

「うん、どんなに思いやりがある人だって、他人のことを一日中考えてはいないだろ？
そんなことしてたら、他人のことで人生終わっちゃう」

「うーん……でもさ、責任感のない人ばかりだなんて。世の中、自己中人ばかりってことになるじゃん」

「自己中でいいんだよ。自己中心。悪い意味で使われてるけど、自分の人生、自分が主人公なんだよ。他人の思想の中で生きてる人なんて誰もいない」

無くした鍵で開けられたもの9

「まあ、そうかもしれないけど」

「俺が言いたいのはね。自己中でいいから、その代わり、人に責任を負わせようって思うなってことなんだよ。自分の事はすべて自分の責任って考えてれば、人に期待しない分、楽にしていられるよ」

「ああ、私、いろんな人に期待してたかもしれない。彼氏としての魁。親友としての香里。身元引受人としての叔母。父親代わりの店長」

「それぞれの人に、絢那が小さい頃、親にしてもらえなかった事を求めてたんじゃないかな。だけど、皆、自分が主人公で生きてるから、絢那の期待通りにはしてくれなかった。だから、更に傷ついた」

「人に求めすぎてたんだね。それで自分で自分の首、締めてたんだ」

「そう。だから、人は無責任だって思えば人に期待しなくなるだろ。ちょっと、人を信用してないみたいな言い方になっちゃうけど、人に求める気持ちがなくなるから、精神的に自立出来るんだよ。この人は自分に対して無責任だからこういう行動を取ったんだ、仕方ないなって寛大になれる」

「人を許せるようになるってことだね。私に出来るかな……」

「大丈夫。絢那には出来るよ。元々優しい面を持ってるんだし。人を疑うんじゃなくて、自分が自立して楽になる事が目的だから。それは忘れないで」

「うん。わかった」

人に余計な期待をしないことで、自分は楽になれる。心を広く持てる。そう思ったら、背負っていた荷物を下ろしたように心が軽くなった。

「絢那、また寂しくなったら気持ちを押し殺さないで、自分に、寂しいね、辛いねって言いながら、その気持ちを抱き締めてやりな。それで大声で泣くといいよ。泣ける映画とか見れば自分とは違う世界も同時に見れて気分が変わるから」

「うん、そうする」

「俺に言ってもいいよ。俺は責任感の強い男だから」

「いや、いい。期待しない」

「アハハ、それでいい。あとさ、目を閉じなければ闇の声を聞かずに済むんだろ？ 人は裏表があるのが当たり前なんだから、知らなくていいことは知らない方がいいんじゃないか？」

「うん、知っていいことなんてなかった」

「いらぬ能力だよ。使わないでいたら、消えてるかもしれないし」

「退化って奴？」

「いや、進化だ」

私達は声をあげて笑った。

「それにしても、どうして壮太の闇の声は聞こえなかったんだろう」

「俺？ わかんないけど、いつも記憶をクリーニングしてるからかな」

「クリーニング？」

「人との間に問題を感じた時、それは自分の心を投影したものだから、気付かせてもらってありがとう、ごめんなさい、許してねって唱えるんだよ。そうすると、不思議な事に問題が消えてなくなるんだ」

「よくわからない……」

「潜在意識でのことだから、理解できなくて当然みたい。俺もわからないし。ただ、そうすると人を責める気持ちを抱かなくなるよ」

無くした鍵で開けられたもの10

「そうなんだ……。聡や泉水さんの闇の音が聞こえなかったのも壮太の影響なのかな」

「いい波動っていうのは伝染するから、そうかもね」

「そか……。うーん、でもやっぱりよくわからないや」

「いいんだよ。難しく思えることは今の絢那には必要のないものだから。今の話は気にしないで」

「うん」

「絢那に必要なものとなった時に、いつかまたこの話をきっと耳にするよ。その時にいろいろと調べてみるといいよ。これに関する本がいっぱい出てるから」

わからないままの話に私はすっきりしなかったが、その「いつか」が来る時までこの話は封印することにした。

「ほら、彼のメール、読んでみ。もう怖くないだろ」

「うん、怖くない」

「その前に聞くけど、絢那は彼の事を今、どう思ってるの？」

携帯を開きかけた私に壮太が言った。

「魁のこと？」

「うん。彼の気持ちが云々というより、絢那自身の気持ちをはっきりさせといた方がいいと思うんだよ」

「うん……」

「絢那が見た悲しい光景は本物かもしれない。でも、それで諦められるような想いだったのなら、絢那の気持ちもその程度のものだったってことだから」

「私は……」

付き合い始めてから、魁は私の知らないいろいろな世界を教えてくれた。どんなことにも精一杯持てる力を出し切る彼を思うだけで、私も頑張ろうという気になれた。彼と一緒にいるだけで、私は生きている事を心から楽しいと思えた。

「ただ淋しいからそばにいてほしいっていうんだったら他の男でもいいんだよ。そうするか？」

「……いやだ。魁じゃなきゃ」

「よし、それならいい。そこまで真剣になれる人がいるって幸せなことなんだぞ。人は神様じゃないんだから、傷つけ合うのが当たり前。それを許し合って、乗り越えて、本物の二人になっていくんだから」

「なんだか、悟ってるね」

「そりゃそうだよ。俺は神様に近い人間だから」

「神様に近いって？」

「長生きできないから」

「また、そういうこと言う！」

「アハハ。別の病院にも行くよ。治す努力しないと、子ども達に顔向けできないもんな。でもさ、俺、死ぬのが怖くないんだよ」

「どうして？」

「毎日楽しいからかな。やりたいことやってるし、食いたいもの食ってるし。病気が発覚するまで、仕事にしても寝る間がないくらい突っ走ってきたからさ。けっこう俺、やり手だったんだよ。営業やってたんだけど、毎月必ずトップだった。すげえ高給取りだったんだよ」

「絵描きさんじゃなかったんだ」

「絵は趣味。今はそれが主流になっちゃったけど」

「そうだったんだ。なんか、意外」

「俺、営業やってたように見えない？ 絢那に部屋を借りさせる時の話術、すごくなかった？」

「ああ、そう言えば、最初は核心をつかないで、じわじわ周りから攻めるような話をしてたね。未成年だって知ってるから、不動産やさんを巻きながらの勧誘だったしね」

「人を悪者みたいに言うなよ」

「褒めてるんだよ」

「褒め言葉には聞こえねーよ」

私はムキになって怒った壮太を見て大笑いした。壮太も嬉しそうだった。

無くした鍵で開けられたもの11

「あ、メール読もうとしてたんだっけ」

「うん」

「なんて書いてある？ ショックな事が書いてあっても、めげるんじゃないぞ」

「大丈夫だよ」

「片想いでもいいんだよ。そっぽ向かれたって、自分が好きかどうかには関係ない」

「決め付けないでよね、嫌われたって」

「わかんないぞー？」

「魁の性格からして、嫌いな人には関わりを持とうとしないと思うんだ」

「男はめんどくさがりだからな」

「でしょ？ だから、嫌な事は書いてないと思うんだよ」

「嬉しい事も書いてないかもだけどな」

「またあ！」

「だって、期待させるとがっかりするだろ。こういう時は、なるべく最悪な事を考えといた方がいいんだ」

「壮太って案外、慎重派だね」

「俺は石橋を叩いて割っちゃうタイプなんだよ」

「複雑な性格だね。楽観的かと思えば、慎重だったり」

「ナイーブってことだな」

「じゃあ、そういうことにしとく」

「偉そうだなあ。今までの絢那と全然違う」

「壮太がそうさせたんだよ」

「うじうじしてるより、その方がいいよ。彼にもその調子でいきな」

「うん」

私は、これまでに感じたことのないエネルギーのようなものを自分の中に感じていた。すべて壮太のおかげだと思った。壮太に出逢い、あのマンションに住み、泉水や聡、アムリタと関わりを持てたことで、生まれてからこれまでの辛いと感じていた出来事を、自分の成長に繋げる必要なものだったと思えるようになった。いつも何かに怯え、後ろ向きでいた私を、壮太がぐるりと前に向かせてくれた。まだ、前を向けただけで一歩も踏み出してはいないが、もう大丈夫と言える自信が今の私にはある。

「壮太」

「ん？」

「ありがとう」

「アハハ、俺は何にもしてないよ」

壮太は目を細くしてニヤリと笑うと、照れを隠すように私の髪をくしゃっと撫でた。

完